

大阪市住吉区

# 遠里小野遺跡発掘調査報告

## I

杉本町団地建替に伴う発掘調査報告書



2006.10

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市住吉区

# 遠里小野遺跡発掘調査報告

## I

杉本町団地建替に伴う発掘調査報告書



2006.10

財団法人 大阪市文化財協会







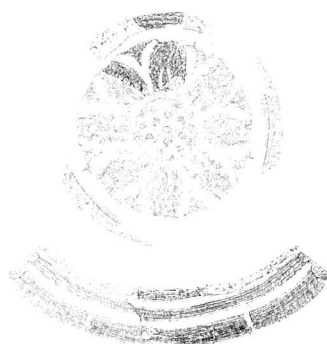
瓦敷き SX2b01

大阪市住吉区

# 遠里小野遺跡発掘調査報告

## I

杉本町団地建替に伴う発掘調査報告書



2006.10

財団法人 大阪市文化財協会



## 序 文

当協会から、はじめて『遠里小野遺跡』を書名に冠する報告書を刊行することとなった。

従来から調査地付近では瓦の採集・出土がみられ、古代寺院「榎津寺」の存在が想定されていた。今回の調査では寺院に係わる遺構そのものを発見することはできなかったが、多くの古代瓦を得、榎津寺の存在に具体性を与えることができた。

大阪市、なかでも上町台地上には、四天王寺をはじめとして多くの古刹が存在したことを文献史料や発掘調査の成果からうかがうことができる。古代大阪の歴史を考える上で、寺院の動向を解明することが重要な役割を果たすことは論を待たない。榎津寺がそうであるように、残念ながらそのほとんどが現存しないが、今後とも着実な調査の積み重ねにより具体像に迫る日が来ることを期待したい。それによって、より表情豊かに大阪の古代史を描くことが可能となるだろう。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力をいただいた大阪府住宅供給公社ならびに関係者各位に心より感謝の意を表したい。

2006年10月

財団法人 大阪市文化財協会  
理事長 脇 田 修



## 例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市文化財協会が大阪府住宅供給公社の委託を受け、2006年2月2日～5月19日に住吉区遠里小野3丁目で実施した杉本町団地建替に伴う発掘調査(OR05-1次、ORは遠里小野遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪府住宅供給公社の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会 技術管理・保存科学担当課長 田中清美、および文化財研究部 学芸員 市川創が主として担当した。
- 一、本書の執筆および編集は、文化財研究部次長 南秀雄・難波宮調査事務所長 藤田幸夫の指揮のもと、主として市川が行った。ただし、自然科学分析の結果について報告する第Ⅲ章第5節については、パリノ・サーヴェイ株式会社が執筆した。英文目次は市川が作成し、アメリカ合衆国ワシントン大学のJames Scott Lyons氏の校正を受けた。
- 一、古代瓦の理解や整理方法については、文化財研究部事業担当係長 佐藤隆・同主任学芸員 黒田慶一・同調査員 宮本佐知子の助言を得た。金属加工関連遺物・遺構の埋土および赤絵の蛍光X線分析については文化財研究部保存科学担当係長 伊藤幸司がこれに当り、これらの遺構・遺物についての整理方法や理解についても伊藤の助言を受けた。また、岩石についての観察は、文化財研究部学芸員 小倉徹也が行った。
- 一、基準点測量は株式会社アジア航測に委託した。
- 一、遺構写真は主として田中・市川が撮影し、一部の撮影を西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。遺物写真の撮影は、楠華堂内田真紀子氏に委託した。
- 一、種実・昆虫同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、報告書の作成に当っては、網 伸也氏・上田 睦氏・上原真人氏・尾野善裕氏・大脇 潔氏・片山まび氏・小林 仁氏・近藤康司氏・島崎久恵氏・妹尾周三氏・陳 馨氏・出川哲朗氏・西村香織氏・前田洋子氏・八木久栄氏(順不同)から貴重な御教示および資料提供を賜った。記して深く感謝の意を表する。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏から多くの援助を得た。心より感謝の意を表したい。

## 凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学の用語、および断面図に示した岩相の基本パターンは、[趙哲済1995]に準じる。
2. 本書における地層名は第1層・第2層…と表記する。また、本文中では各遺構埋土の地層名を○付の数字で示し(例：①層)、調査地の地層名と区別する。図中では○を付していない。
3. 遺構名の表記は、堀・柵(SA)、竪穴建物・掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壇(SK)、柱穴・ピット(SP)、その他(SX)の分類記号の後に、遺構面ごとに通し番号を付している。
4. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P. 値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP + ○mと記した。また、挿図中の方位はすべて座標北を使用した。
5. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は標準土色帖[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。
6. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。古墳時代の須恵器(TK217型式まで)：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会1992]、瓦器：[尾上実1983] (ただし実年代観については[森島康雄1992]に従う)。
7. 本書で使用する中世の時期区分は以下のとおりである。中世前期：平安時代後期～鎌倉時代(1086～1333年)、中世後期：南北朝～室町時代(1333～1573年)。
8. 図示した土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。

# 本文目次

序文

例言

凡例

|     |               |    |
|-----|---------------|----|
| 第Ⅰ章 | 調査に至る経緯と経過    | 1  |
| 1)  | 調査に至る経緯       | 1  |
| 2)  | 調査の経過         | 1  |
|     | i) 西区         |    |
|     | ii) 東区        |    |
| 3)  | 報告書の作成        | 2  |
| 第Ⅱ章 | 遺跡の立地と環境      | 3  |
| 第1節 | 地理的環境         | 3  |
| 第2節 | 歴史的環境と既往の調査   | 5  |
| 第Ⅲ章 | 調査の結果         | 9  |
| 第1節 | 層序と各層出土の遺物    | 9  |
| 1)  | 層序            | 9  |
| 2)  | 各層出土の遺物       | 12 |
| 第2節 | 古墳～飛鳥時代の遺構と遺物 | 15 |
| 1)  | 概要            | 15 |
| 2)  | 調査区西半の遺構と遺物   | 15 |
|     | i) 竪穴建物とその周辺  |    |
|     | ii) 土壌        |    |
|     | iii) 溝        |    |
|     | iv) 落込み       |    |
| 3)  | 調査区東半の遺構と遺物   | 26 |
|     | i) 掘立柱建物      |    |
|     | ii) 柵         |    |
|     | iii) 土壌       |    |
|     | iv) 溝         |    |
|     | v) 落込み        |    |
| 4)  | 小結            | 36 |
| 第3節 | 中世の遺構と遺物      | 38 |
| 1)  | 概要            | 38 |
| 2)  | 平安時代後期の遺構と遺物  | 39 |
|     | i) 瓦敷き        |    |
|     | ii) 掘立柱建物     |    |
|     | iii) 井戸       |    |
|     | iv) 土壌        |    |
|     | v) 溝          |    |

|                    |                |
|--------------------|----------------|
| 3) 室町時代の遺構と遺物      | 49             |
| i) 井戸              | ii) 土塋         |
| iii) 溝             | iv) 瓦溜まり       |
| 4) 小結              | 53             |
| 第4節 瓦塼類            | 56             |
| 1) 概要              | 56             |
| 2) 出土した瓦塼類の内容      | 56             |
| i) 軒丸瓦             | ii) 軒平瓦        |
| iii) 丸瓦・平瓦の分類      | iv) 丸瓦         |
| v) 平瓦              | vi) 隅平瓦        |
| vii) 塼             | viii) 不明品      |
| 3) 小結              | 71             |
| i) 瓦の組合せ案と時期区分     | ii) 各期の実年代観と評価 |
| 第5節 自然科学的分析        | 77             |
| 1) はじめに            | 77             |
| 2) 試料              | 77             |
| 3) 分析方法            | 77             |
| i) 種実同定            | ii) 昆虫同定       |
| 4) 結果              | 77             |
| i) 種実同定            | ii) 昆虫同定       |
| 5) 考察              | 80             |
| 第IV章 「榎津寺」について     | 83             |
| 1) 発掘調査からの知見       | 83             |
| 2) 文献史料からの検討       | 83             |
| 3) 榎津寺出土瓦の特色       | 85             |
| 第V章 まとめ            | 87             |
| 1) 古墳時代後期～飛鳥時代前半   | 87             |
| 2) 飛鳥時代後半～平安時代前・中期 | 87             |
| 3) 中世以降            | 87             |
| 引用・参考文献            | 89             |
| あとがき・索引            |                |
| 英文目次               |                |

# 原色図版目次

- |   |                           |   |                    |
|---|---------------------------|---|--------------------|
| 1 | 榎津寺の瓦                     | 4 | 竪穴建物と中世の輸入陶磁器      |
| 2 | 瓦の分類                      |   | 上：竪穴建物 SB301（南東から） |
| 3 | 灰・炭を敷いた土壌                 |   | 下：中世の輸入陶磁器         |
|   | 上：SK301/灰・炭層検出状況（北東から）    |   |                    |
|   | 下：SK311/灰・炭層を半裁した状況（北西から） |   |                    |

# 図版目次

- |   |                        |    |                         |
|---|------------------------|----|-------------------------|
| 1 | 地層断面                   | 6  | 室町時代の遺構                 |
|   | 上：西調査区西壁（南東から）         |    | 上：井戸 SE2a01 断面（南から）     |
|   | 中：東Ⅲ区南壁（北から）           |    | 中：土壌 SK2a02 断面（北から）     |
|   | 下：西調査区深掘り断面（南東から）      |    | 下：瓦溜まり SX2a01 検出状況（南から） |
| 2 | 第4層上面検出状況              | 7  | 古墳～飛鳥時代の遺物（一）           |
|   | 上：西調査区（西から）            | 8  | 古墳～飛鳥時代の遺物（二）           |
|   | 下：東Ⅰ区（南西から）            | 9  | 中世の遺物                   |
| 3 | 古墳時代の遺構                | 10 | 包含層出土遺物・漁具              |
|   | 上：東Ⅱ・Ⅲ区 第4層上面検出状況（東から） | 11 | 瓦埴類（軒丸瓦）                |
|   | 中：溝 SD306 遺物出土状況（南西から） | 12 | 瓦埴類（軒丸瓦－既往の出土・採集資料）     |
|   | 下：溝 SD307 遺物出土状況（南から）  | 13 | 瓦埴類（軒平瓦）                |
| 4 | 平安時代後期の遺構（一）           | 14 | 瓦埴類（軒平瓦・軒丸瓦の製作技法など）     |
|   | 上：溝 SD2b01（西北西から）      | 15 | 瓦埴類（丸瓦）                 |
|   | 下：瓦敷き SX2b01 検出状況      |    |                         |
|   | （西調査区部分／南から）           |    |                         |
| 5 | 平安時代後期の遺構（二）           |    |                         |
|   | 上：庇付き建物 SB2b01（南から）    |    |                         |
|   | 中：総柱建物 SB2b04（北から）     |    |                         |
|   | 下：井戸 SE2b01 断面（北から）    |    |                         |

# 挿 図 目 次

|  |                                 |
|--|---------------------------------|
| 図1 遠里小野遺跡の位置……………1                           | 図35 SX303・304断面図……………34         |
| 図2 調査区の配置……………1                              | 図36 SX303・304出土遺物……………35        |
| 図3 周辺の遺跡……………3                               | 図37 中世の遺構分布……………37              |
| 図4 大阪平野とその周辺の地形分類……………4                      | 図38 平安時代後期(b期)の遺構分布……………38      |
| 図5 周辺の調査地……………5                              | 図39 瓦敷きSX2b01実測図および出土遺物……………39  |
| 図6 YM82-31次調査の出土遺物……………7                     | 図40 SB2b01実測図……………41            |
| 図7 遠里小野遺跡の大型掘立柱建物<br>(OR88-1・89-16次調査)……………7 | 図41 SB2b02・03実測図……………42         |
| 図8 地層と遺構の関係……………9                            | 図42 SB2b04実測図……………43            |
| 図9 調査地層序模式図……………10                           | 図43 SB2b01・03等出土遺物……………44       |
| 図10 調査地模式柱状図および第8層で<br>観察されたラミナ構造……………11     | 図44 SE2b01実測図および出土遺物……………45     |
| 図11 第4層上面の標高……………11                          | 図45 SK2b01～03実測図および出土遺物……………46  |
| 図12 各層出土の遺物(1)……………12                        | 図46 SD2b01・03・2a01～03断面図……………47 |
| 図13 各層出土の遺物(2)……………13                        | 図47 SD2b01～03出土遺物……………48        |
| 図14 古墳～飛鳥時代の遺構分布……………14                      | 図48 室町時代の遺構分布……………49            |
| 図15 西調査区北西部の遺構……………15                        | 図49 SE2a01実測図……………49            |
| 図16 SB301・SD301実測図……………16                    | 図50 SK2a01～04実測図……………50         |
| 図17 SB301出土遺物……………17                         | 図51 SE2a01・SK2a02・03出土遺物……………51 |
| 図18 SB302実測図……………18                          | 図52 SD2a03出土遺物……………52           |
| 図19 SB303実測図……………18                          | 図53 SX2a01実測図……………53            |
| 図20 SD302～306実測図および出土遺物……………19               | 図54 SK2a03出土赤絵94の釉薬組成……………55    |
| 図21 SK301実測図……………21                          | 図55 軒丸瓦……………58                  |
| 図22 SK302・303実測図および出土遺物……………22               | 図56 既往の出土資料……………59              |
| 図23 SK304～310実測図……………23                      | 図57 軒丸瓦の接合技法……………61             |
| 図24 SD307中央部実測図……………25                       | 図58 軒平瓦(1)……………62               |
| 図25 SD307出土遺物……………25                         | 図59 軒平瓦(2)……………63               |
| 図26 調査区東半の遺構分布……………26                        | 図60 軒平瓦(3)……………64               |
| 図27 SB304実測図……………27                          | 図61 丸瓦・平瓦各分類の布目(実寸)……………66      |
| 図28 SB305・306実測図……………28                      | 図62 丸瓦(1)……………67                |
| 図29 SB307実測図……………29                          | 図63 丸瓦(2)……………68                |
| 図30 SA301実測図……………29                          | 図64 平瓦(1)……………70                |
| 図31 SK311実測図および出土遺物……………30                   | 図65 平瓦(2)……………71                |
| 図32 SK312～315実測図……………32                      | 図66 平瓦(3)・隅平瓦・塼・不明品……………72      |
| 図33 SD309～312断面図……………33                      | 図67 布目密度の対応……………74              |
| 図34 SD309・310出土遺物……………33                     | 図68 瓦の組合せと時期……………75             |
|  | 図69 小字名の復元……………84               |
|  | 図70 発掘調査成果から見た調査地付近の地形……………85   |

## 表 目 次

|  |    |                                |    |
|--|----|--------------------------------|----|
| 表 1 遠里小野遺跡のおもな出土遺物および<br>山之内遺跡西地区の古代瓦出土地 | 6  | 表 6 丸瓦・平瓦各分類の出土量 1 (重量による集計)   | 66 |
| 表 2 瓦の出土量                                | 56 | 表 7 丸瓦・平瓦各分類の出土量 2 (角部の数による集計) | 66 |
| 表 3 軒平瓦・軒丸瓦一覧                            | 57 | 表 8 種実遺体同定結果                   | 78 |
| 表 4 丸瓦・平瓦ほか一覧                            | 65 | 表 9 昆虫遺体同定結果                   | 79 |
| 表 5 丸瓦・平瓦の分類                             | 66 |                                |    |

## 写 真 目 次

|                 |   |                    |    |
|-----------------|---|--------------------|----|
| 写真 1 調査風景       | 2 | 写真 5 瓦当表面の木目痕(117) | 57 |
| 写真 2 現地説明会のようす  | 2 | 写真 6 大型種実遺体        | 81 |
| 写真 3 重機による埋戻し作業 | 2 | 写真 7 昆虫遺体          | 82 |
| 写真 4 第 1 層の畝・畝間 | 9 |                    |    |



## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

### 1) 調査に至る経緯

遠里小野遺跡は、弥生時代から室町時代に至る複合遺跡である。大阪市住吉区の南端に位置しており、南側には大和川、そして堺市が接している。

このたび大阪府によって、周知の遺跡範囲内である遠里小野3丁目において杉本町団地住宅改善事業が計画・施工されることとなった。これを受けて、大阪市教育委員会による試掘調査が行われ、地表下0.4m以下に地山層が残存し、また、部分的には古墳時代から古代に属すると思われる包含層も残存することが明らかとなった。

この結果について、大阪市教育委員会は発掘調査が必要であるとの見解を示した。これを受け、大阪府住宅供給公社と大阪市教育委員会は発掘調査の実施について協議を行い、大阪府住宅供給公社より大阪市文化財協会が発掘調査および本報告書の作成を受託した。

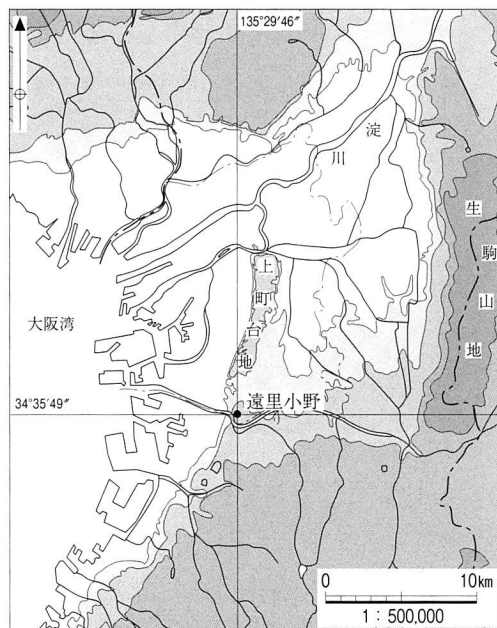


図1 遠里小野遺跡の位置

### 2) 調査の経過

調査地内ではかつてガス管理設に際し立会調査が行われ、古代の遺物を含む包含層や、瓦が出土することを確認している[大阪市文化財協会1985]。今回は東西に長い調査区設定であったため、調査区を東西に二分し、それぞれ西調査区・東調査区と呼称した。東調査区については、調査の工程上、さらにⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区に細分し調査を行った(図2)。全調査区に共通する作業として、まず、2006(平成18)年2月2日から準備工を開始した。作業の都合上、西区から調査を開始し、途中、3月14日には基準点測量を実施した。5月1日には現地説明会を開催し、約200名の参加があった(写真2)。調査の終了後、埋戻し作業・撤収作

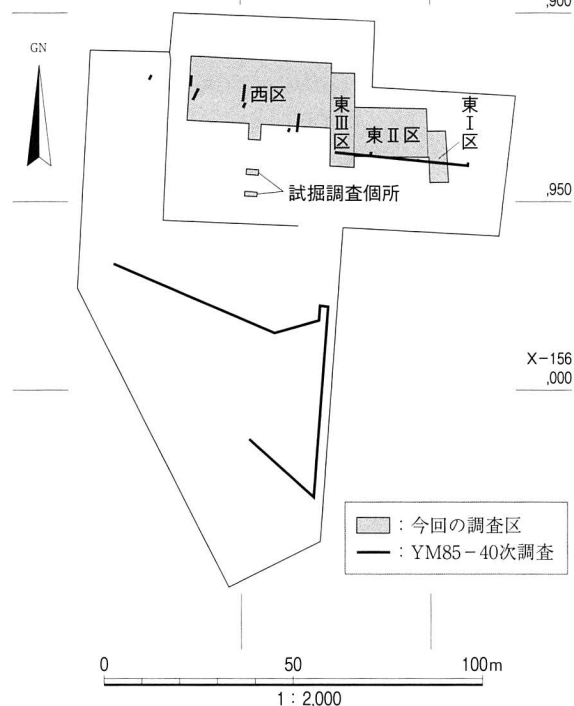


図2 調査区の配置

業を含め5月19日には現地におけるすべての作業を終了した。各調査区の調査経過は以下のとおりである。

i)西区

重機掘削は現代盛土および現代作土層までを対象として、2月6日から開始し、同10日まで行った。その後は、適宜人力による掘削・遺構検出・同記録などを行ったが、途中、建設工事との関係上、東区の調査を先行して進めた。平面的な検出作業は地山層である第4層(第Ⅲ章第1節参照)上面まで行



写真1 調査風景



写真2 現地説明会のようす



写真3 重機による埋戻し作業

した。また、地層の堆積状況を確認するために一部で重機による深掘りを行い、TP+8.5mまでの壁面で地層の観察を行った。以上の過程を経て、5月19日に調査を終了した。

ii)東区

東区については、I区を先行して調査し、その後Ⅱ・Ⅲ区の調査を行った。重機掘削は西区と同様に現代盛土および現代作土層を対象とし、I区については3月7日に、Ⅱ・Ⅲ区については3月23日から同29日にかけて行った。その後は、第4層上面までを対象として適宜人力による掘削・遺構検出・同記録などを行った。途中、壁面に露出した焼土および炭の性格を追求するため、調査区を一部南側へ拡張した。以上の過程を経て、I区は3月20日に、Ⅱ・Ⅲ区は4月19日に調査を終了した。

3)報告書の作成

報告書の作成作業に当っては、図面の整理や製図、遺物の洗浄・接合・実測作業を進めるとともに、金属加工関連遺物・陶磁器などについて、蛍光X線による分析作業を行った(註1)。古代の瓦については軟質なものが多かったため、資料の重要性を考慮し保存処理を施した。また、特徴的な遺構埋土については、洗浄を行い微細な遺物の捕集に努めた。

註)

- (1)分析に当っては、大阪歴史博物館に設置された微小部測定用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製EagleⅡ改良型)を使用した。

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

遠里小野遺跡は、大阪市住吉区遠里小野を中心として沢之町の一部を含み、南北約1.0km、東西約0.8kmの範囲に広がる。南は大和川によって画され、東は山之内遺跡と接している。北側には南住吉遺跡ほか、多くの遺跡が立地している(図3)。これら住吉区域に展開する遺跡群については、墳丘が残存する帝塚山古墳や、住吉大社旧境内遺跡・荘厳浄土寺境内遺跡・津守廃寺といった寺社など、モニュメンタルなものが多いことがその特徴として挙げられる。

本遺跡は河内平野と西大阪平野を分かち、おおよそ南北に延びる上町台地の南端付近に位置している(図4)。このため、台地脊梁部に近い遺跡東部の標高が高く、遺跡全体は北西に向って低くなる。この標高は近現代の造成によって改変されたものではあるが、大局的には本来の地形を反映していると考えてよい。また、上町台地の地質については、その大部分がこれまで中位段丘によって構成され



図3 周辺の遺跡(『大阪市文化財地図』平成13年度版を使用)

ると考えられてきた(図4)。これに対し、台地を東西に二分し、西部を中位段丘面、東部を低位段丘面とする説があり[宮地良典ほか1998]、このことは発掘調査による知見からも検証されている[小倉徹也2002]。

本遺跡の西側は急傾斜で落ち、難波砂堆そして埋立地を経て大阪湾へと至る。発掘調査の結果からかつての海岸線を特定するには至っていないが、本遺跡西端付近にこれを想定する説がある[梶山彦太郎1986]。後述するように、本遺跡では土錘・イイダコ壺といった漁具の出土が特徴的であり、海産資源を積極的に利用した集落のあり方を示している。また、当地に残る地名「榎津」が示すように、港湾としての機能を有し発展したことが推定される地域でもある。

このように、本遺跡周辺は台地と海という対照的な土地条件を兼ね備えた場所に位置する。先に触れたモニュメンタルな構造物が建設される背景として、こういった土地条件が影響を与えたことは想像に難くない。

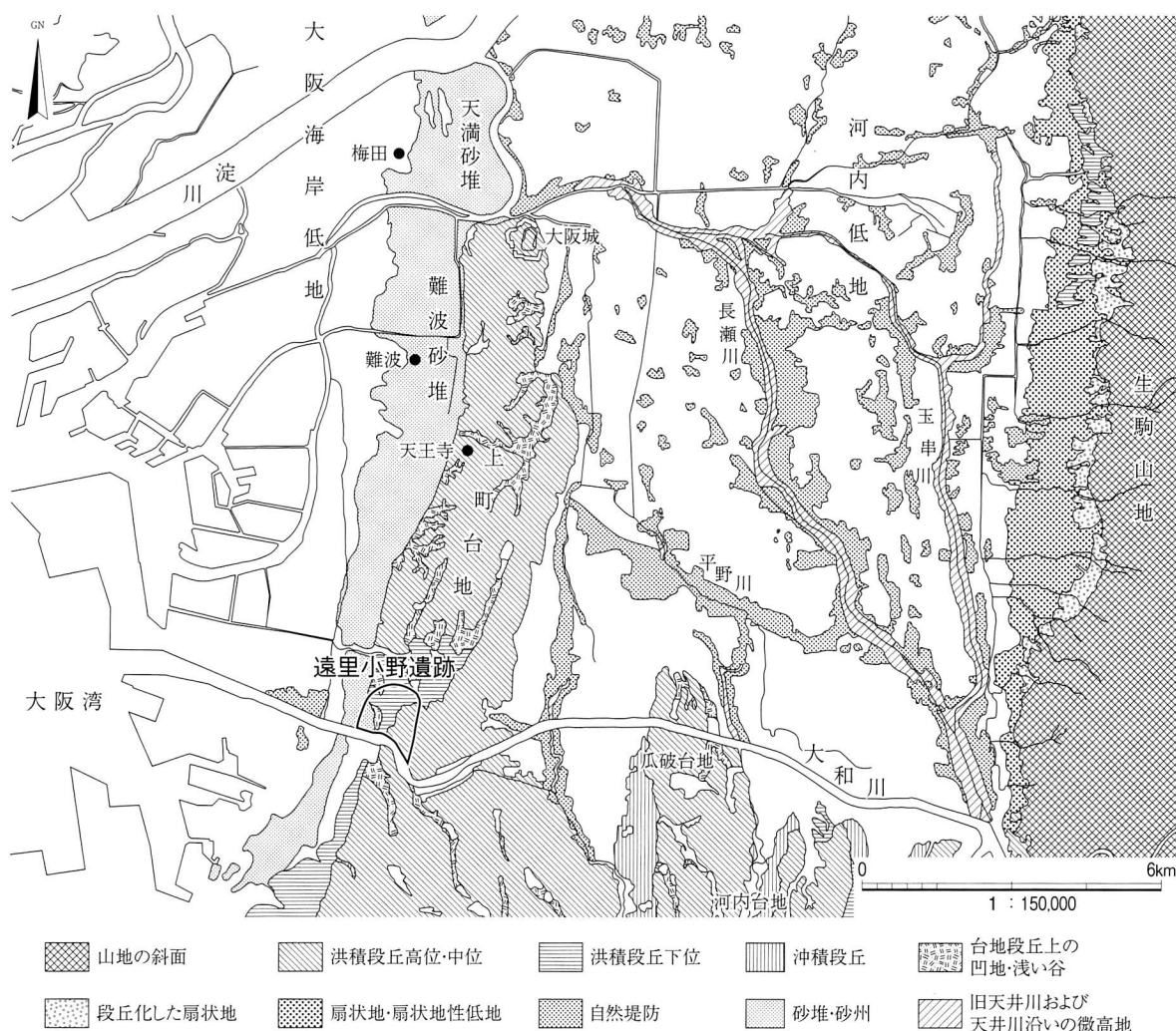


図4 大阪平野とその周辺の地形分類(土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

## 第2節 歴史的環境と既往の調査

本遺跡における既往の調査成果については、前報告に詳しい[大阪市文化財協会1999b]。そのため、ここでは特に注目すべき内容を中心として、簡単に触れるに留める。また、本遺跡に隣接し密接な関係を有する山之内遺跡西地区における成果については、同じく[平田洋司1999]を参照されたい。

遠里小野遺跡における発掘調査は、これまで遺跡の南半を中心に行われている。市内の遺跡の中でも比較的早くから注目されており、すでに戦前から遺物の採集が行われていた[前田長三郎1930]。その後も、大阪府教育委員会による遺物紹介[藤岡謙二郎1942]、瀬川芳則氏による立会調査[瀬川芳則1959]、大阪市立大学考古学研究会による遺物報告と考察[大阪市立大学考古学研究会1982]などが行われている。これらの調査を経て、遠里小野遺跡が弥生時代から古代に至る複合遺跡であること、そして土錘・イイダコ壺といった漁具が豊富に出土することが注目された。なお、この段階ですでに「硬

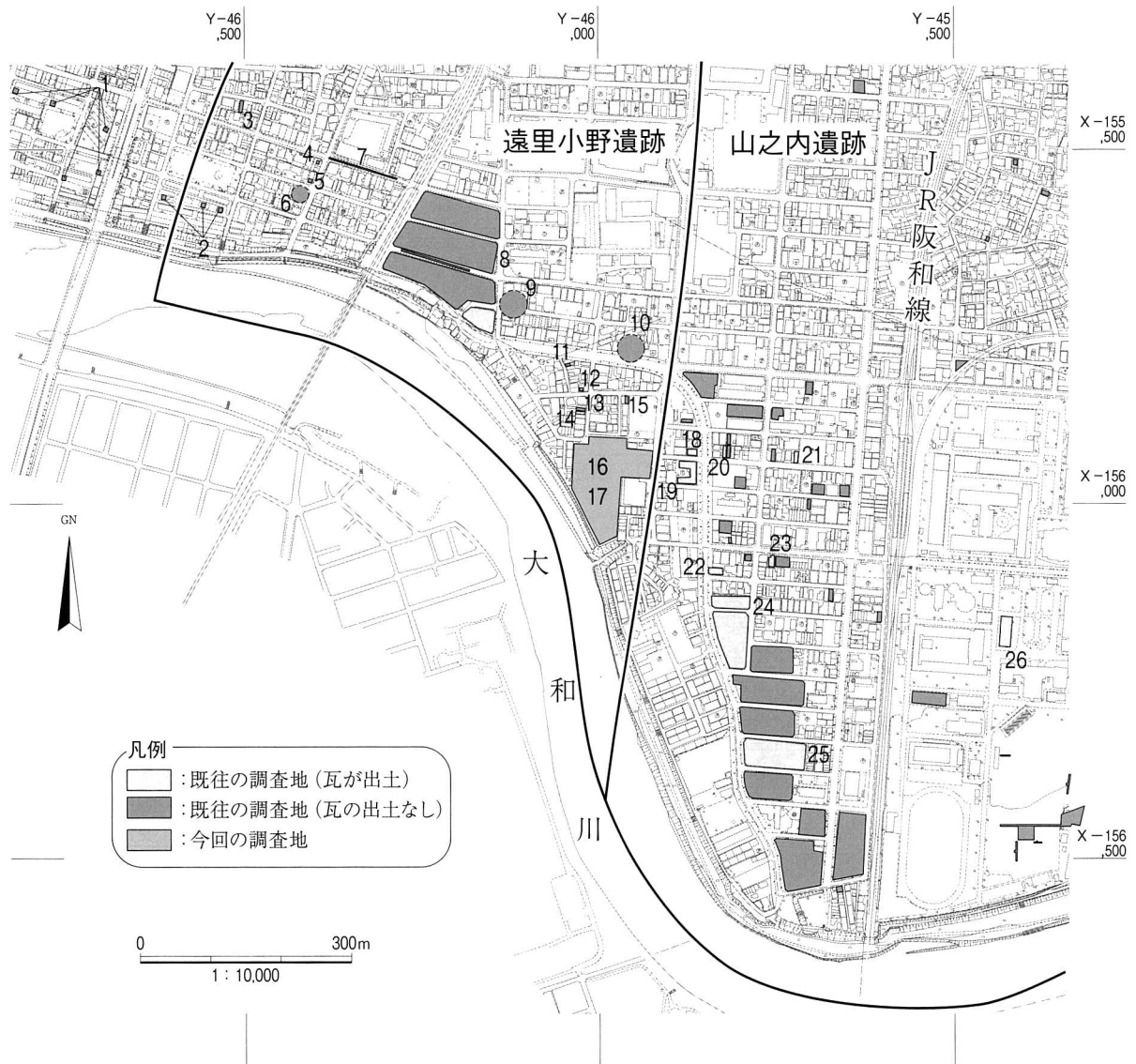


図5 周辺の調査地

質で重い白鳳期と推定される平瓦片」について報告されている[瀬川1959：p.5]。その後、1981年以降は大阪市文化財協会によって調査が行われることとなる(図5・表1)。

遠里小野遺跡では、確実に旧石器～弥生時代のものといえる遺構はいまだ発見されていない。ただその一方、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の石鏃、弥生土器など該期の遺物は一定量出土している。台地上ということもあり、かつて存在した遺構の大半が削平を受けているのであろう。

古墳時代前～中期においても、人間活動の痕跡はいまだ明瞭ではない。わずかに埴輪片などが出土し、周辺に古墳があったことを推測させる。

その後、古墳時代後期～飛鳥時代前半になると、遠里小野遺跡から山之内遺跡西地区にかけての一带で、居住域に係わる遺構が爆発的に増加する。これらの居住域では、狭い範囲において建物の方位が揃うなどの規格性はうかがわれるものの、居住域全体を覆う計画性は看取できない。広範囲にいくつかのユニットが散在する景観が復元できるだろう。また、該期には羽口・スラグなど金属加工関連遺物が出土する点は注目すべき点である。その他、この時期にはYM82-31次・OR88-18次におい

表1 遠里小野遺跡のおもな出土遺物および山之内遺跡西地区の古代瓦出土地

| 番号※1 | 調査名※2           | 種別  | おもな出土遺物  | 参考文献※3     |
|------|-----------------|-----|--|------------|
| 1    | OR04-4          | 試掘  |  | 平井和2005b   |
| 2    | OR04-3          | 試掘  |  | 平井和2005a   |
| 3    | OR92-1          | 本調査 | 土師器・須恵器・土鍾   | 高橋工1993    |
| 4    | YM82-31         | 本調査 | 土師器・須恵器・土鍾・イイダコ壺・関東系土器・滑石製品など                        | 市教委ほか1984b |
| 5    | OR88-18         | 本調査 | 土師器・須恵器・製塩土器・土鍾・イイダコ壺・滑石製品など                         | 市教委ほか1990  |
| 6    | (遠里小野地点)        |     | 土師器・須恵器・土鍾   | 藤岡謙二郎1942  |
| 7    | YM81-2          | 本調査 | 土師器・須恵器・土鍾   | 市文協1998a   |
| 8    | OR88-11・OR89-16 | 本調査 | 石器(旧石器～弥生時代)・弥生土器・土師器・須恵器・土鍾・イイダコ壺・埴輪・瓦              | 市文協1999b   |
| 9    | 住吉第4号地点         | 採集  | 石器(弥生時代)・須恵器・土鍾・イイダコ壺・貝                              | 瀬川芳則1959   |
| 10   | 住吉第1号地点         | 採集  | 石器(弥生時代)・須恵器・イイダコ壺                                   | 瀬川芳則1959   |
| 11   | OR87-6          | 本調査 | 土師器・須恵器  | 黒田慶一1989   |
| 12   | OR90-13         | 本調査 | 土師器  | 西畑佳恵1991   |
| 13   | OR90-4          | 本調査 | 土師器・須恵器・埴輪・瓦器  | 平田洋司1991   |
| 14   | OR94-15         | 試掘  | 土師器・須恵器・瓦器・瓦   | (立会調査日誌)   |
| 15   | OR04-2          | 本調査 | 土師器・須恵器・瓦器   | 辻美紀2005    |
| 16   | YM85-40         | 立会  | 須恵器・瓦  | 市文協1985    |
| 17   | OR05-1          | 本調査 | 土師器・須恵器・土鍾・イイダコ壺・瓦器・瓦                                | 本報告書       |
| 18   | YM93-33         | 本調査 | 土師器・須恵器・瓦  | 黒田慶一1995   |
| 19   | YM83-41         | 本調査 | 土師器・須恵器・瓦・羽口   | 市文協1983    |
| 20   | YM95-8          | 本調査 | 土師器・須恵器・滑石製管玉・黒色土器・瓦                                 | 寺井誠1997    |
| 21   | YM91-11         | 本調査 | 瓦質土器・瓦   | 市文協1998a   |
| 22   | YM82-30         | 本調査 | 土師器・須恵器・瓦器・瓦   | 市教委ほか1984a |
| 23   | YM91-17         | 本調査 | 土師器・須恵器・瓦  | 市文協1998a   |
| 24   | YM88-37         | 本調査 | 弥生土器・石器(弥生時代)・土師器・須恵器・製塩土器・瓦・イイダコ壺・土鍾・羽口             | 市文協1999a   |
| 25   | YM83-18         | 本調査 | 弥生土器・石器(弥生時代)・土師器・須恵器・韓式系土器・土鍾・瓦・羽口・滑石製品(管玉・白玉・子持勾玉) | 市文協1998a   |
| 26   | YM05-2          | 本調査 | ナイフ形石器・土師器・須恵器・瓦                                     | 市文協2005    |

※1 番号は図5に示したものと対応する。

※2 遺跡の名称や範囲の移動のため、現在の遠里小野遺跡の範囲内ではあるが、山之内遺跡(調査記号YM)として調査されたものを含む。

※3 大阪市文化財協会を「市文協」、大阪市教育委員会を「市教委」と略称。

て滑石製品の未製品が発見されている(図6：a～e)。特にYM82-31次調査では関東系と目される土器も伴出しており(図6：f～i)、その性格・搬入の経緯が注目されるところである。

この時期の隆盛に比べると、飛鳥時代後半以降、平安時代に至るまで、居住域としての利用はやや低調となる。その一方で、今回の調査地を中心して南北650m、東西500mほどの範囲では、瓦の分布が認められる(図5)。これらの瓦のうち平瓦は須恵質に焼成された桶巻き造りのもので、同質に焼成

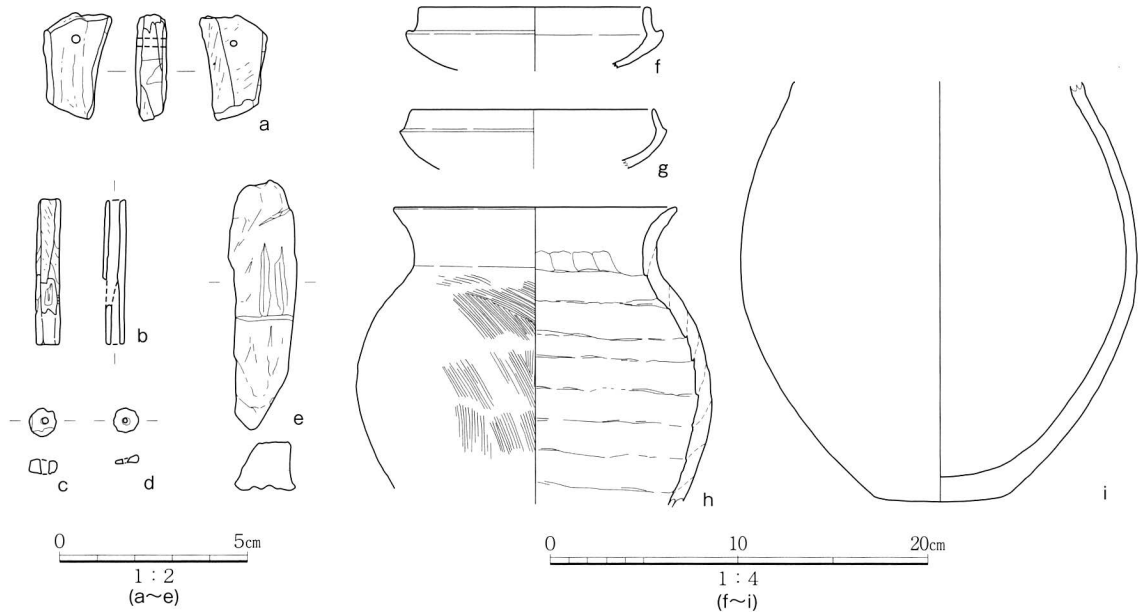


図6 YM82-31次調査の出土遺物

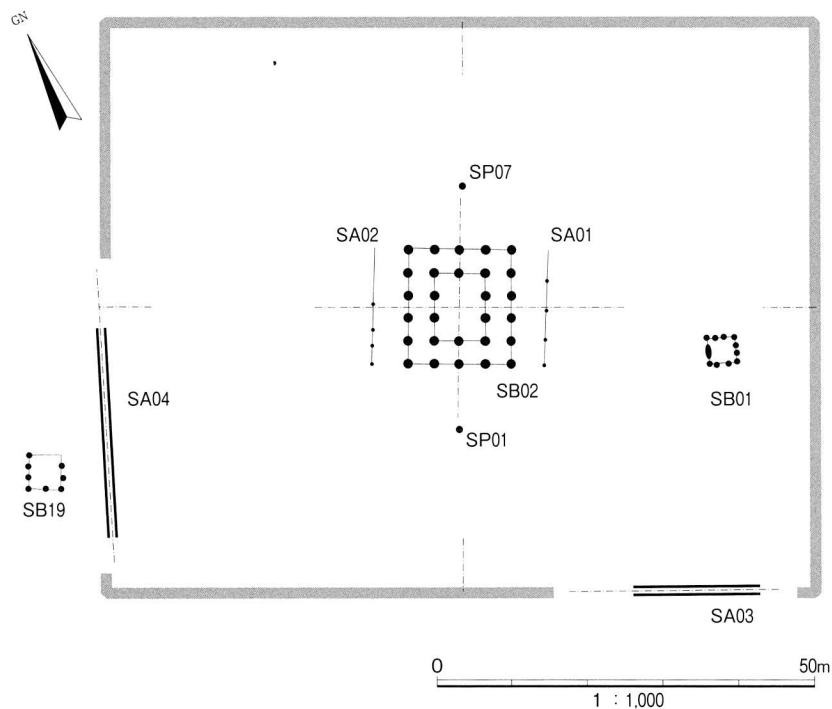


図7 遠里小野遺跡の大型掘立柱建物(OR88-11・89-16次調査)

された単弁蓮華文軒丸瓦も出土、あるいは採集されている。これらのことから、当地には白鳳時代にさかのぼる榎津廃寺の存在が想定されている[前田洋子1983]。またこの時期には、柵によって囲繞された大型の掘立柱建物(図7)が建築されることにも注目しておかねばならない。奈良時代の井戸に転用された、断面五角形を呈する屋根材の特殊性[大阪市文化財協会1999b: pp.141-142]からも、該期の遠里小野遺跡が一般集落とはかけ離れた景観を有していたことを想像させる。

平安時代後期以降、当地域における遺構・遺物の出土はさらに散漫なものとなる。ただ、今回の調査地を南東端として東西400m、南北450mの範囲には12世紀を中心とした中世前期の遺構・遺物が分布している。この時期の集落範囲を反映したものと考えてよいだろう。

中世後期以降の本遺跡の動向は明瞭ではない。ただ、文献記録にも見えるように、当地は中世にはたびたび戦乱の舞台となったようである。これによって当地に展開する集落が大きな打撃を受けたことは想像に難くない。その後、少なくとも16世紀には今回の調査地一帯は耕地化され、その後20世紀に至り住宅地として開発されるまで、耕地としての利用が継続したようである。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序と各層出土の遺物

1) 層序

今回の調査では、TP+11.3～11.7mを測る現地表面からTP+8.5mまでの地層を確認した。このうち、第4層以下は段丘構成層である。以下に各層の特徴を記述する(図版1、図8～10、写真4)。

**第0層：**厚さ40～90cmの現代盛土層である。調査区全域にわたって分布する。

**第1層：**近世～現代の作土層で、暗褐色シルト混り粗粒砂からなる。層厚は5～25cmで、調査地のほぼ全域に分布していた。府営住宅建設以前の調査地一帯は畑地として利用されていたことが地図資料などから知られるが、実際に調査地の壁面には畝・畝間の構造を残す個所が観察できた(写真4)。本層上面ではいわゆる野壺を4基検出したほか、下面では鋤溝を多数検出した。

**第2層：**中世の作土層である。暗オリーブ褐色中～粗粒砂混りシルトの上部と、褐色中粒砂混りシルトの下部からなるが、両者の区分が困難な個所も部分的にあった。両者とも20～25cmほどの層厚である。上部と下部を比較すると、後者の色調が明るく、粘土分も多い傾向にある。上位層によって削平された部分もあるが、本来は調査区全

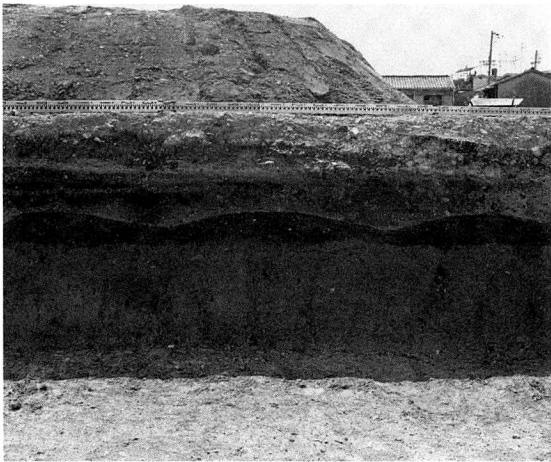


写真4 第1層の畝・畝間  
東Ⅲ区西壁(東から)

| 層序  | 地層と遺構の関係  | 岩相                              | 特徴    | 時期                 |
|-----|---|---------------------------------|-------|--------------------|
| 第0層 | 畝/畝間 野壺   | —                               | 盛土    | 現代                 |
| 第1層 | 鋤溝  | 暗褐色シルト混り粗粒砂                     | 作土    | 近世～現代              |
| 第2層 | (上部)<br>(下部)<br>互敷き SE2b01 SB2b01など SD2a01 SK2a01など | 暗オリーブ褐色中～粗粒砂混りシルト<br>褐色中粒砂混りシルト | 作土    | 中世後期               |
| 第3層 | SD2b01など SB301など SB304など SK301など SD301など            | 褐色中粒砂混り粘土質シルト                   | 古土壤   | 旧石器～奈良(主体は古墳後期～飛鳥) |
| 第4層 |   | 灰褐色極粗粒砂/灰色シルトの互層                | 段丘構成層 | —                  |

図8 地層と遺構の関係

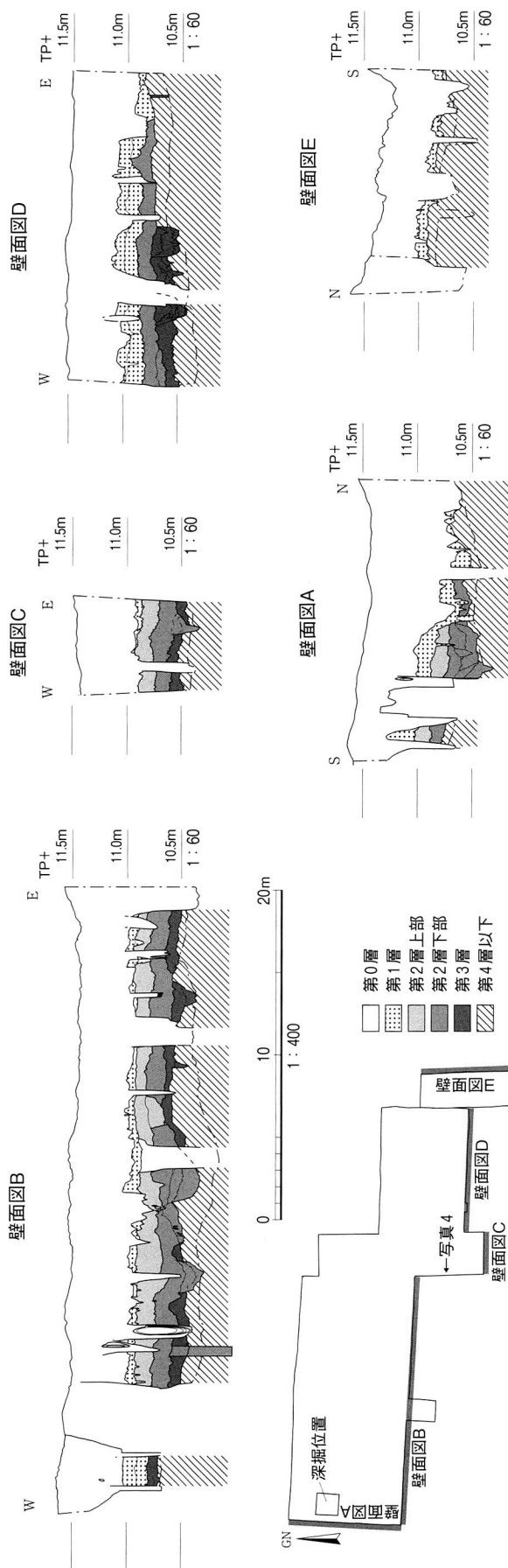


図9 調査地層序模式図

域に分布していたものと推測できる。本層を除去した段階で、第3層あるいは第4層上面に瓦敷き・掘立柱建物・井戸・土壇・溝など中世に属する多数の遺構を検出した。本章第3節で詳述するが、これらの遺構群は埋土や遺物から2時期に区分することができる。古代に属する多量の瓦のほか、本層には中世後期を下限とする土器類が包含される。

**第3層：**褐色中粒砂混り粘土質シルトからなる。古墳時代後期～飛鳥時代に属する遺物を主体として、旧石器時代・古墳時代中期～奈良時代の遺物を含むいわゆる遺物包含層である。調査区南半を中心として分布し、北半ではほとんど残存しなかった。層厚は最大で20cmである。竪穴建物・掘立柱建物・土壇・溝・落込みなど古墳時代中期から飛鳥時代に属する遺構を多数検出した。これらの遺構は、地層の残存が良好な部分では第3層の層内で、上層によって削平された多くの部分では第2層基底面において検出したものである。これら第2層基底面で検出した遺構についても、埋土・遺物などから本層に伴うものと判断した。

以下、第4～10層は段丘構成層である。第5層以下は重機による深掘りで確認した。

**第4層：**灰褐色極粗粒砂と灰色シルトの互層からなる。層厚は30cmほどであった。上面の標高はTP+10.7～10.9mで、おおまかに見て調査区北半が高く、南半が低い(図11)。また、第2層下面の標高はほぼ一定であるが、調査区南半分には第3層が遺存する(図9)。このことから、第4層上面の地形の傾斜は上位層による削平の結果生じたものではなく、元々の微地形を反映したものである。

**第5層：**灰褐色細礫質粗粒砂と、淡褐灰色

極細粒砂と灰色粘土のラミナからなる互層とが指交する。層厚は25cmである。南へ傾斜するフォアセット・ラミナを観察した。

**第6層：**細礫～小礫が混る暗赤褐色粗粒砂と、灰色粘土からなる薄層が互層をなす。層厚は13cmであった。

**第7層：**赤灰色細礫混り粗粒砂からなる。層厚は15cmであった。

**第8層：**細～中礫の混る淡黄灰色粗粒砂からなり、層厚は43cmであった。25～28°傾斜するフォアセット・ラミナが観察され、推測できる古流向は北北西→南南東であった。

**第9層：**淡黄灰色粗粒砂礫からなる。礫は主として砂岩の円～亜円礫であり、最大径は10cmであった。また粘土偽礫を含んでいた。層厚は73cmである。最上部でインブリケーション構造が観察でき、古流向はやはり北→南と推測できた。

**第10層：**褐灰色極粗粒砂からなり、層厚は12cm以上であった。緩いフォアセット・ラミナが観察できた。復元される古流向は北北西→南南東である。

このように、ラミナ構造を観察できた層準ではいずれも北北西→南南東という古流向が復元できた。しかしながら、第Ⅱ章で見たように、調査地周辺の地形は大勢としては南から北へと傾斜している。今回の結果は、上町台地南端部における地形を考える上で興味深いものといえる。

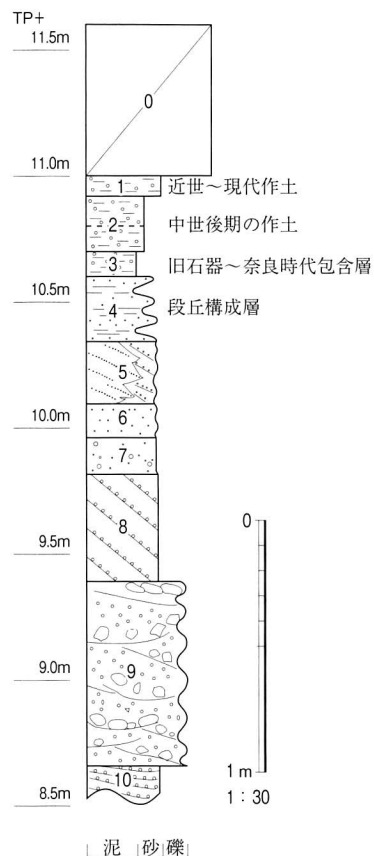


図10 調査地模式柱状図および第8層で観察されたラミナ構造

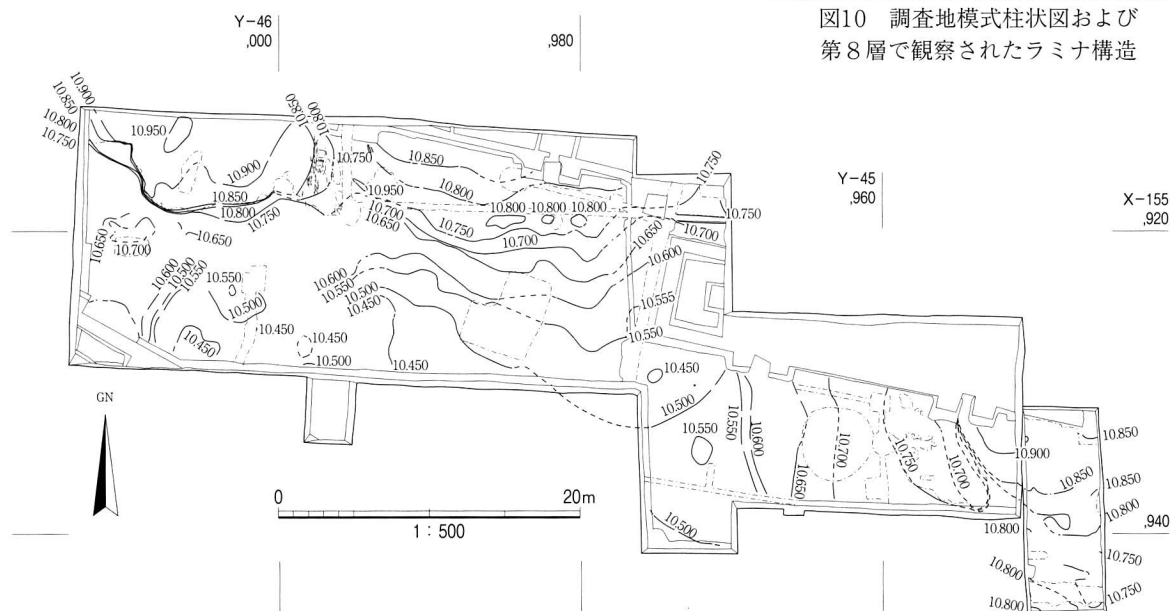


図11 第4層上面の標高

2) 各層出土の遺物(原色図版4、図版10、図12・13)

**第2層出土遺物** 15・16は中国製白磁の底部である。15・16とも高台は低く、外面底部全体を露胎とする。平安期に多くみられる型式である。17は瓦質土器の羽釜である。口縁部には3条の凹線を施す。また、鰐部よりも下位の外面にはススが付着している。15世紀に位置づけられる遺物である。細片が多く遺物の下限が明確でないが、確実に豊臣期に降る遺物は出土していない。

**第3層出土の遺物** 1・2はサヌカイト製のナイフ形石器、3～14は須恵器である。1は短形剥片を素材とする小型のナイフ形石器で、上端部を欠損する。表面は1面のポジティブ面と4面のネガティブ面で構成される。整形加工は1側縁に対してのみ施されている。2は横形剥片を素材とする大型のナイフ形石器で、やはり上端部を欠損する。また、下端部には礫面を残している。表面はいずれもネガティブ面で構成される。整形加工は1側縁に対してのみ施されている。

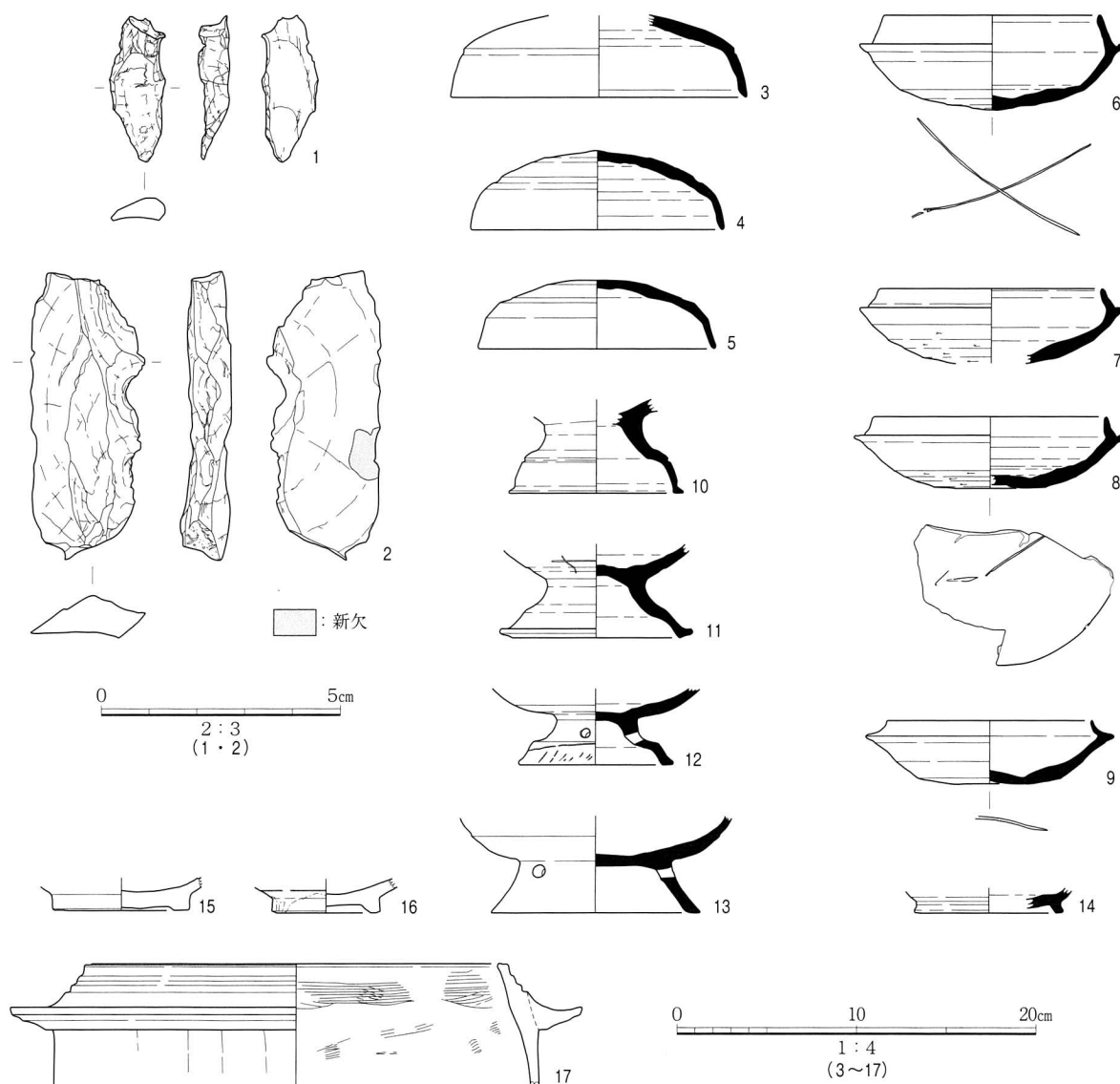


図12 各層出土の遺物(1)

第3層：1～14、第2層：15～17

須恵器では杯H蓋3～5、杯H身6～9、高杯の脚部10～13、杯B14を図示した。このうち杯身6・8・9および高杯の脚部11にはヘラ記号が施されている。また、脚部12の外面にはヘラによるキザミメ状の工具痕が残る。第3層から出土した遺物は、ここに示したTK10～TK209型式に属するもの3～13を中心としながら、TK23～TK47型式にさかのぼる須恵器杯H身や、杯B14など奈良時代に降る遺物を含む。

これらのほかに、遺跡の性格を特徴づける遺物が各層から出土している。なお、古代に属する瓦が第2層を中心として各層から出土しているが、これらについては第Ⅲ章第4節において詳述する。

**漁具** 出土した漁具には、イイダコ壺18～21、土鍾22～24がある。イイダコ壺はすべて鈕をもつ釣鐘形のものである。須恵質のもの18～20と、土師質のもの21がある。このうち21の鈕は両面から穿孔されている。また破面が著しく摩耗しており、土鍾として転用された可能性がある。土鍾には、粘土棒に双孔を穿ったいわゆる瀬戸内型土鍾22、太型の管状土鍾23、球形に近い形状を呈する24がある。24は当地域では例のない形態であり、胎土・色調も他の個体と異なることから、これらとは時期・産地を異にする可能性がある。

**須恵器熔着資料** 窯壁と須恵器が熔着した資料が、わずか数点ではあるが出土している。25は次節において報告するSK311の東側0.3mの第3層中より出土した。熔着した須恵器は、外面にはカキメを施し、内面には胴部を閉塞した痕跡を認めることから、横瓶であろう。外面には窯の床面と思われる粘土塊が付着している。また、内面には器面に対して垂直に滴下した自然釉が付着している。26は第2層から出土した。窯壁の両面に須恵器片が付着した資料であり、須恵器片には当て具痕を認める。これら2点は、窯跡における焼損品である可能性が高く、近隣に須恵器窯が存在したことを推測させる。

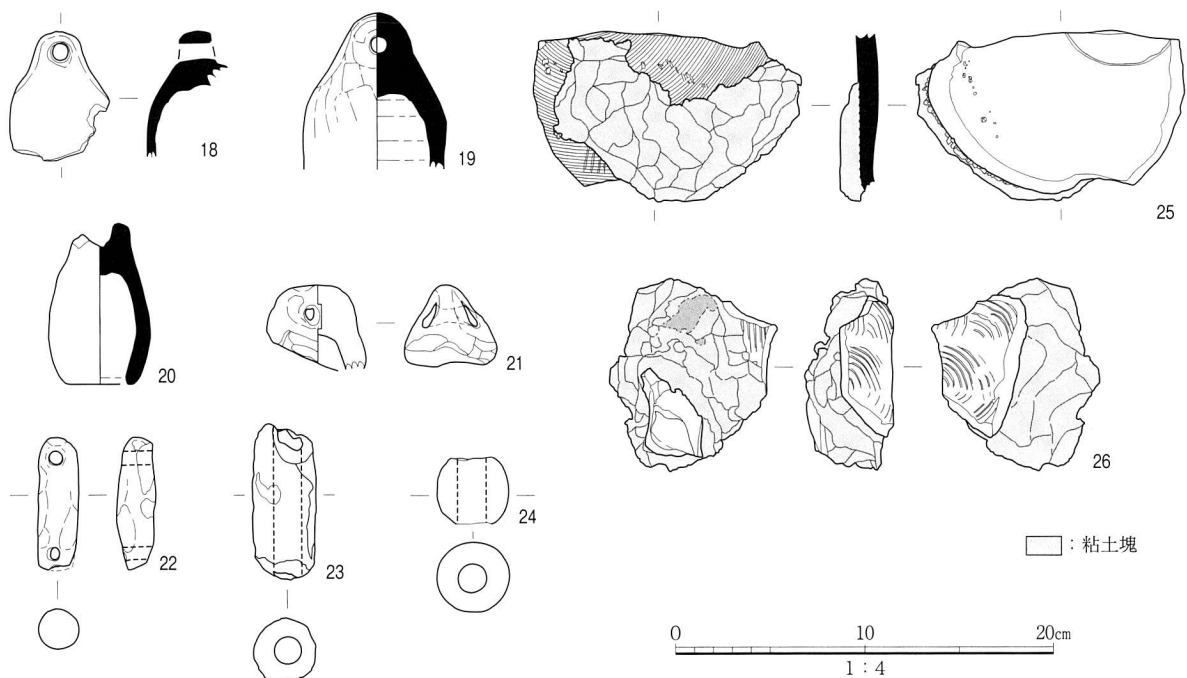


図13 各層出土の遺物(2)

第3層(18・22・25)、第2層(19～21・23・24・26)

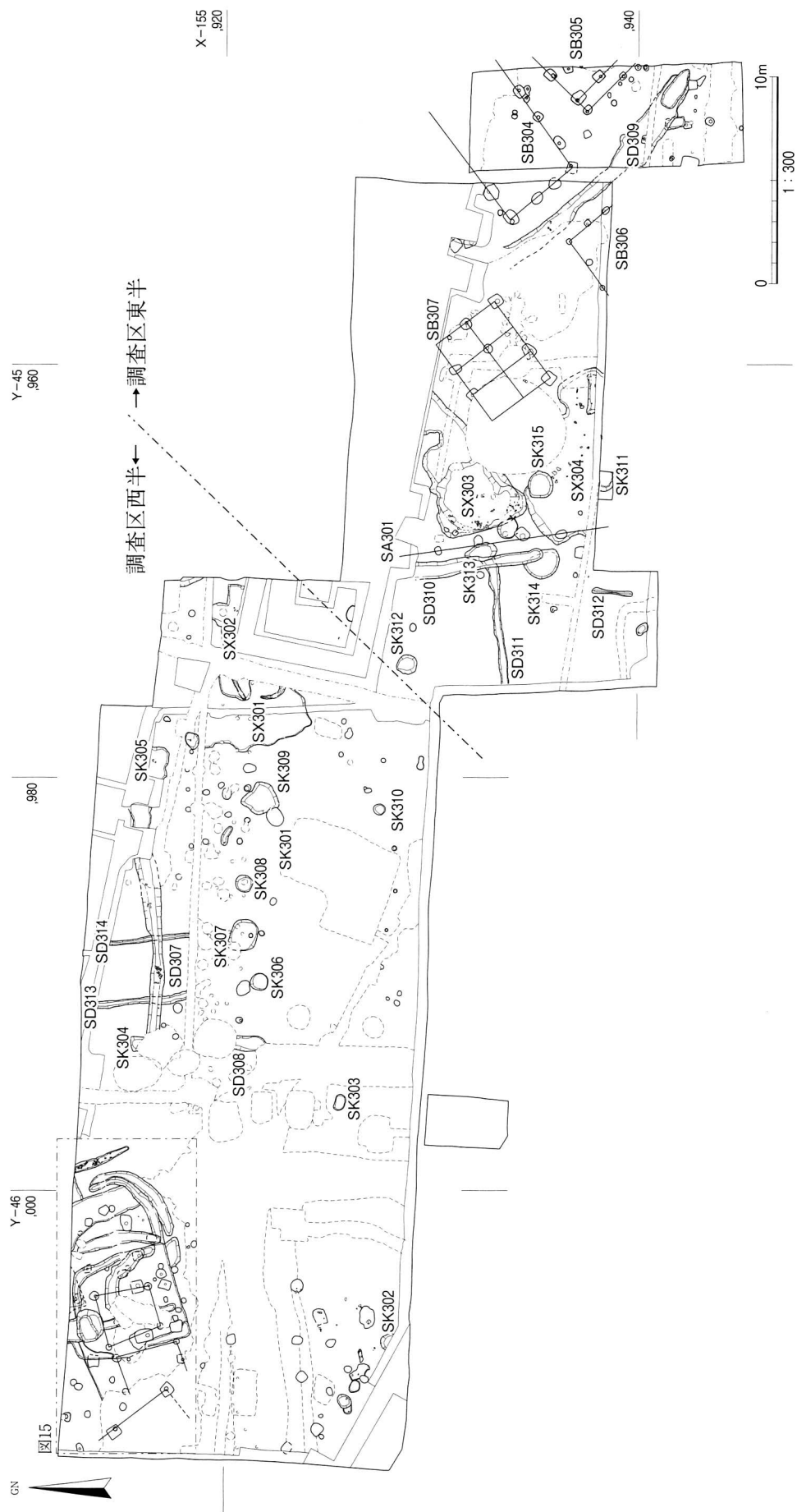


図14 古墳～飛鳥時代の遺構分布

## 第2節 古墳～飛鳥時代の遺構と遺物

### 1) 概要

調査区のほぼ全域において、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構を多く検出した(図14)。ただし、地形が低くなる西調査区南半では密度が低くなっており、また、西調査区北西部では古墳時代後期前半を中心とする遺構が、東調査区では古墳時代後期後半～飛鳥時代前半を中心とする遺構が分布している。このように調査区内で遺構のまとまりが認められることから、以下では西調査区と東Ⅲ区北半を調査区西半、それ以外を調査区東半として報告する。

遺構の種類としては、調査区西半で竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、土壇10基、溝10条、落込み2基を、調査区東半では掘立柱建物4棟、柵1条、土壇5基、溝4条、落込み2基を検出した。これらの遺構は、地層の残存状況が良好な部分では、第3層中において検出したものである。しかしながら、第3層は調査区の多くの部分で削平されており、大多数の遺構を第4層上位の第1・2層基底面において検出した。各遺構の埋土はおおむね共通しており、第3層と類似した黄褐～褐色を呈するシルト、あるいは砂混りシルトを基調とする。なお、上面を削平されて検出層準が明確でなく、かつ出土遺物がない、あるいは少ない遺構についても、埋土の特徴によって該期のものと判断した。

### 2) 調査区西半の遺構と遺物

#### i) 竪穴建物とその周辺

西調査区の北西部では竪穴建物SB301・302をはじめとして、多くの遺構が密集している(図15)。ここでは、これらを一括して記述する。

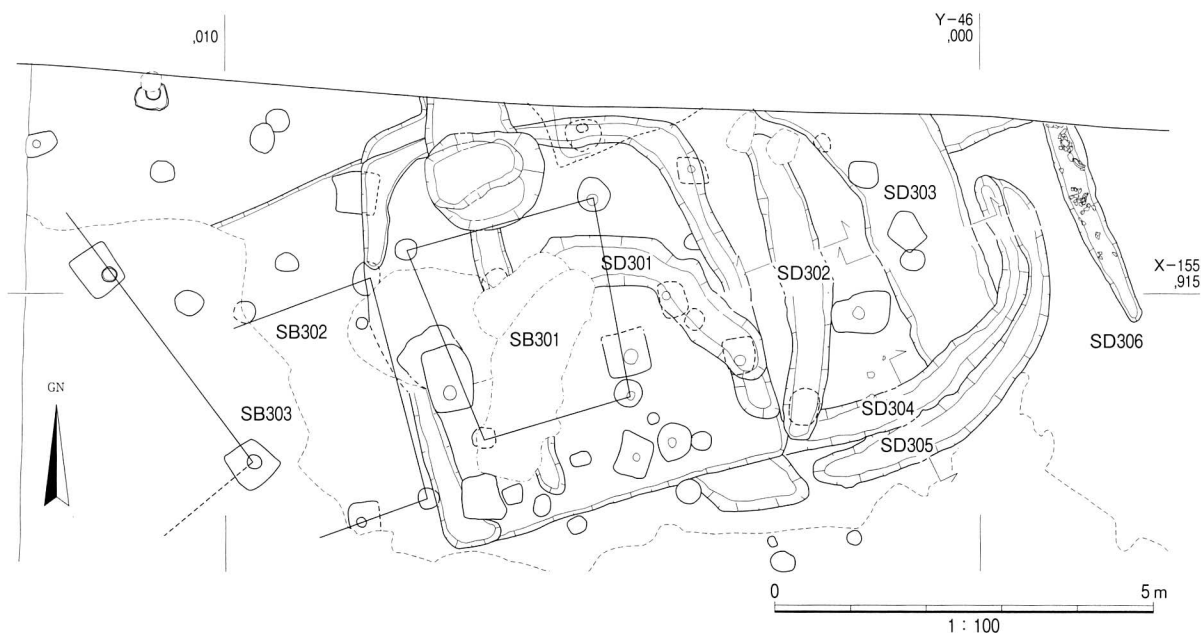


図15 西調査区北西部の遺構

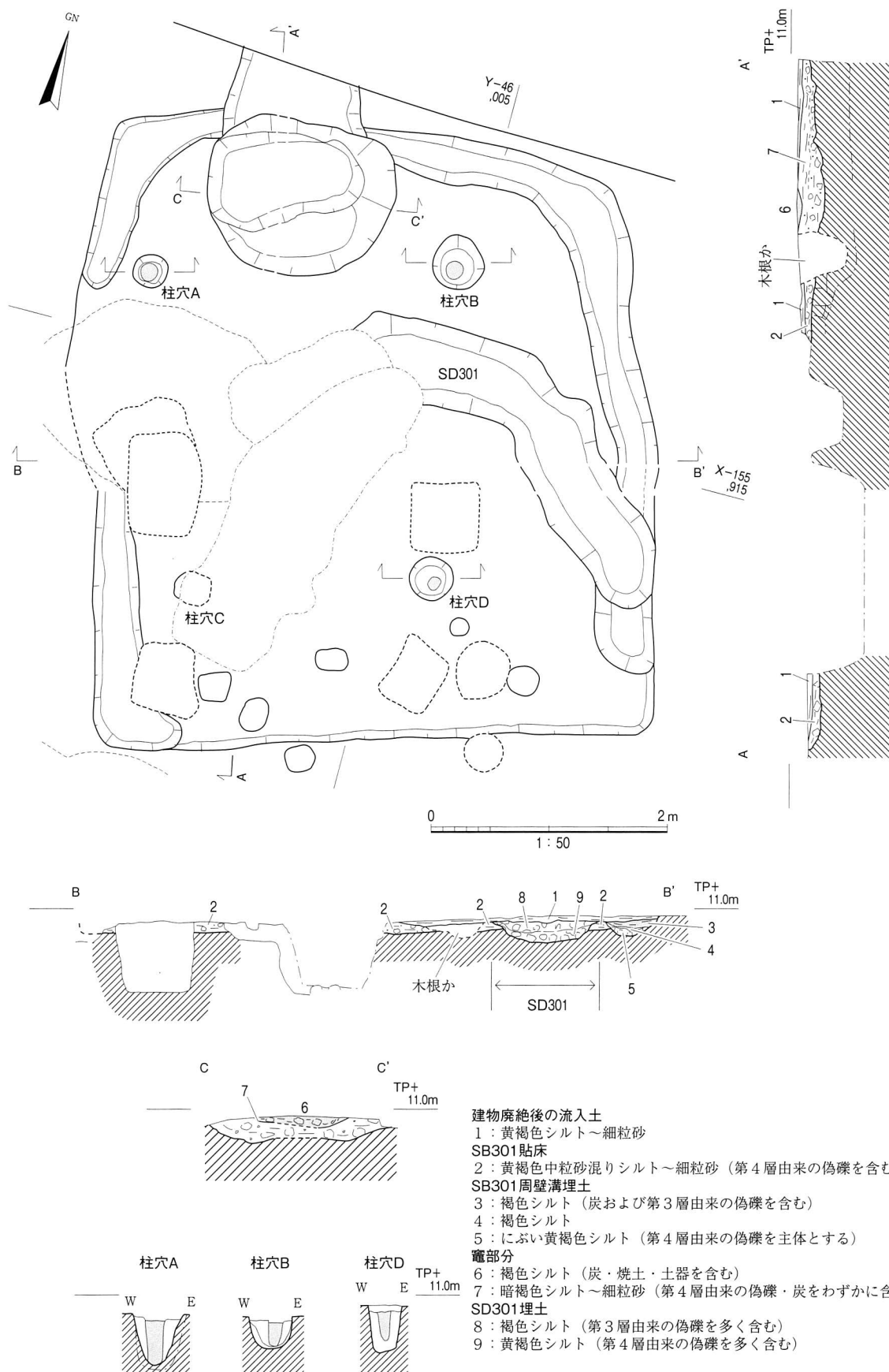


図16 SB301・SD301実測図

**SB301**(原色図版4、図16) 隅丸方形を呈する竪穴建物であり、第4層上位の第1層の基底面において検出した。東西4.8m、南北5.5mとやや南北に長いプランを有する。検出面からの深さは最大で0.15mであったことを考えると、遺構の上半は大きく削平されたものと考えられる。方位は北で約15°西へ振れる。建物の北端では、浅い窪みおよびそこから延びる浅い溝を検出した。明確な構造や被熱の痕跡は残存しなかったが、竪穴建物との位置関係や、窪みを検出した際に焼土の分布を認めたことから、竈および煙道の痕跡であると考ええる。周壁溝は遺構の南辺を除く三辺を検出した。

主柱穴は4基(柱穴A～D)で、やや建物の西側に偏っている。このうち柱穴Cは現代の攪乱によりその大半が失われていた。柱穴は直径0.2～0.3mの円形を呈し、検出面から0.3～0.4m掘込まれていた。柱痕跡の直径は0.10～0.15mである。

遺構の埋土を見ると、最下部には第4層由来の偽礫を含む中粒砂混りシルト～細粒砂層(②層)が堆積する。この②層上面の標高は、やや凹凸があるがTP+10.9mとほぼ一定しており、主柱穴もこの②層上面で検出したことから、本層は貼床と考えられる。本層上には、シルト～細粒砂層(①層)が流入している。主柱穴を覆うことから、住居廃絶後の流入土と考えられる。周壁溝の下部には第4層の偽礫を主体とするシルト層(⑤層)が堆積し、加工時形成層と判断できる。その上位には機能時の堆積層と思われる水浸きのシルト層(④層)がわずかに堆積し、第3層由来の偽礫および炭を含むシルト層(③層)によって埋戻されたのち、最終的には①層によって埋没している。なお、このうち②層を現場から持ち帰り、0.5mmの篩を用いて洗浄したが、何も出土しなかった。竈跡と目される浅い土壌では、下部に第4層由来の偽礫および炭をわずかに含む⑦層が堆積し、その上に炭・焼土・土器を含むシルト層(⑥層)が堆積している。ただ、⑥層に含まれる焼土は偽礫化したもので、被炎面を有する現地性のものではない。なお、遺構廃絶後、①層が堆積する以前にSD301が、①層堆積後に柱穴5基が当遺構を切って掘削されている。

当遺構からは土師器・須恵器・椀形滓・砥石が出土した(図版7、図17)。須恵器には杯H蓋27、杯H身28～30がある。いずれも口縁端部には沈線状の凹みを有する。30はSB301を切る溝SD301から出土した破片と接合した。外面底部にヘラ記号を施す。31は椀形滓であり、煙道と想定される部分から出土した。全体の1/3程度が残存している。32は粘板岩製の砥石である。本来は直方体に近い形態であつたろう。上面・側面とも、長辺と平行方向に延びる擦痕を観察することができる。

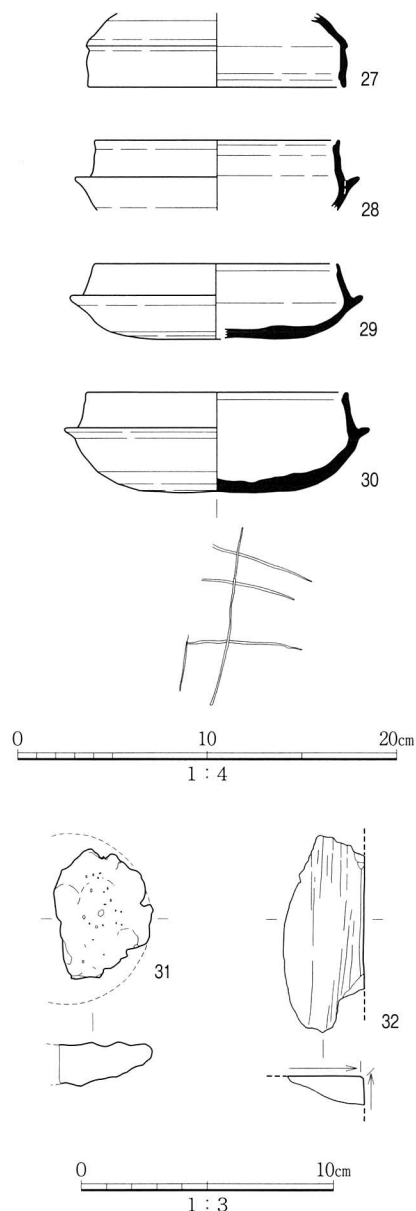


図17 SB301出土遺物

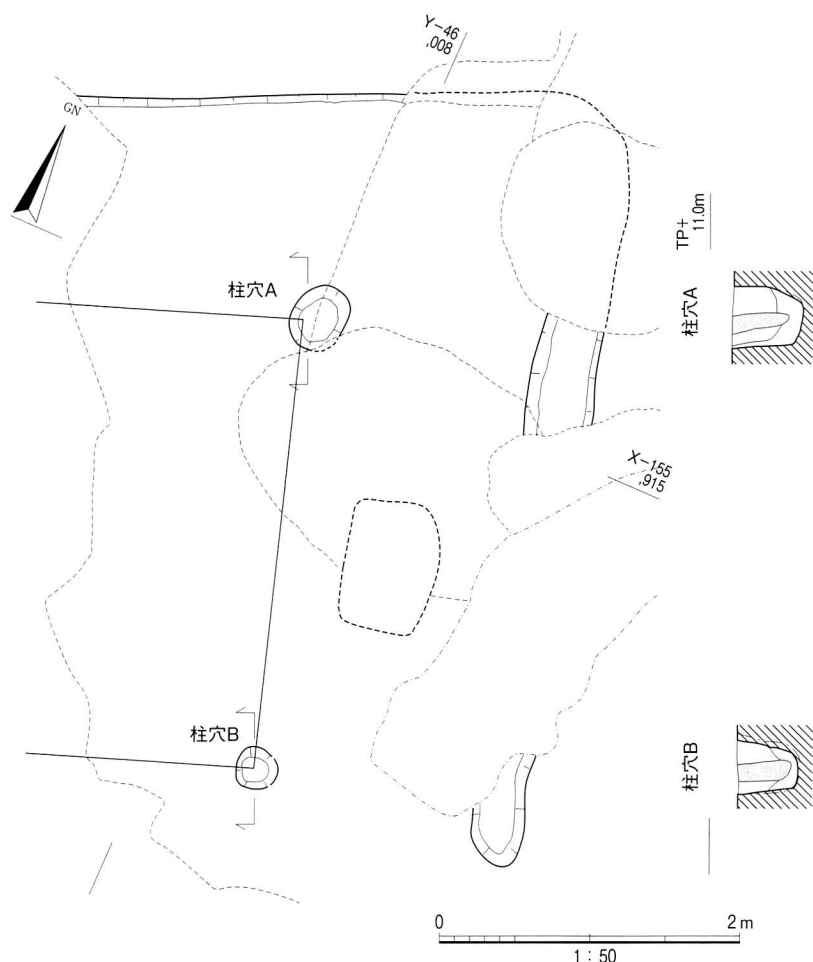


図18 SB302実測図

このうち須恵器については、MT15型式に位置づけられる。

**SB302**(図18) **SB301**の西側に位置し、これによって切られる竪穴建物である。東周壁溝および柱穴は、**SB301**の埋土を完全に除去した段階で検出した。西半も現代の攪乱によって削平されており、遺構の残存状況はきわめて悪い。残存する部分から推定すれば、東西3.5m以上、南北4.9m以上を測る方形の平面プランに復元できる。主柱穴は2基が残存し、このうち**柱穴A**は掘形の直径0.4m、柱痕跡の直径0.1m、検出面からの

深さは0.5mであった。**柱穴B**の掘形は直径0.3mと一回り小振りだが、柱痕跡の直径および深さは**柱穴A**と同規模であった。かろうじて残存する埋土を観察すると、最下部には第4層に由来する偽礫を含む砂混りシルトがあり、その上面はやや土壌化していた。おそらくはこの上面が床面であったろう。最終的には、**SB301**と共通した流入土(図16-①層)によって埋没している。

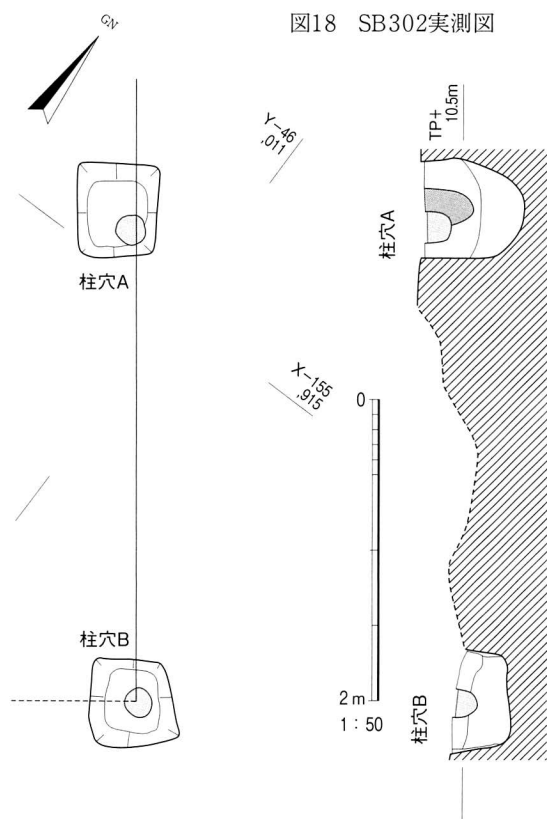


図19 SB303実測図

**SB303**(図19) **SB302**の西側に並ぶ柱穴2基を掘立柱建物として復元した。東側・南側ではこれと組み合わせる柱穴を検出できなかったため、**柱穴B**を南東の隅柱として、建物は西側に展開する可能性が高い。掘形は方形を呈し、一辺は0.5~0.6mである。柱痕跡の直径は0.2mであった。上部は現代の攪乱によって周囲の検出面より0.2mほど削平されていたが、それでも**柱穴A**では検出面か

ら深さ0.7mを測る。また、柱穴Aにおける断面観察では柱痕跡が2重に確認でき、建物の建替えが行われた可能性がある。柱間は3.1mと広く、上部が削平されていることを考えれば、本来は中間にもう1基柱穴が存在した可能性もあるだろう。遺物は出土しておらず時期決定は困難であるが、埋土などの特徴から該期の遺構と考えた。

SD301(図16) SB301と重複し、これを切る溝である。東西方向からやや弧を描きつつ南東方向に延びる。長さ3.0m以上、幅0.6m、検出面からの深さは0.1～0.2mである。埋土は第4層由来の偽礫を含むシルト層(⑨層)が下部にあり、上部は第3層由来の偽礫を多く含む⑧層で埋戻されている

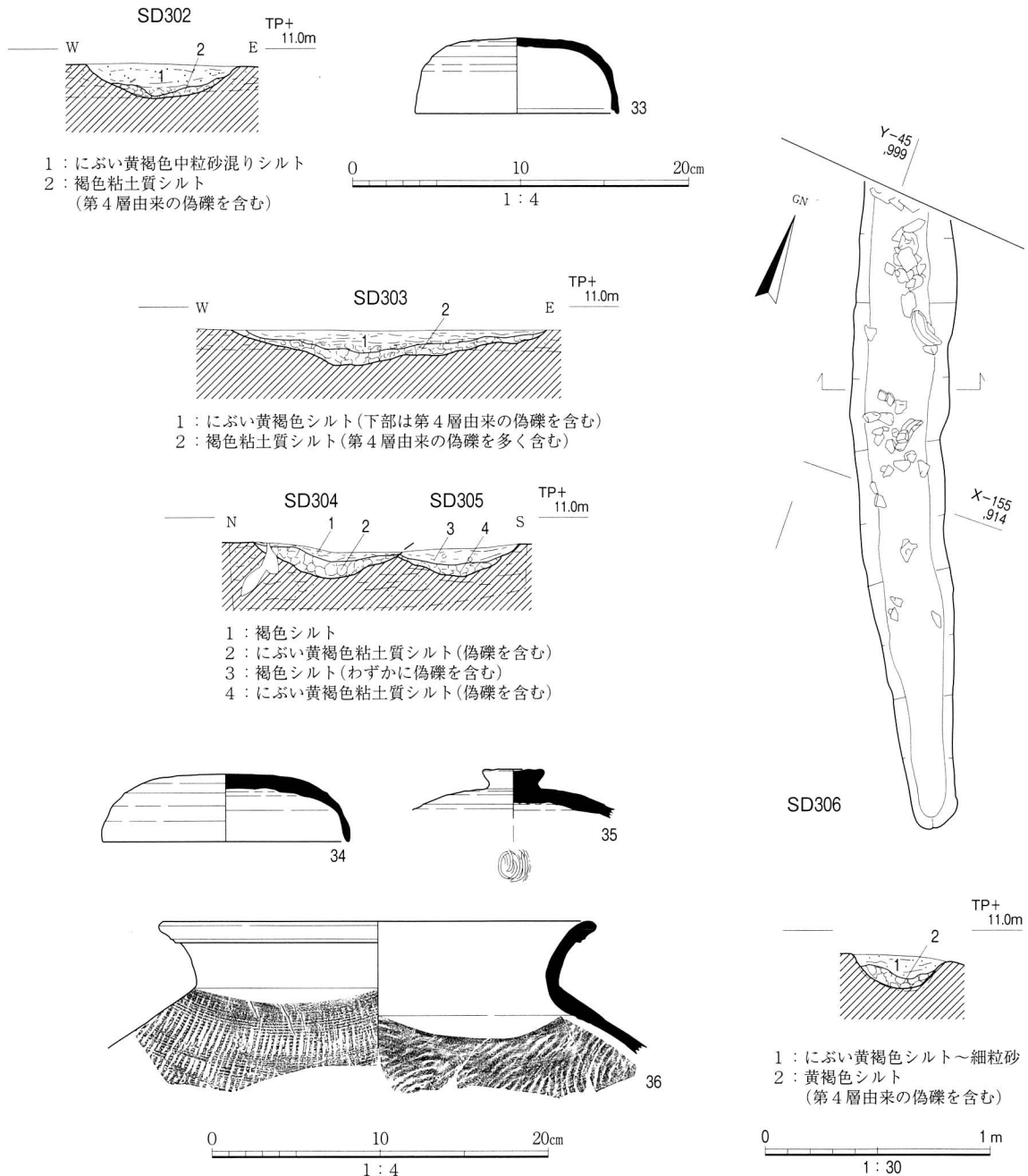


図20 SD302～306実測図および出土遺物  
SD302(33)、SD306(34～36)

る。最終的には、①層によってSB301とともに埋没していた。

SD302(図15・20) SB301の東側に位置する。長さ4.0m、幅0.6m、検出面からの深さ0.2mを測る溝である。南端はSD304を切っている。第4層由来の偽礫を含み加工時形成層と判断できる②層が下部に堆積し、その上部を中粒砂混りシルト層(①層)が覆う。このうち②層から、須恵器蓋33が出土した(図20)。やや深い形態をとることから、壺蓋であろう。ロクロの回転方向は右回りで、口縁端部は沈線状に凹んでいる。

SD303(図15・20) SD302の東側に位置する浅い溝状の遺構である。北側は調査区外へと延び、南側はSD304によって切られる。長さは4.0m以上、幅1.3m、検出面からの深さは0.2m未満である。第4層の偽礫を含む加工時形成層(②層)が下部にあり、この上を水浸きのシルト層(①層)が覆う。

SD304・305(図15・20) SD302・303の南側に位置する。SD304はSD303・305を切り、SD302に切られている。また、西辺はSB301によって切られている。SD304・305はほぼ同じ形状を呈することから、前者は後者を掘直したものと考えられる。西南西-東北東方向に延び、北側へと強く屈曲する。長さ5.5m以上、幅0.6m、検出面からの深さは0.1~0.2mである。埋土は両者とも類似しており、下部には第4層由来の偽礫を含み加工時形成層と考えられる粘土質シルト層(②・④層)が堆積し、これを水浸きのシルト層(①・③層)が覆う。このうち③層にはわずかに偽礫が含まれていた。埋土からは須恵器・土師器の細片が出土したが、時期決定可能な個体は含まれていなかった。

遺構の形状から堅穴建物の周壁溝である可能性を考えたが、適当な位置に柱穴を検出することはできなかった。

SD306(図版3、図15・20) 遺構密集部分の東端に位置する。長さ2.8m、幅0.4m、検出面からの深さは0.2m以下である。埋土は下部に第4層由来の偽礫を含む加工時形成層(②層)が堆積し、上部をシルト~細粒砂層(①層)が覆う。当遺構からは須恵器を中心として比較的多くの遺物が出土し、このうち①層から出土した須恵器杯蓋34、高杯蓋35、甕36を図化した(図版7、図20)。土中における二次的な変色の可能性は十分に考えるが、杯H蓋34の胎土は他と比べ黄色がかった特徴的な色調を呈している。扁平なつまみを有する35は内面に当て具痕を残す。甕36は外面体部に自然釉が付着する。これらの遺物はTK43~TK209型式に位置づけられよう。

## ii) 土壌

SK301(原色図版3、図14・21) 西調査区の東半で検出した土壌である。SK309を切っている。平面形は東西0.9m、南北0.6mの隅丸長方形を呈する。壁面はほぼ垂直に落ち、底面は平らに整形されていた。検出面からの深さは0.3mである。また、遺構の南西辺は一部が0.1mほど外側へ突出している。後述する⑤層も連続して張出していることから、攪乱によるものではなく遺構本来の形状と判断できる。

土壌底面の直上には、灰・炭が2~3cmの厚みをもって平面的に堆積していた(④層)。また、土壌側面には赤色を呈するシルト~細粒砂層(⑤層)が観察できた。ただし、⑤層の粒径は周囲の地山と同一のものであり、土壌周囲の地山(⑨層)が何らかの理由で赤く変色したものと思われる。また、部分的には⑤層が観察できず、⑨層が剥き出しになっていた。④層の上面には一部で赤色土(⑤層)

の偽礫が堆積していた。側面から崩落したものであろう。灰・炭層の上位には、自然堆積と考えられる粘土質シルト層(③層)が堆積し、第4層由来の偽礫を多く含む②層および赤色土(⑤層)の偽礫を含む第1層により埋戻されている。

このうち④層の堆積状況については、灰と炭が混在し、かつ④層直下の⑥・⑨層上面に被熱した痕跡は認められなかった。したがって、この灰・炭層はこの場所で形成されたものではないと判断できる。次に側面の状況であるが、地山が赤く変色した⑤層には漸移的な色調の変化を認めることはできず、また表面が硬化しているといった状況も認められない。したがって、この⑤層についても、赤く変色したことの理由を被熱に求める積極的な根拠はない。

遺物は時期決定不可能な須恵器の細片が出土したのみである。したがって、古墳時代後期～飛鳥時代の幅の中で考える必要がある。

遺構の性格を示す微細な遺物の捕集を目的とし、0.5mmの篩を用いて④層を洗浄したが、何も出土しなかった。同じく④層については蛍光X線分析を実施したが、土壌の性格について積極的に論じることができるような結果は得られなかった。

遺構検出当初は、灰・炭の存在および赤く変色した壁面の状況から、当土壌内で火を用いた作業が行われた可能性を考えた。しかし、以上の結果を客観的に判断するならば、その可能性を否定はできないものの、積極的に肯定することも困難である。

**SK302(図14・22)** 西調査区の西南端で検出した浅い窪み状の遺構である。遺構南半はコンクリート基礎によって破壊されていたが、直径1.4mほどの円形を呈していたと考えられる。検出面からの深さは0.05mほどとごく浅い。当遺構からは須恵器の横瓶**37**が細片化した状況で出土した(図版7、図22)。すべての破片を接合することはできなかったが、破片の数量および部位から考えて1個体丸ごとが投棄されていたようである。

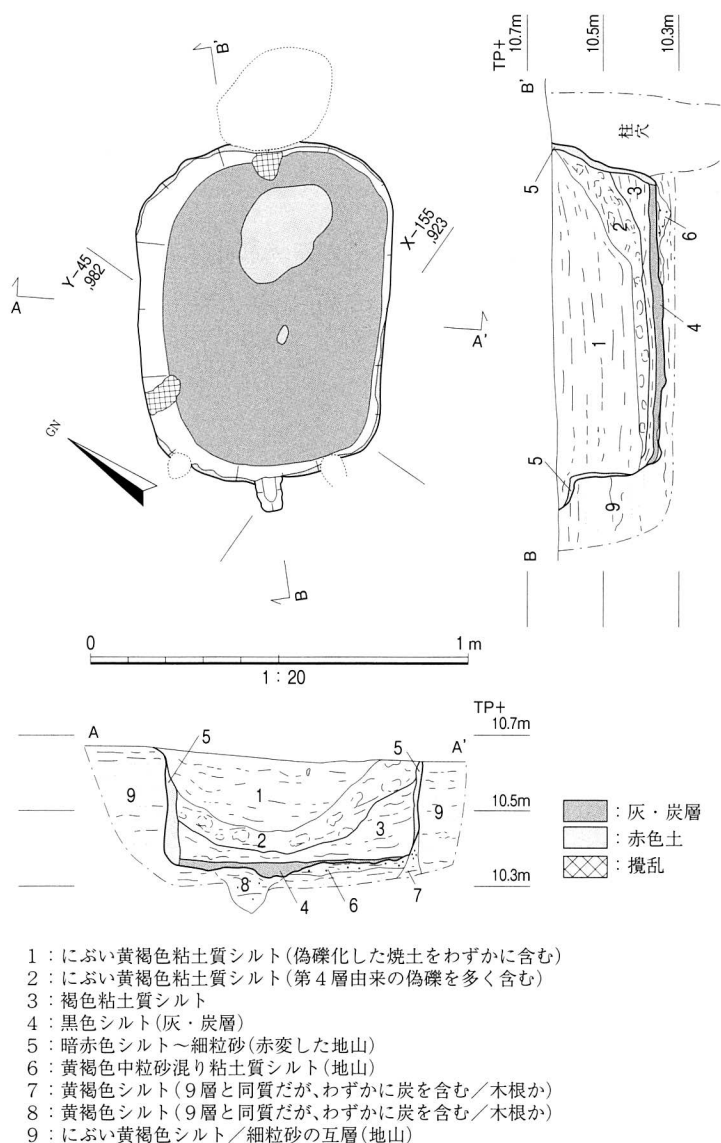


図21 SK301実測図

**SK303**(図14・22) 西調査区の中央部南半で検出した土壌である。東西0.8m、南北0.5mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.15mである。埋土の下部には、炭・焼土・第4層の偽礫が堆積し(②層)、その上位を粘土質シルト層(①層)が覆う。このうち②層について土壌の洗浄を行ったが、何も出土しなかった。

**SK304**(図14・23) 西調査区の中央部北半で検出した。南半分は現代の攪乱によって破壊されている。南北0.6m以上、東西は0.7m、検出面からの深さは0.2mであった。埋土は第4層由来の偽礫

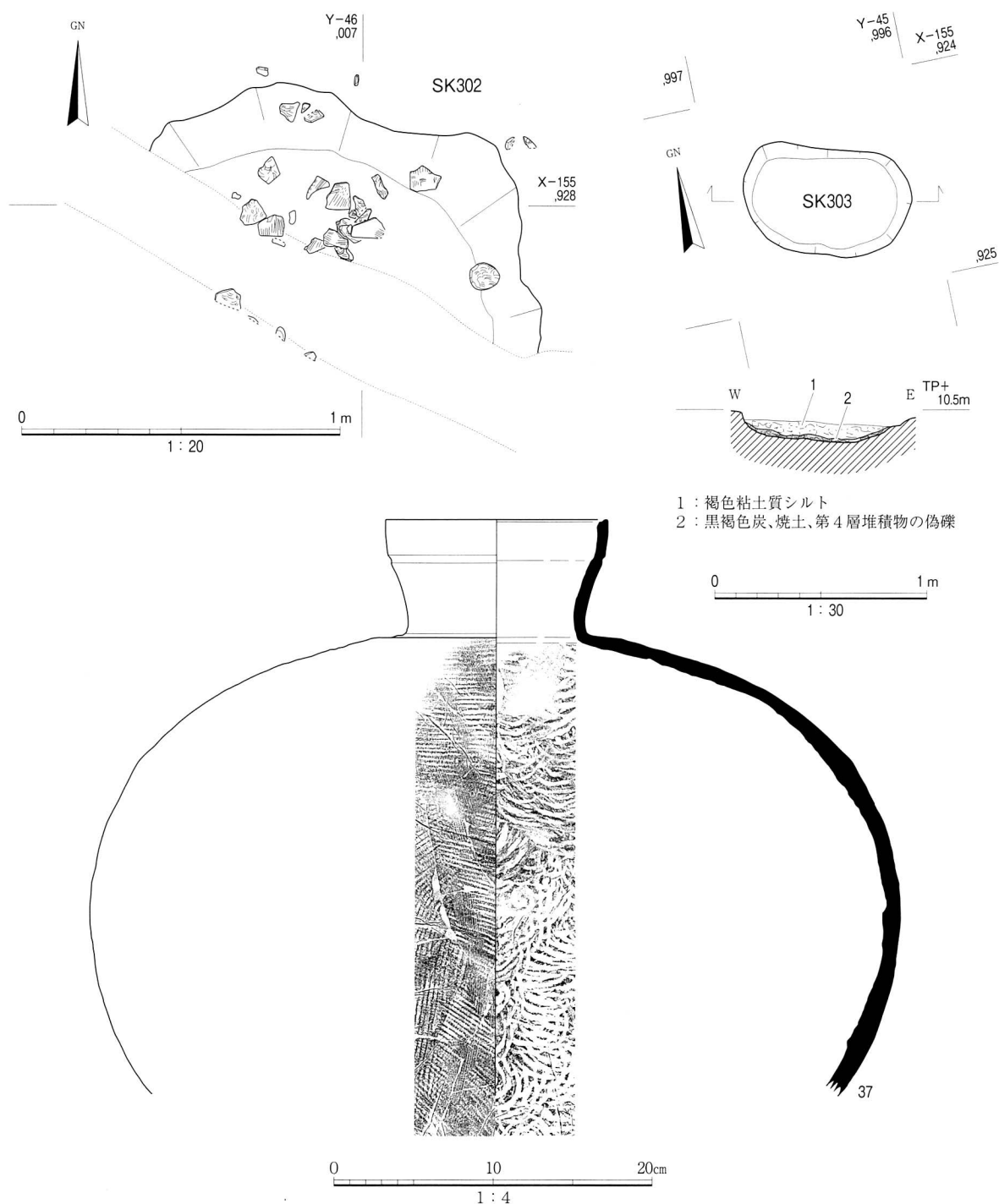


図22 SK302・303実測図および出土遺物

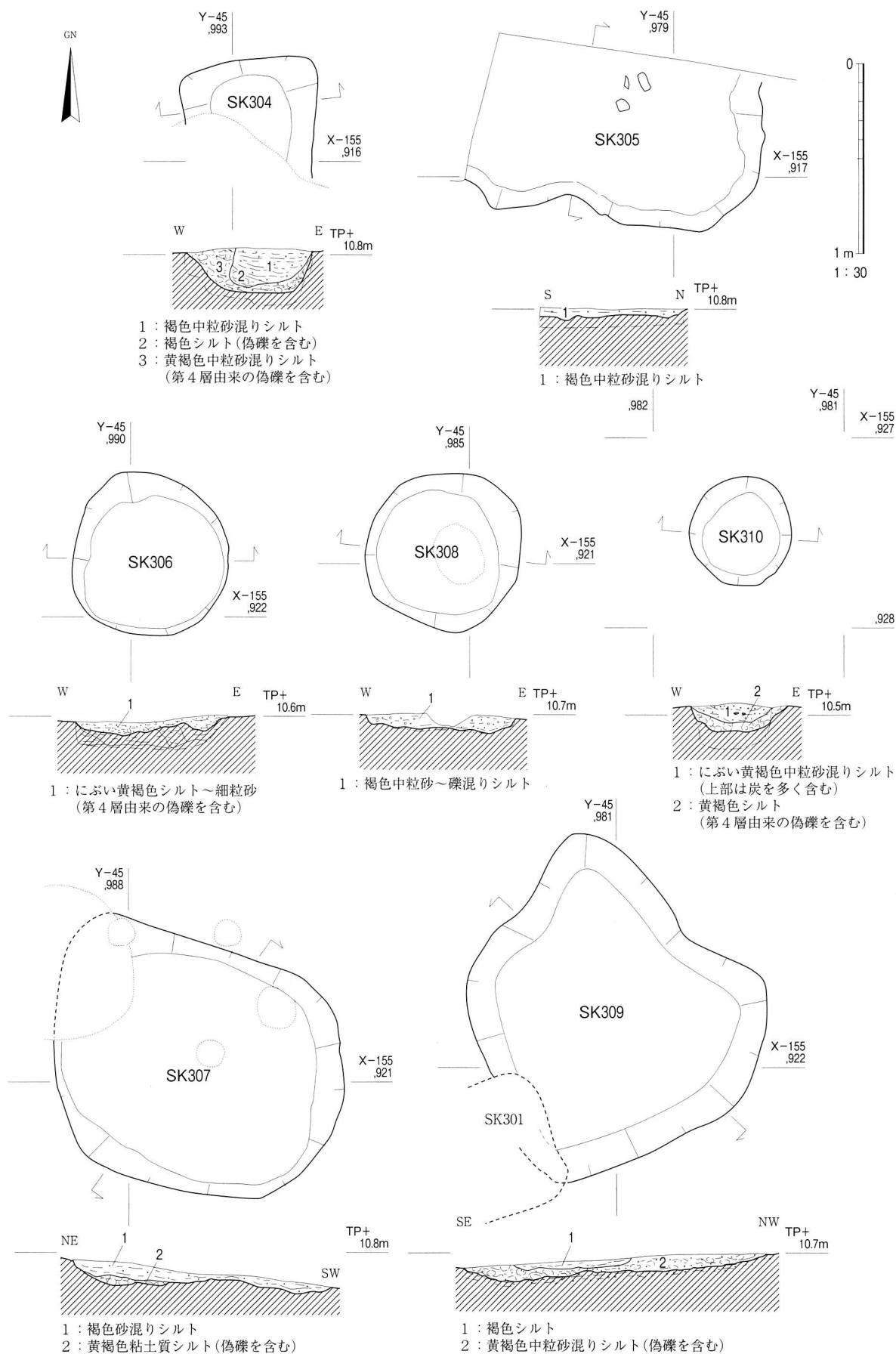


図23 SK304～310実測図

を含む中粒砂混りシルト層(③層)が下部に堆積し、その上位を偽礫を含むシルト層(②層)および中粒砂混りシルト層(①層)が覆う。平面的には観察できなかったが、断面の観察結果から、③層堆積後に土壌の再掘削が行われた、あるいは③層を埋土とする遺構と①・②層を埋土とする遺構とが重なっていた可能性がある。

**SK305**(図14・23) 西調査区の北東部で検出した、浅い窪み状の遺構である。遺構の北・西はコンクリート基礎によって破壊されている。残存する部分は、東西1.5m、南北0.9mを測る。検出面からの深さは0.05mほどであり、埋土は中粒砂混りのシルト層(①層)であった。

**SK306**(図14・23) 西調査区の中央部で検出した浅い土壌である。直径0.9m、検出面からの深さは0.05mを測る。埋土は第4層由来の偽礫を含むシルト～細粒砂層(①層)であった。

**SK307**(図14・23) 西調査区の西半で検出した、やはり浅い土壌状の遺構である。長辺1.5m、短辺1.2mのいびつな長方形を呈する。検出面からの深さは0.1mで、埋土の下部は偽礫を含む粘土質シルト層(②層)、上部は砂混りのシルト層(①層)であった。

**SK308**(図14・23) 西調査区の西半で検出した土壌である。直径0.8m、検出面からの深さ0.05mを測る。埋土は中粒砂～礫混りのシルト層(①層)であった。

**SK309**(図14・23) 西調査区の西半で検出した浅い窪み状の遺構である。遺構の南西部は**SK301**によって破壊されている。最大長1.8mのいびつな形状を呈する。検出面からの深さは0.1mであり、埋土下部は偽礫を含む中粒砂混りのシルト層(②層)、上部はシルト層(①層)であった。

**SK310**(図14・23) 西調査区の南東部で検出した。直径0.6m、検出面からの深さ0.2mを測る。埋土の下部は第4層由来の偽礫を含む②層、上部には中粒砂混りのシルト層(①層)が堆積する。このうち①層上部の炭を多く含む部分を洗浄したが、何も出土しなかった。

以上の**SK303～308**からは土師器・須恵器が出土しているが、いずれも細片であり詳細な時期を判断することはできない。

### iii) 溝

**SD307**(図版3、図14・24) 西調査区の北半で検出した、ほぼ東西に延びる溝である。東端はコンクリート基礎によって、西端は現代の攪乱によって破壊されていた。また、遺構中央部分では南北方向の溝**SD313・314**を切っている。遺構の現存長は11.1m、幅は0.7m内外である。検出面からの深さは0.3mほどであった。③層上面のレベルを見ると、検出範囲の東端でTP+10.7m、西端では10.6mと、西側への導水を意図したことがうかがえる。埋土は最下部に第4層由来の偽礫を含み加工時形成層と判断されるシルト層(③層)が堆積し、その上を機能時に堆積した水浸きのシルト層(②層)が薄く覆う。出土遺物の多くはこの②層から出土した。その後、最終的には炭を含んだシルト～細粒砂層(①層)によって埋没している。

当遺構からは、土師器・須恵器のほかスラグが出土した。このうち比較的多く出土した須恵器では、杯類をほとんど含まず、壺・甕など貯蔵具を主体とする点が特徴的である(図版7、図25)。甕**38**は外面下半にハケメ調整を施し、そののち同じ原体によって上半にカキメを施す。短頸壺**39**は頸部下に粘土の付着痕が円形に巡り、この部分以下に自然釉が付着する。蓋と一対で焼成された可能性が

ある。横瓶43は口縁端部から左右へと自然釉が伝う。横位で焼成された可能性があるだろう。甕44はへら状工具による上下方向のストロークを1単位として口頸部に施文し、その後、施文範囲の上下を突線によって区画する。外面体部に施されたタタキメは、木目に対して直交方向に溝が切られているため、一見すると格子目風である。器台45は外面に施されたカキメの下にわずかにタタキメを観察することができる。内面には当て具痕を残す。これらの須恵器はいずれも古墳時代後期に位置づけられる。

SD308(図14) 西調査区の中央部で検出した。長さ1.5m以上、幅0.6m、検出面からの深さは0.1mであった。北端は現代の攪乱、南端は室町時代の溝状遺構SD2a03によって破壊されていた。

#### iv) 落込み

SX301(図14) 西調査区の東端で検出した浅い落込みである。南北5.0m、東西3.0m以上の規模があるが、遺構の輪郭

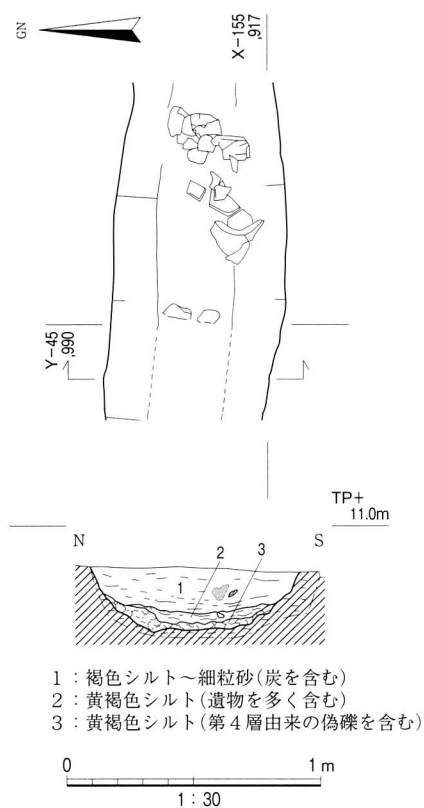


図24 SD307中央部実測図

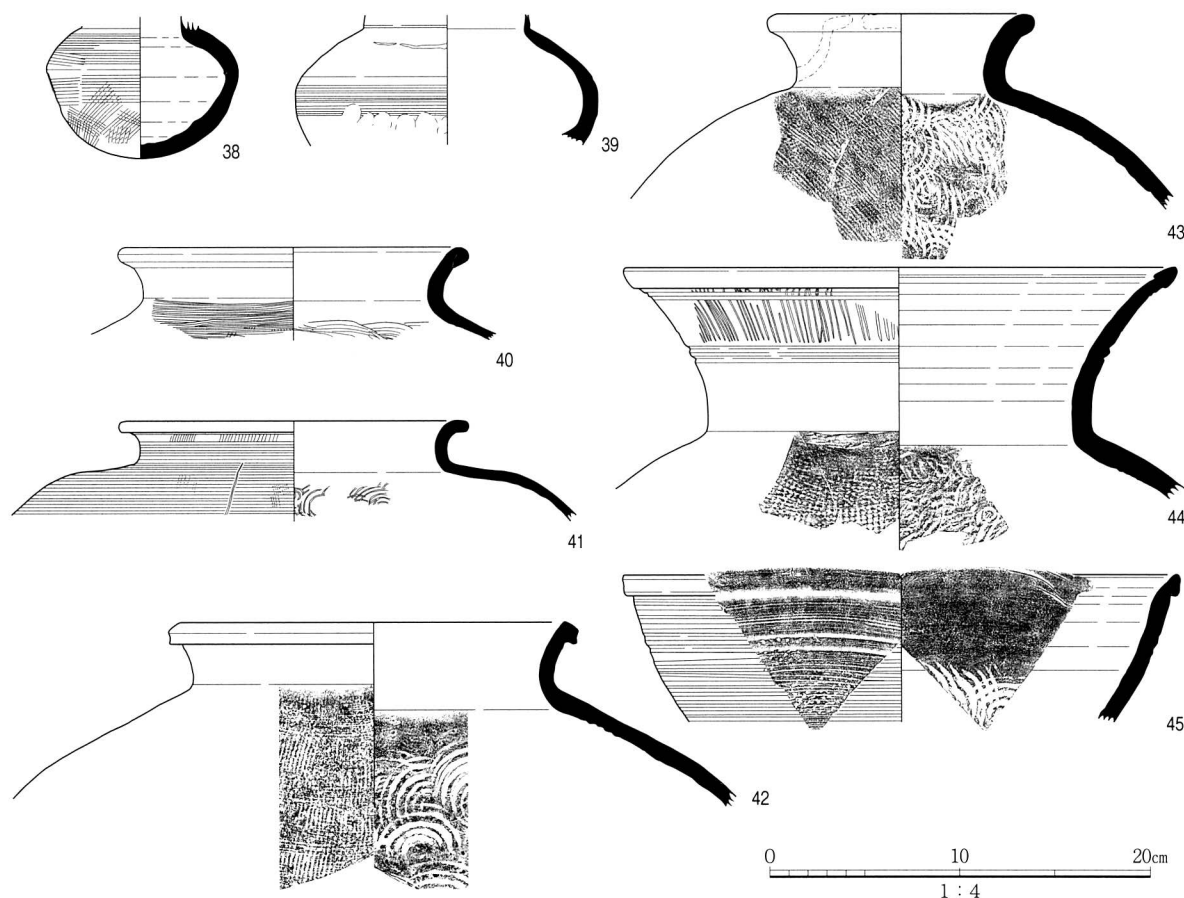


図25 SD307出土遺物

を明確に検出することはできなかった。検出面からの深さは0.05mと浅く、平面・断面とも明確な加工面は確認できなかった。

**SX302**(図14) 東Ⅲ区の北端で検出した。南北1.5m、東西5.4m、検出面からの深さは0.05mである。**SX301**と同様、遺構の輪郭ははっきりせず、加工の痕跡も明確でなかった。

### 3) 調査区東半の遺構と遺物(図26)

#### i) 掘立柱建物

**SB304**(図27) 東Ⅰ・Ⅱ区で検出した。桁行3間以上、梁行3間(4.0m)の側柱建物である。掘形の形状は一定でないが、一辺0.7mを測るものがあるなど、全体的に大型である。平面的な大きさに対応して、検出面からの深さも0.4～0.5mと比較的深いものがある。ただ、柱痕跡の直径は0.15～0.20mと標準的である。柱筋の通りは比較的良いが、柱間は1.1～1.6mとばらつきがある。平面で柱痕跡の位置を確認できなかった5基のうち、断面で抜取りの痕跡を確認できなかったものは、複数回断面を切直したが、最終的にこれを観察することができなかった。

**SB305**(図版2、図28) 東Ⅰ区で検出した。桁行・梁行とも1間以上の掘立柱建物である。掘形の形状は隅丸の長方形を呈し、長辺0.5～0.7m、短辺0.5mと比較的大型である。検出面からの深さは0.3～0.5mであった。柱痕跡の直径は0.15mである。なお、建物の南西辺と柱筋を揃える柱穴2

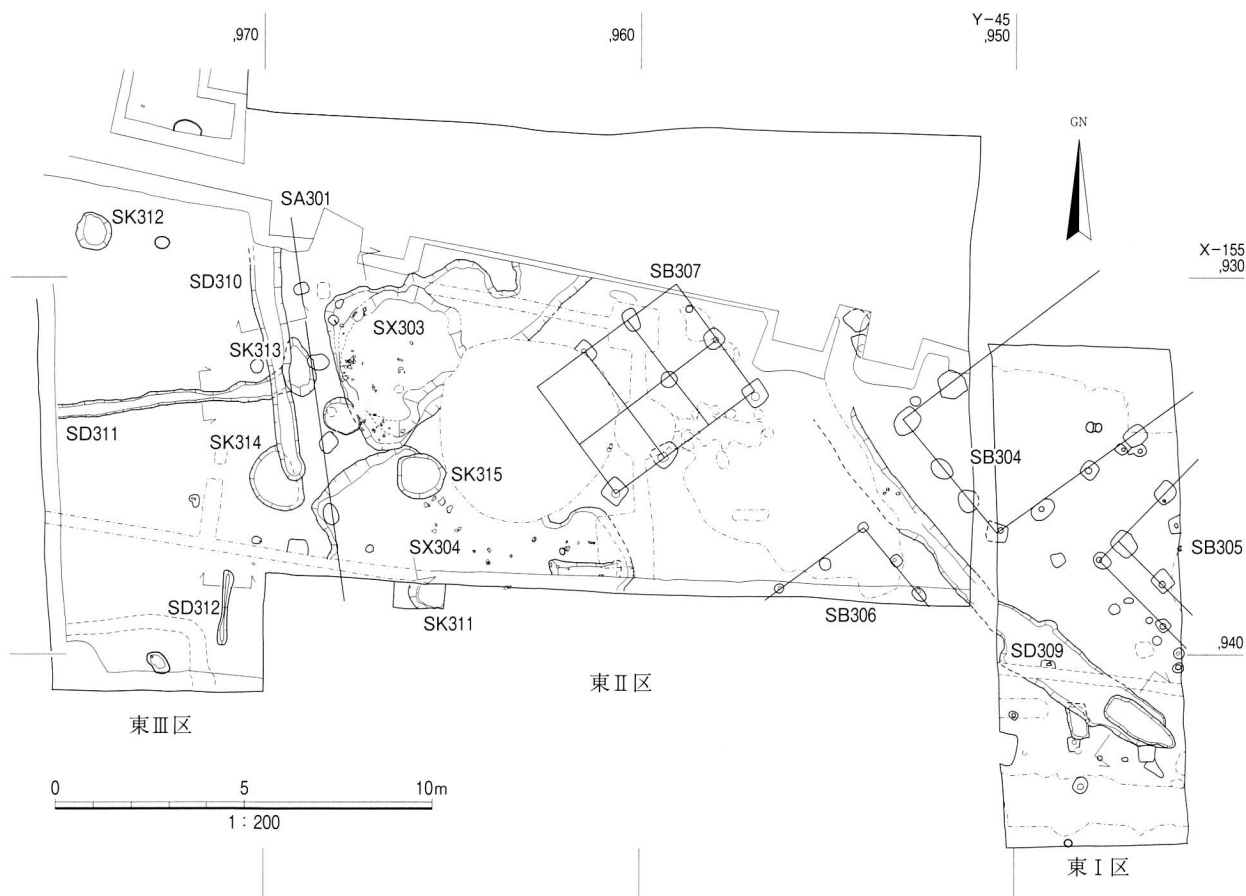


図26 調査区東半の遺構分布

基については、やや規模の小さい柱穴であることから、縁を構成する柱穴である可能性を考えた。

**SB306**(図28) 東Ⅱ区の南東隅で検出した掘立柱建物である。桁行・梁行とも2間以上である。柱穴の掘形は円形を呈し、直径0.3mと他の建物の柱穴と比べ一回り小さい。また、検出面からの深さも0.15m程度と、上部の削平を考慮したとしても浅い。柱痕跡の直径は0.1mであった。

**SB307**(図29) 東Ⅱ区で検出した。桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.5m)の総柱建物である。側柱は一辺0.5～0.6mの隅丸方形を呈し、床束と思われる柱穴は直径0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは側柱で0.5m、床束で0.2mであった。柱痕跡の直径は0.15mである。

## ii) 柵

**SA301**(図30) 東Ⅱ区の西端で検出した。北でやや西に振って延びる連続する4基の柱穴を柵と

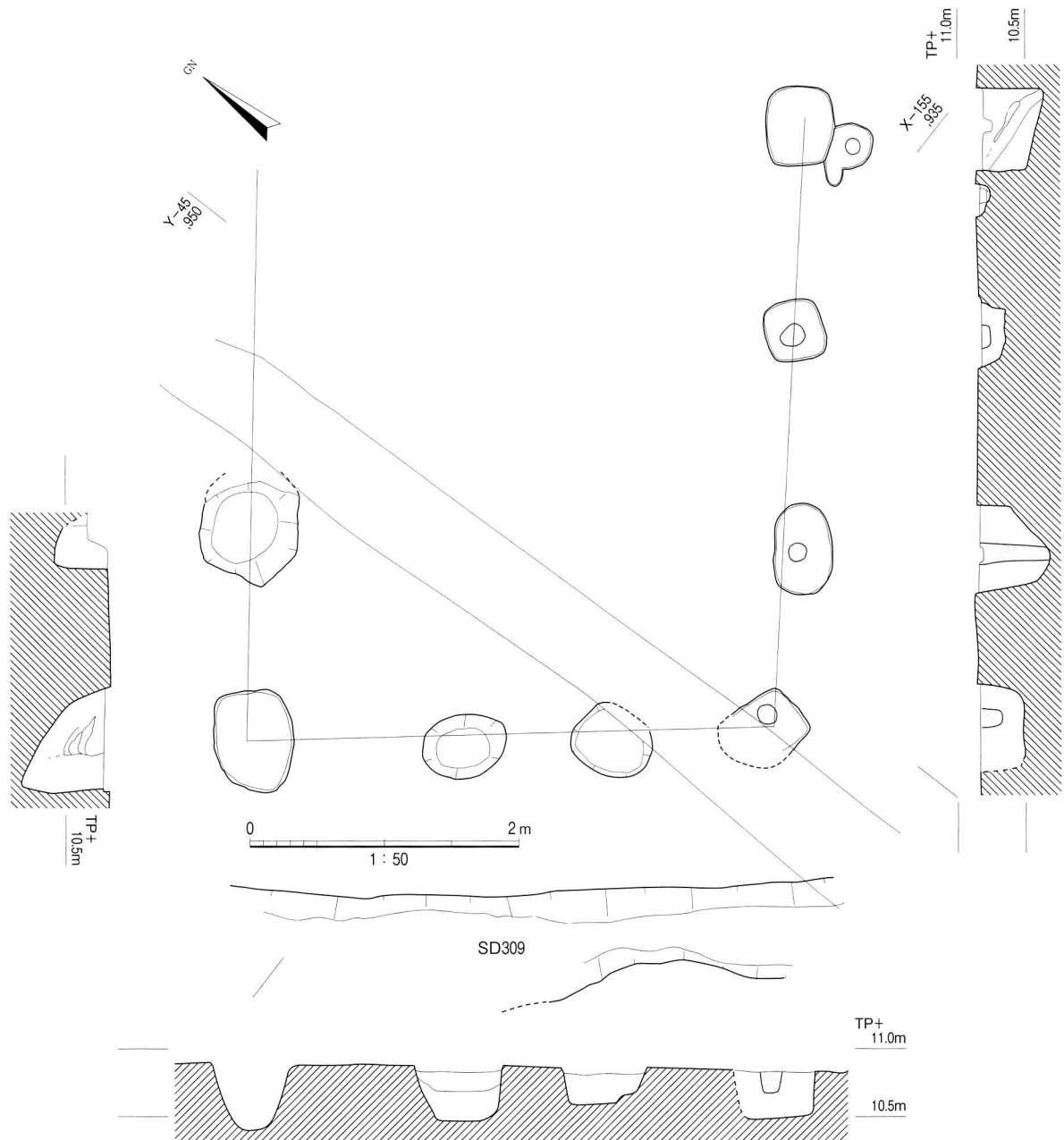


図27 SB304実測図

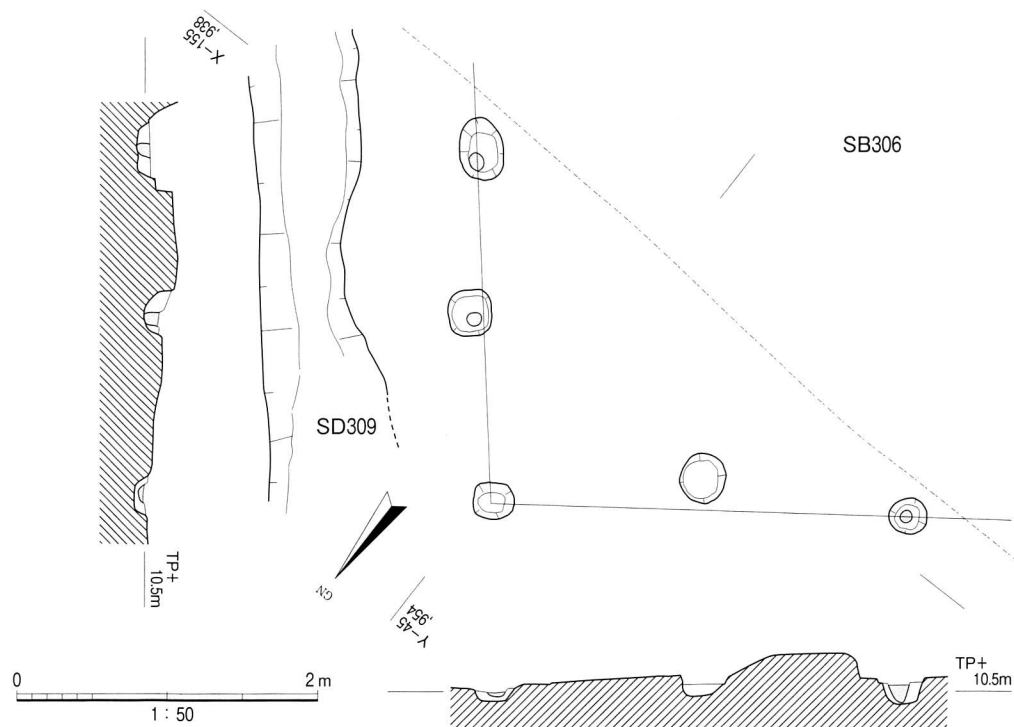
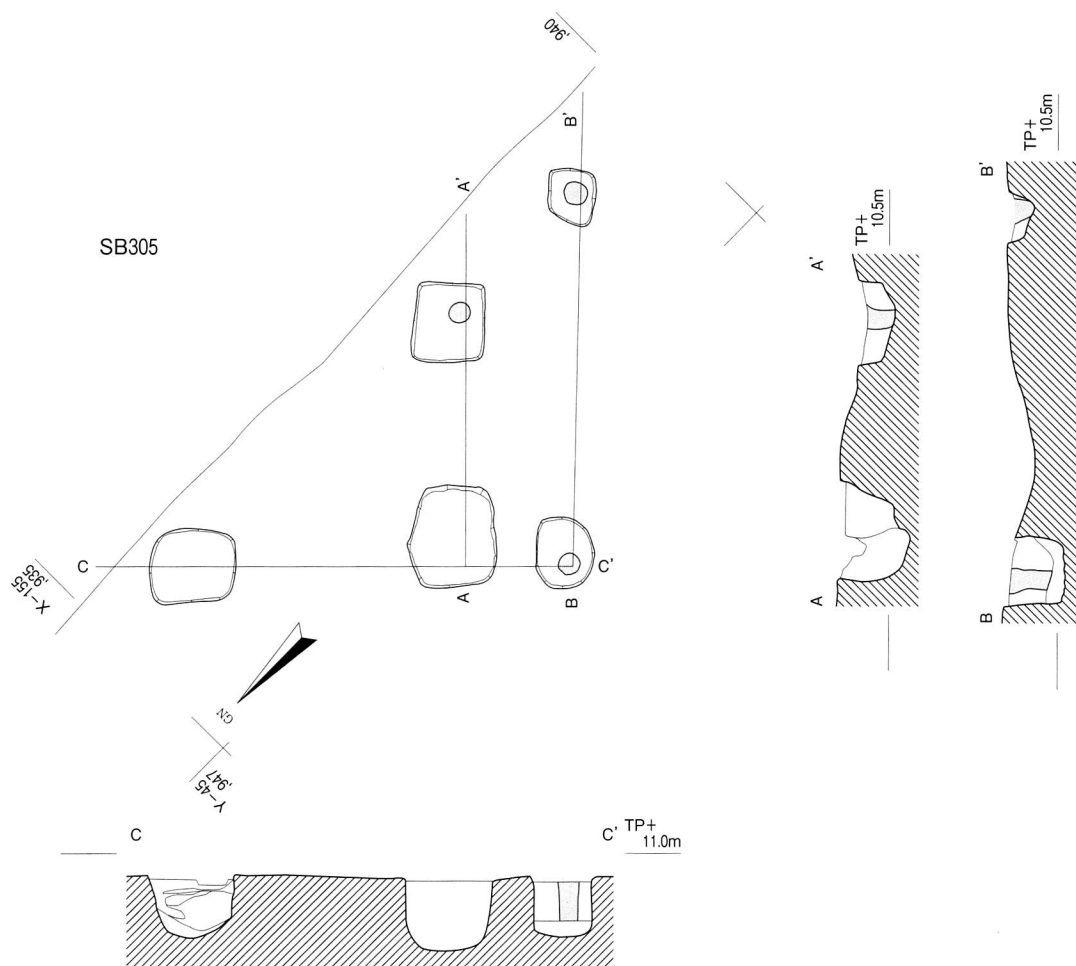


図28 SB305・306実測図

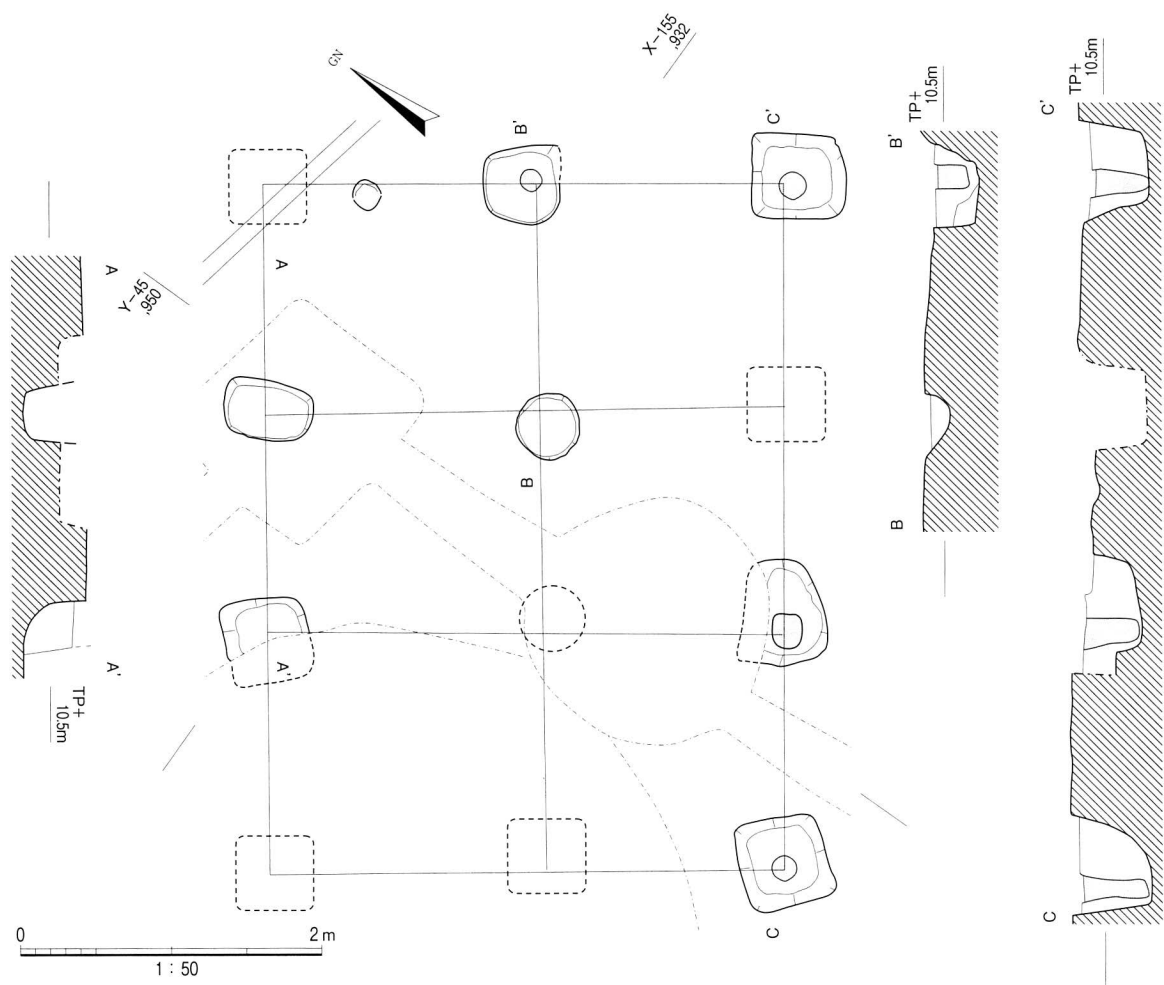


图29 SB307实测图

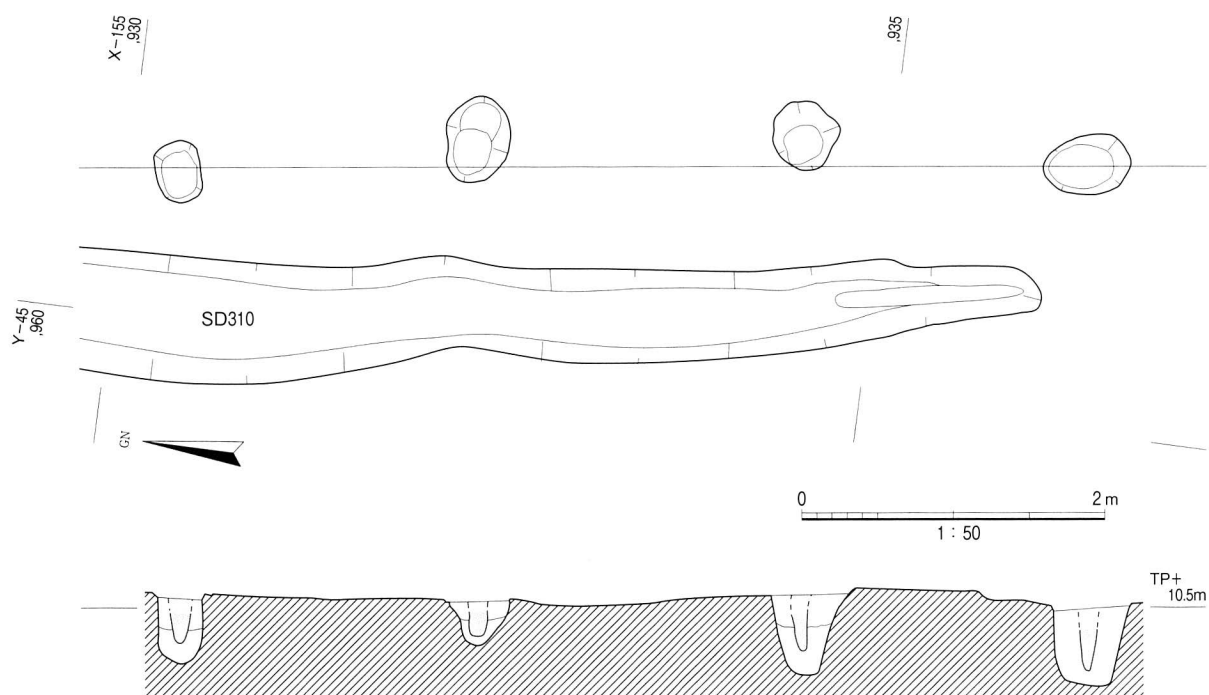


图30 SA301实测图

して復元した。南端の柱穴は後述する落込み **SX304** の埋土を除去した段階で検出したものである。また、柵の西側には **SD310** がほぼ同方向に延びる。柱穴の掘形は円形を呈しており直径 0.3～0.5m、検出面からの深さは 0.3～0.5m である。柱痕跡の直径は 0.15m であった。柱間は 1.9～2.0m である。

## iii) 土壤

**SK311**(原色図版3、図31) 東Ⅱ区の南壁は現代の攪乱によって遺構が失われていたが、その壁面にて赤く変色した土層および炭層を検出したため、南側に調査区を拡張した。その結果、**SX304**の②層(図35)を除去した段階で、土壌**SK311**を検出した。土壌の上端は直径1.5mの円形を呈する。土壌は緩やかに窪み、その中心部の直径0.8mの範囲には赤く変色した地山(②層)が分布する。この②層は地山直上に乗っていた。**SK301**で観察された状況と同様に、ここでも②層からその直下にある地山へと漸移的な色調の変化は示さない。また、この②層の上には、炭と灰からなる①層が2cmほど堆積する。①・②層分布範囲の東側には、赤色土(②層)の偽礫を含む中粒砂混りのシルト層(③層)が土手状に盛られていた。土壌は最終的には、第3層によって埋没している。

SK311を埋める第3層からは、須恵器の細片および羽口の先端部が出土した。羽口46の先端部は高温を受け発泡し、白色あるいはガラス質に変質している。また、残存するすべての破面が被熱し赤色を呈している。内径は2.6cm、外径は5.2cmほどに復元できる。胎土には長石粒を含み、比較的緻密な粘土を使用している。また、混和材として植物繊維が加えられている。

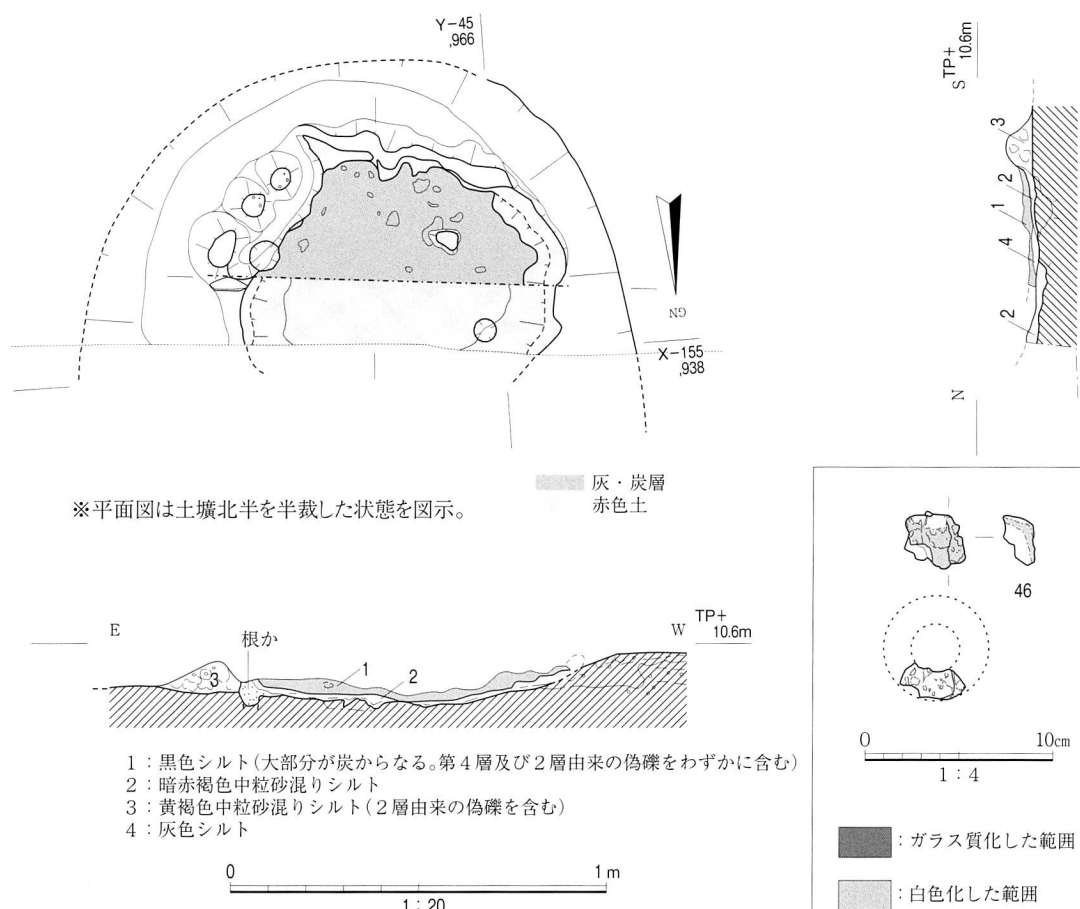


図31 SK311実測図および出土遺物

出土した須恵器から遺構の時期を決することはできないが、**SX304**の③層を切り、第3層によって埋没していることから、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と考えて差し支えあるまい。

遺構の性格を推定するため、①層に対して蛍光X線分析を行い、また土壌を洗浄したが、積極的な手がかりとなる情報は得られなかった。羽口**46**の出土は当土壌が金属加工に係わる施設であったことを推測させるが、ただ、たとえば鍛冶炉と想定した場合には当遺構は著しく大型であり[安間拓巳1995：p.94]、短絡的に遺構の性格を決することには躊躇する。

ここで、**SK301**と**SK311**の共通点と相違点について整理しておきたい。まず共通する内容として、底面に灰・炭を敷く、あるいは投棄するという点を挙げることができる。また、両者とも遺構の側面あるいは底面が赤く変色している。その一方、**SK301**はほぼ垂直に掘込んだ長方形の土壌であるのに対し、**SK311**は浅く窪む円形の土壌である。また、**SK301**は土壌底面に赤色土が分布しないのに対して、**SK311**はこれが分布している。

**SK312**(図32) 東Ⅲ区で検出した。直径0.9mを測る円形の土壌である。検出面からの深さは0.2mであった。埋土はいずれも粘土質シルト層であるが、下部(②層)は第4層由来の偽礫を多く含み、上部(①層)はわずかに炭を含んでいる。

**SK313**(図32) 東Ⅱ区で検出した。南北に長い長楕円形の土壌である。**SA301**を構成する柱穴および**SD310**によって切られていた。長軸1.6m、短軸0.8mを測る。検出面からの深さは0.1m未満であり、埋土は粘土質シルト層(①層)であった。

**SK314**(図32) 東Ⅱ区の西端で検出し、一部は東Ⅲ区にかかる。**SD310**によって切られていた。直径1.5mの浅い窪みであり、検出面からの深さは0.5mである。埋土は中粒砂混りの粘土質シルト層(①層)であり、明確な加工の痕跡は確認できなかった。

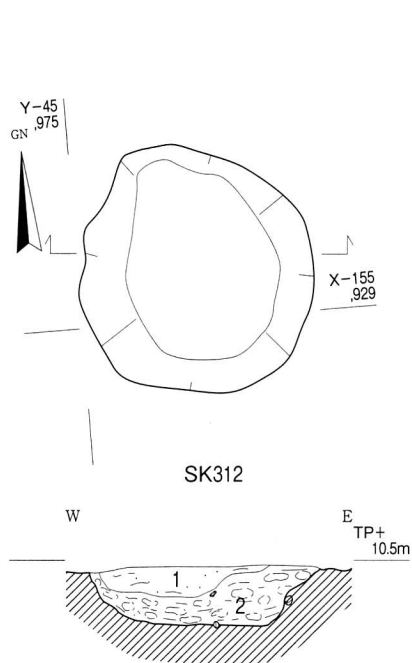
**SK315**(図32) 東Ⅱ区で検出した。後述する落込み**SX304**を切っている。直径1.2mを測り、検出面からの深さは0.05mと浅い。埋土は礫混りの粘土質シルト層(①層)であり、炭を含んでいた。

**SK312～315**からは土師器・須恵器が出土したが、いずれも細片でありこれらから時期を決定することはできない。

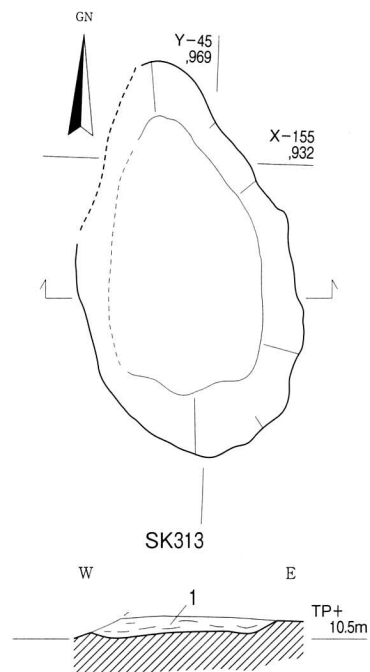
#### iv) 溝

**SD309**(図26・33) 東Ⅰ・Ⅱ区にまたがって検出した溝である。北西－南東方向に延びる。長さは12.0m以上、幅は最大で1.4mである。検出面からの深さは、もっとも深い部分で0.5mであった。遺構底面の標高値を見ると、東Ⅰ区ではTP+10.7m、東Ⅱ区では10.6mと、北東へ向いやや低くなっていた。なお、遺構南東端はやや深く掘込まれており、この部分の標高はTP+10.6mであった。埋土は、水浸きの粘土質シルト層(③層)が最下部に堆積し、その上を偽礫を含む埋戻し土(②層)が覆う。最終的には炭を含むシルト～細粒砂層(①層)が遺構を埋めていた。

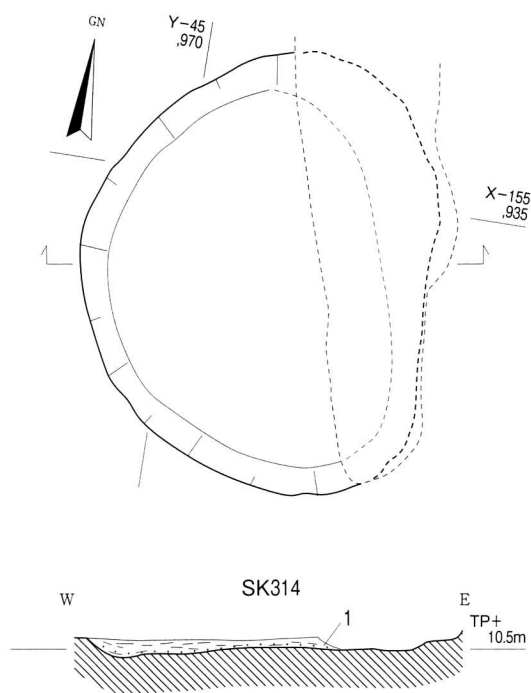
遺物は土師器・須恵器が出土し、このうち多くは③層から出土した(図版7、図34)。須恵器杯**H蓋47**は灰白色を呈し、焼成が著しく軟質である。土師器甕**52**は、全体が著しく摩耗している。外面体部にはわずかにハケメを確認することができた。これらはTK43～TK209型式に属するものであろう。



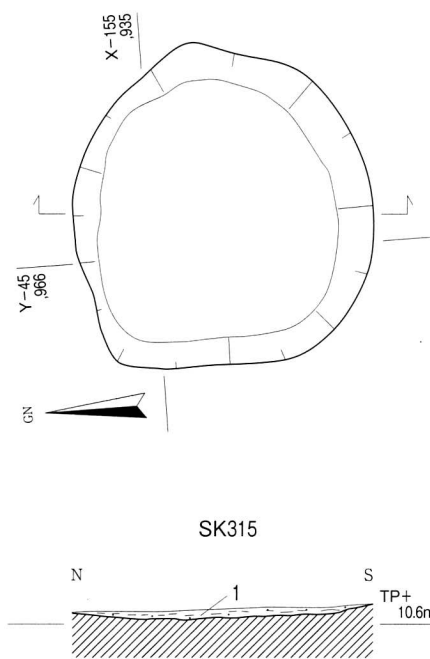
- 1 : にぶい黄褐色粘土質シルト(わずかに炭を含む)  
 2 : にぶい黄褐色粘土質シルト(第4層由来の偽礫を多く含む)



- 1 : 黄褐色粘土質シルト



- 1 : 褐色中粒砂混り粘土質シルト



- 1 : にぶい黄褐色礫混り粘土質シルト(炭を含む)

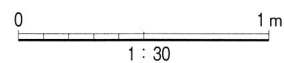


図32 SK312~315実測図

**SD310**(図26・33) 東Ⅱ区の西端で検出した。前述の**SA301**の西側に位置し、これとほぼ平行して南南東-北北西に延びる。また、**SK313・314・SD311**を切っている。長さは6.2m以上、幅0.6m、検出面からの深さ0.1mを測る。埋土は中粒砂混りの粘土質シルト層(①層)である。当遺構から出土した遺物のうち、須恵器杯H身**49**、器台**50**、甕**51**を図示した(図版7、図34)。受部径12.4cmの杯H身**49**は底部にヘラケズリを施し、一部に自然釉が付着している。器台**50**は灰白色を呈し著しく軟質の焼成である。甕**51**は全体に自然釉が付着している。口頸部にはカキメののち、凹線を巡らせる。その上方に施されたクシ状工具による列点文は、原体の幅から考えておそらくはカキメを施した原体と同一のものである。このうち**49**はTK209型式に位置づけられる。

**SD311**(図26・33) 東Ⅲ区で検出した。**SD310**とほぼ直行し、これによって切られる。長さ5.8m以上、幅0.3~0.6mを測る。検出面からの深さは0.05mで、埋土は粘土質シルト層(①層)であった。

**SD312**(図33) 東Ⅲ区の南端で検出した。南北2.0m、幅0.3mで、検出面からの深さは0.05mであった。埋土は礫混りの粘土質シルト層(①層)であり、第4層由来の偽礫を含む。

#### v) 落込み

**SX303**(図26・35) 東Ⅱ区の北半で検出した不定形な落込みである。南西-北東方向に6.4m以上、南東-北西方向

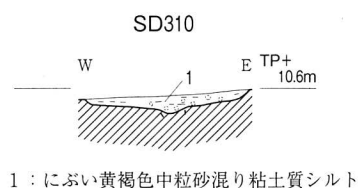
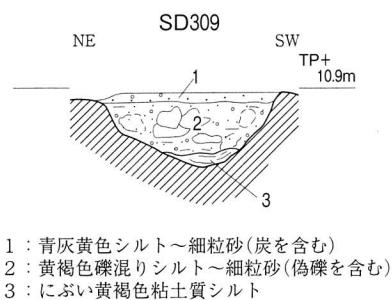


図33 SD309~312断面図

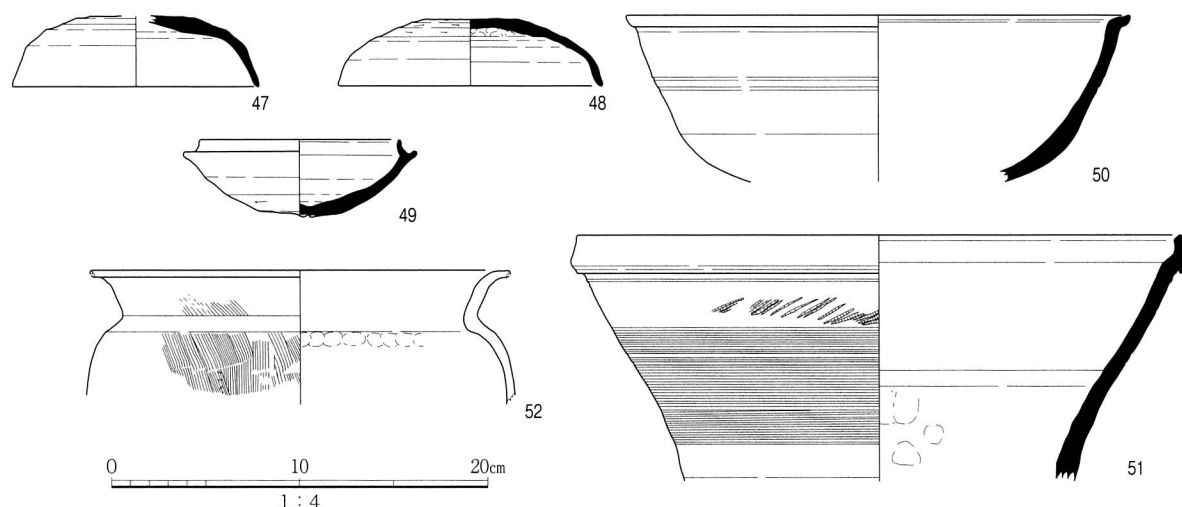


図34 SD309・310出土遺物  
SD309(47・48・52)、SD310(49~51)

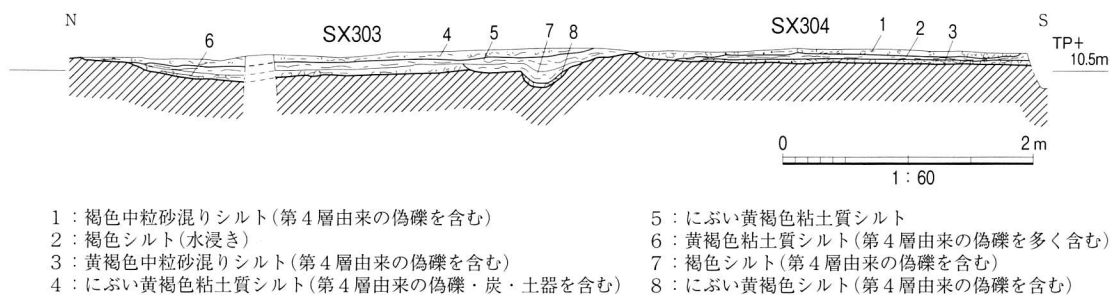


図35 SX303・304断面図

に4.2mの規模がある。検出面からの深さは0.2mであった。埋土は最下部に第4層に由来する加工時形成層(⑥層)が認められ、その上を水浸きの粘土質シルト層(⑤層)が覆う。最終的には、第4層由来の偽礫を含む粘土質シルト層(④層)によって埋戻されていた。また、この④層には炭と比較的多くの土器が含まれていた。遺構を埋戻す際、同時に投棄されたものであろう。

当遺構からは土師器・須恵器が出土し、このうち須恵器杯蓋60～62、杯身63～66、高杯蓋67、高杯68、平瓶69、そして土師器高杯70を図示した(図版8、図36)。杯蓋60は天井部にヘラ記号を施す。杯身は受部径14cm 台で底部をヘラケズリを施すものがほとんどで、図示できなかった資料に一部受部が12cm 台で、ヘラ切り不調整の資料が含まれる。杯身63は外面の一部が赤褐色に変色している。いわゆる火罨であろう。64・65は焼成が甘く、表面は灰白色、断面はにぶい橙色を呈する。66は底部に3条のヘラ記号を施す。杯蓋67は扁平化したつまみを有する。平瓶69は、自然釉の付着状況から火表・火裏が推測できる。内面には成形時に体部を閉塞した粘土円盤の痕跡を残す。土師器高杯の杯部70は、器面が荒れているものの、放射状に施された暗文をかすかに観察することができる。以上のうち、須恵器はその大部分がTK209型式に属するものであり、図示できなかった資料の一部がTK217型式に降る可能性がある。また土師器高杯70もTK217型式に併行する可能性があるが、遺構の時期の中心は6世紀後葉～7世紀初頭と見てよい。

**SX304**(図26・35) 東Ⅱ区の南半で検出した不定形な落込みである。東西8.8m、南北3.2m以上の大きさである。検出面からの深さは0.1mである。先に報告した**SK311**は、当遺構の②層を除去した段階で検出した。また、当遺構は**SA301**を構成する柱穴を切っている。埋土は最下部に第4層由来の偽礫を含む加工時形成層(③層)が堆積し、その上を水浸きのシルト層(②層)が覆い、最終的には第4層由来の偽礫を含む中粒砂混りシルト層(①層)によって埋戻されている。遺構の北端部は**SX303**とわずかに接しており、平面・断面の観察から、**SX304**の埋戻し後に**SX303**が掘削されたものと判断した。

遺物は②層を中心として土師器・須恵器・石製品・石材が出土し、このうち須恵器杯蓋53、杯身54・55、高杯蓋56、高杯57、石錘58、緑色片岩59を図示した(図版8、図36)。ほぼ完形の杯身54は受部径14.0cm で、底部にヘラケズリを施す。口縁は著しく歪んでいる。図示しなかった資料についても、受部径14cm 台で、底部をヘラケズリするものがほとんどである。長脚の高杯57は、半径1.5mほどの範囲から出土した破片を接合したところ、完形に復元することができた。脚部の中程には2条の凹線を巡らせ、その上下に2段のスカシ孔を3方向に空けている。脚部の端部はやや

上方へと反り、ヘラ記号様の沈線を施している。受部は新しい欠損部を除き4箇所が欠けている。断面の状況からみて、あるいは意図的に打欠かれた可能性がある。58は砂岩製の石製品である。線状の凹みが観察できることから、石錘として使用された可能性が高い。緑色片岩59は、明確な加工痕を有さない。ただし、いわゆる滑石製品の素材などとして搬入された可能性があるだろう。これらの

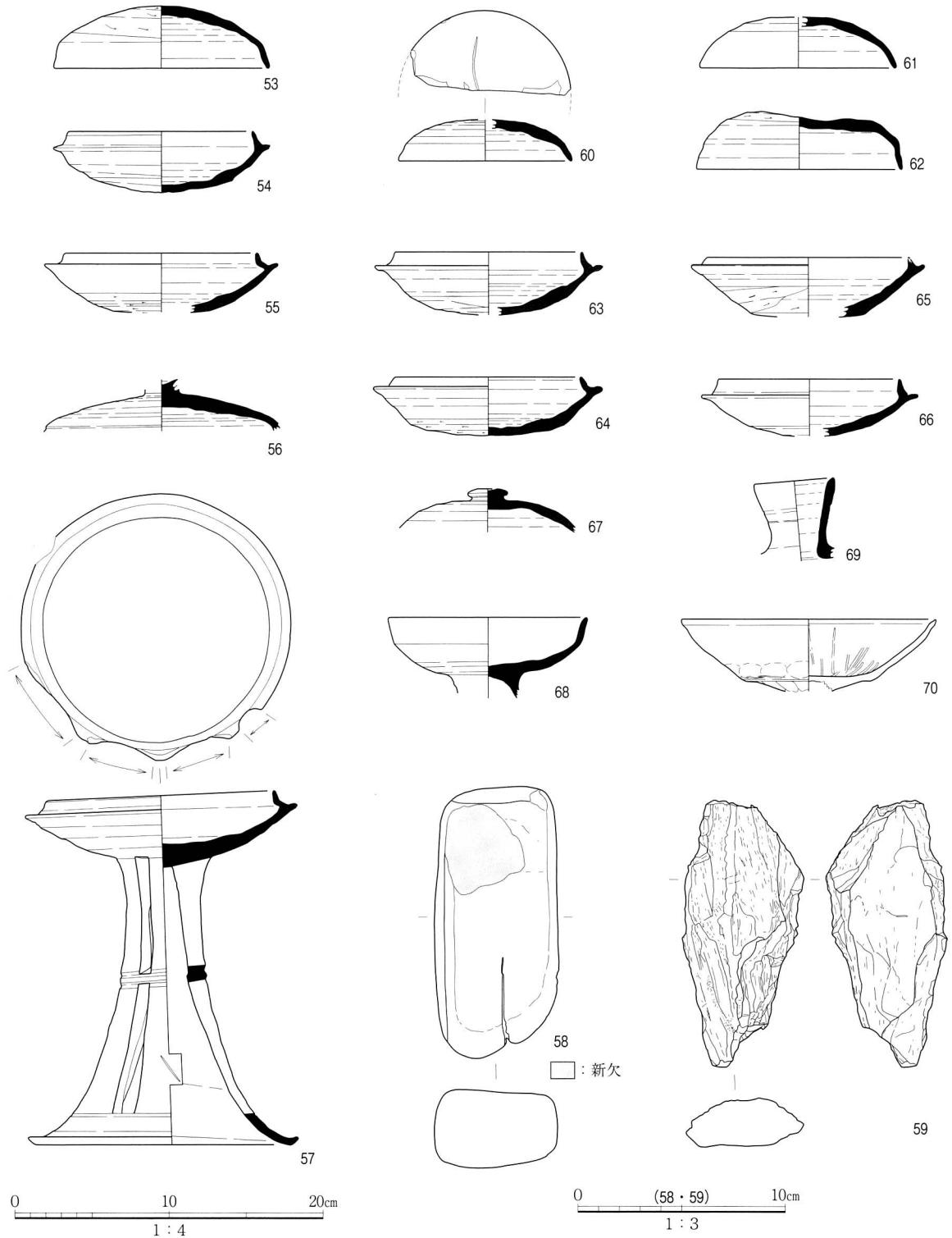


図36 SX303・304出土遺物  
SX303(60~70)、SX304(53~59)

土器群は、須恵器型式ではTK209型式に位置づけられる。**SX303**よりも若干古相を呈する遺物が含まれはするが、顕著な年代の開きは認められない。

#### 4) 小結

以上のように、今回の調査では古墳時代後期～飛鳥時代の居住域を検出した。ここでは、遺構のまとめりにその状況を確認しておきたい。

**調査区西半の状況** 6世紀前半に位置づけられる竪穴建物**SB301・302**を中心として、西調査区北西部に遺構が密集していた。復元した竪穴建物は2棟であったが、柱穴の数を考えればより多くの建物が存在していた可能性がある。なお、調査終了後の工事の際、調査区西側で竪穴建物と思われる遺構の存在を確認している。

**調査区東半の状況** 東側には掘立柱建物4棟**SB304～307**が分布し、その間にはこれらと方位を同じくする溝**SD309**が掘削されている。居住域内部を区画する、あるいは排水などの機能を想定できる。また、これらの建物群の西側を見ると、柵**SA301**および溝**SD310**を境として、これより西では遺構の密度が低くなる。このことから、**SA301**および**SD310**は居住域の西限を画する役割を担ったものと考えられる。建物群を構成する柱穴から時期決定可能な遺物は出土していないが、**SD309**およびこの居住域の西端に掘削された**SX303・304**から出土する土器はTK209～TK217型式に属するものである。掘立柱建物、そして居住域の時期もこれに準ずるものと考え、6世紀末葉～7世紀前半に位置づける。

**山之内遺跡との係わり** 東に接する山之内遺跡西地区では、該期の遺構が多く確認され、「同じ計画のもとに建物群を配置しながらも、微地形の変化に応じて基準を変え」る特徴が指摘されている[平田1999：p.74]。今回の調査で確認した内容は、同様のあり方を示す居住域が遠里小野遺跡にも連続して広がっていることを示すものといえよう。また、同じく山之内遺跡西地区では、羽口・スラグなど金属加工に係わる遺物が出土している。今回の調査でも、西調査区の竪穴建物**SB301**から椀形滓、東Ⅱ区の土壙**SK311**から羽口が出土している点は注目できる。つとに指摘されていることではあるが、この点からも、山之内遺跡西地区と遠里小野遺跡を一連のものとして考え、今後の調査・研究が行われるべきであろう。

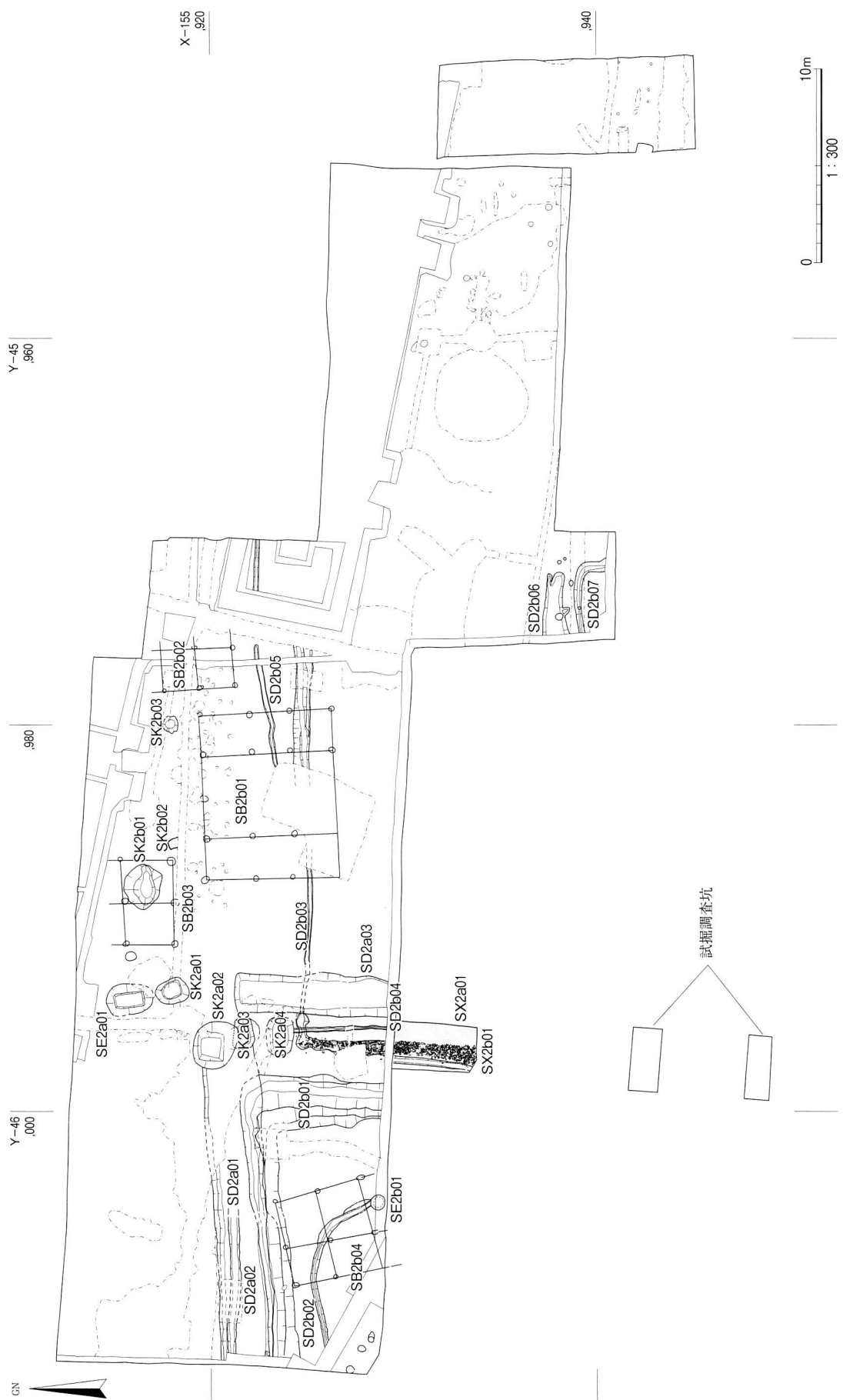


図37 中世の遺構分布

### 第3節 中世の遺構と遺物

#### 1) 概要

地層の残存状況が良好な部分では第2層の基底面において、第1層以上の耕作に伴う削平を受けた部分ではその基底面において、中世の遺構群を検出した。前節でみた古墳～飛鳥時代の遺構分布とは異なり、これら中世の遺構群は西調査区に偏在している(図37)。また、これらは出土遺物や遺構の切合い、埋土によって大きく2時期に分離することができる。このうち新しい時期の遺構については、遺構の検出層準を示す数字の後に記号aを付し(例:SK2a01)、古い時期の遺構については同じく記号bを付す(例:SK2b01)。詳しくは後述するが、前者は室町時代、後者は平安時代後期に位置づけることができる。両時期の遺構は褐色を呈する砂混りシルトを埋土とするものが多いが、a期の遺構はb期の遺構に比べややしみに欠けるのが特徴である。

平安時代後期(b期)の遺構としては瓦敷き・掘立柱建物4棟・井戸1基・土塋3基・溝7条が(図38)、室町時代(a期)の遺構としては井戸1基・土塋4基・溝3条がある(図48)。以下、検出した遺構と遺物を時期ごとに報告する。なお、中世の遺構および第2層には古代の瓦が多く含まれているが、これらについては次章において詳しく報告する。

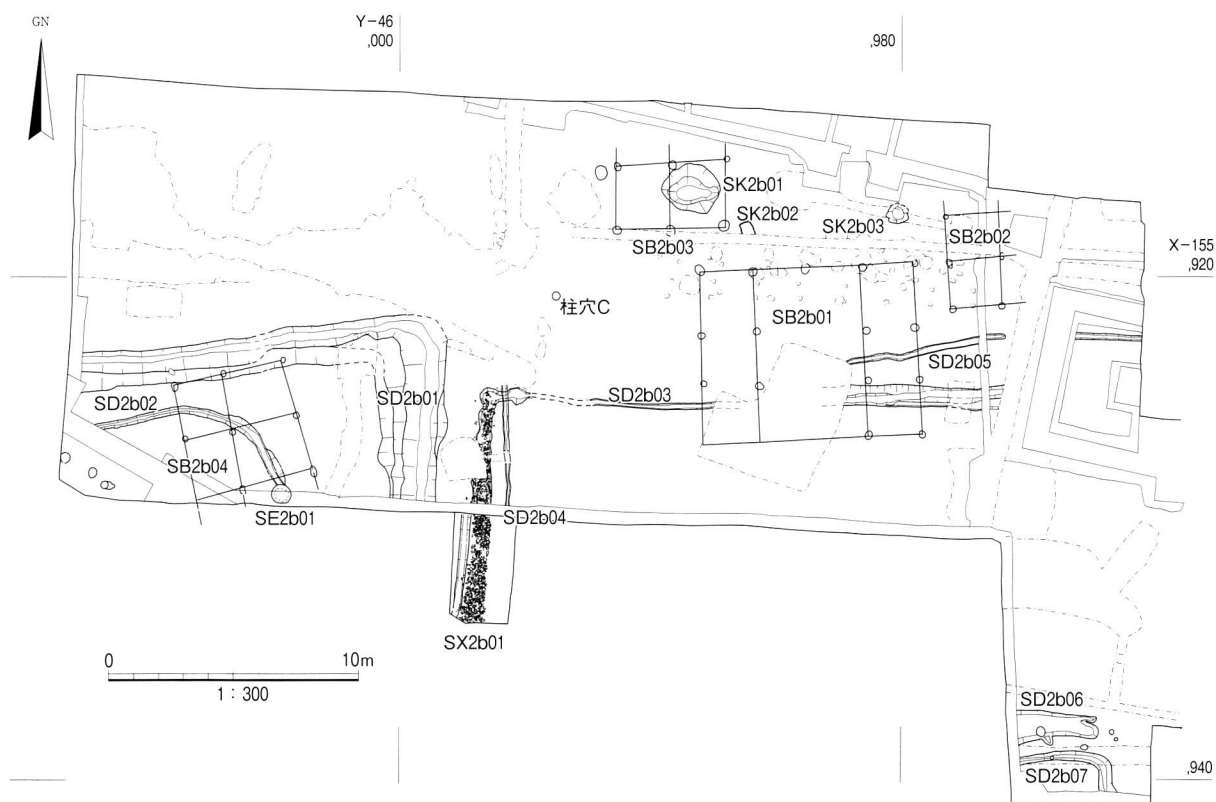


図38 平安時代後期(b期)の遺構分布

## 2) 平安時代後期の遺構と遺物

### i) 瓦敷き

**SX2b01**(巻頭写真、図版4、図39) 西調査区中央部南端において、第2層基底面で検出した。4.4mを検出した段階で、寺院に伴う遺構である可能性を考慮し、その性格と規模について追求するため、南方へ4.2mの拡張を行った。その結果、総長9.2m以上、幅0.8mを測り、拡張区よりもなお南側へ延びることが判明した。残土置き場の関係上、これ以上平面的に確認することはできなかったが、遺構の延長線上において試掘坑による確認を行った(図37)。この試掘坑では当遺構は検出されず、また上位の遺構や耕作によって破壊された痕跡も認められなかった。そのため、この間で途絶、あるいは方向を変えていることがわかる。また、北側は室町時代の土壌 **SK2a04** および現代の攪乱によって破壊されており、その延長の状況を知ることができない。当遺構の延長線上に存在する室町時代の井戸 **SE2a01** や土壌 **SK2a02** (図37) に多量の瓦が投棄されていることを考えれば(図版6)、あるいは北側へ延びるものであったのかもしれない。

当遺構の延びの方向は、真北よりも4°ほど東へ振っており、残存状況は拡張区の方が良好であった。古代に属する瓦によって構成され、これに礫や土器・土製品が含まれている(図39)。これらは多くの部分では本

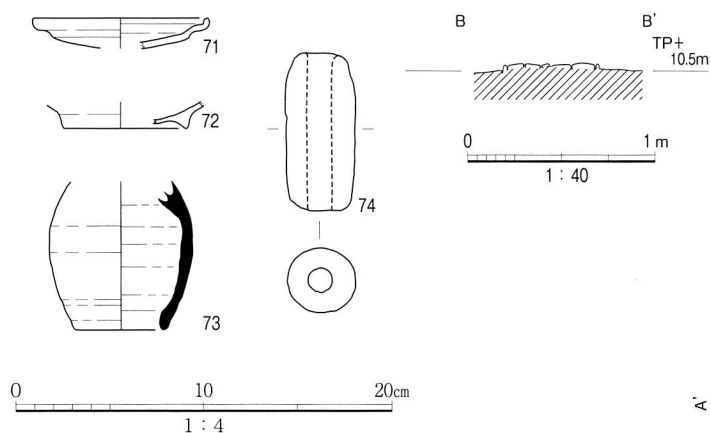
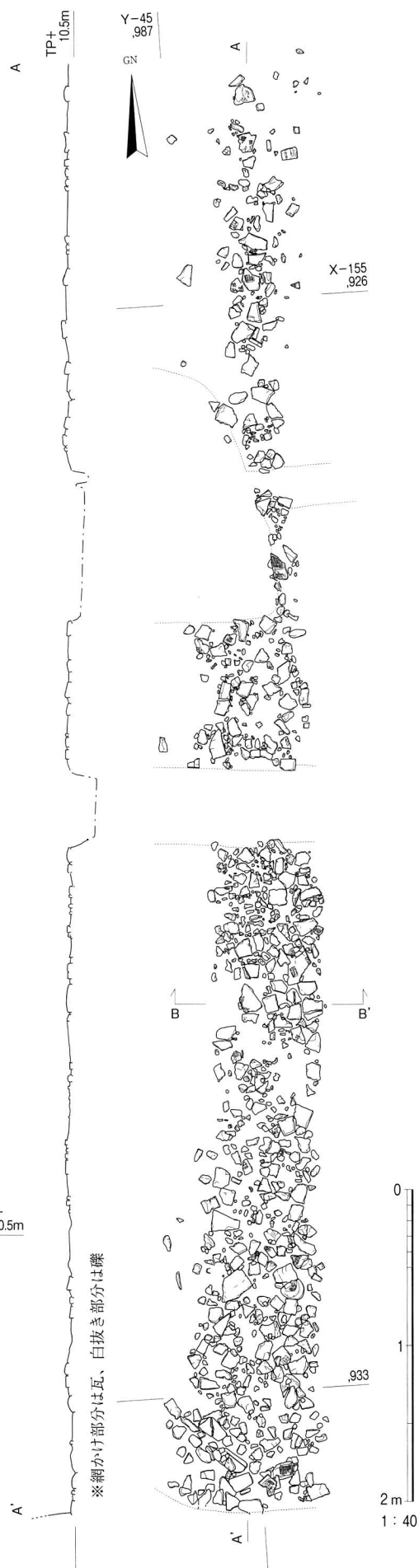


図39 瓦敷きSX2b01実測図および出土遺物



調査地の地山である第4層直上に敷かれているが、一部は第3層上に敷かれていた。瓦の種類には平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦があり、使用方法に選択性を見い出すことはできない。平・丸瓦は第4節で述べるA類を主体とするが、B類・C類もわずかに含まれている。瓦敷き**SB2b01**の上面はほぼ平坦であるが、凹面・凸面など瓦の使用方法是定していない。当遺構からは約83kgと今回の調査中もっともまとまった量の瓦が出土したが、いずれも割れており全形を知ることのできる資料はなかった。また、礫にはいわゆる川原石のほか、緑色凝灰岩など搬入品と考えられる石材も含まれていた。

当遺構から出土した土器・土製品のうち、土師器**71・72**、須恵質のイイダコ壺**73**、土錘**74**を図示した。このうち土師器皿**71**は口径9.2cmと小型化しており、11世紀に位置づけられる[佐藤隆1992]。当遺構に覆われる溝**SD2b03**からは12世紀以降の瓦器が出土しており、年代の上限を12世紀に求めることができる。また、当遺構を覆う第2層の年代から、下限は16世紀である。しかしながら、周辺の遺構の多くが12世紀前半に収まるものであることを考えれば、当遺構も12世紀前半のものである可能性が高い。

さて、問題となるのはその性格である。割れた瓦を使用した瓦敷き、という特徴から類似した遺構を検索すると、大阪府富田林市新堂廃寺で検出された塔と金堂とを結ぶ天平期の瓦敷き参道[富田林市教育委員会2003：p.40]や、奈良県桜井市山田寺跡で検出され、奈良時代中期と報告されている参道(やはり塔に敷設されたもの)[奈良文化財研究所2002：p.141]、そして同じく山田寺の塔の周囲に設けられた犬走り[奈良文化財研究所2002：p.139]などの例を見い出すことができる。これらは寺院に伴う遺構という点で共通するが、今回の調査では明確な寺院遺構は検出できなかった。また、同時期の掘立柱建物**SB2b01～04**とは方向を異にしており、これらに伴ったものであると積極的に論じることも難しい。したがって、当遺構の性格について明言することは困難であるが、遺構の形状から推して道路として機能していた可能性を提示しておく。

## ii) 掘立柱建物

**SB2b01**(図版5、図40) 西調査区の東部で検出した側柱建物である。A・C列の柱穴が検出面より0.5～0.6mと深く掘込まれているのに対して、B・D列はこれよりも浅いものが多い。そのため、東西に底をもつ桁行3間(6.6m)、梁行2間(4.3m)の両庇付き建物に復元することが妥当であろう。方位は、北で約3°西へ振る。掘形の形状はいずれもほぼ円形で、直径は0.3m程度である。柱痕跡の直径は0.15～0.20mであった。芯々間の距離は桁行・梁行ともに2.1mであるが、北の1間分のみが2.4mと他よりも長い。柱痕跡が確認できなかった柱穴では、柱の抜取り痕が認められた。

**SB2b02**(図41) 西調査区の北東端で検出した。東西1間以上、南北2間以上の総柱建物である。方位は北で約2°西へ振る。掘形は円形で、直径は0.20～0.25mであった。柱痕跡の直径は0.10～0.15m、芯々間の距離は1.8～2.0mであった。

**SB2b03**(図41) 西調査区の北部で検出した。東西2間、南北1間以上の総柱建物である。方位は北で1°東へ振る。掘形は円形で、直径はA列のものが0.18～0.25m、B列のものはこれよりも一回り大きく0.30～0.35mである。柱痕跡の直径は0.10～0.15m、芯々間の距離は東西方向が2.1m、

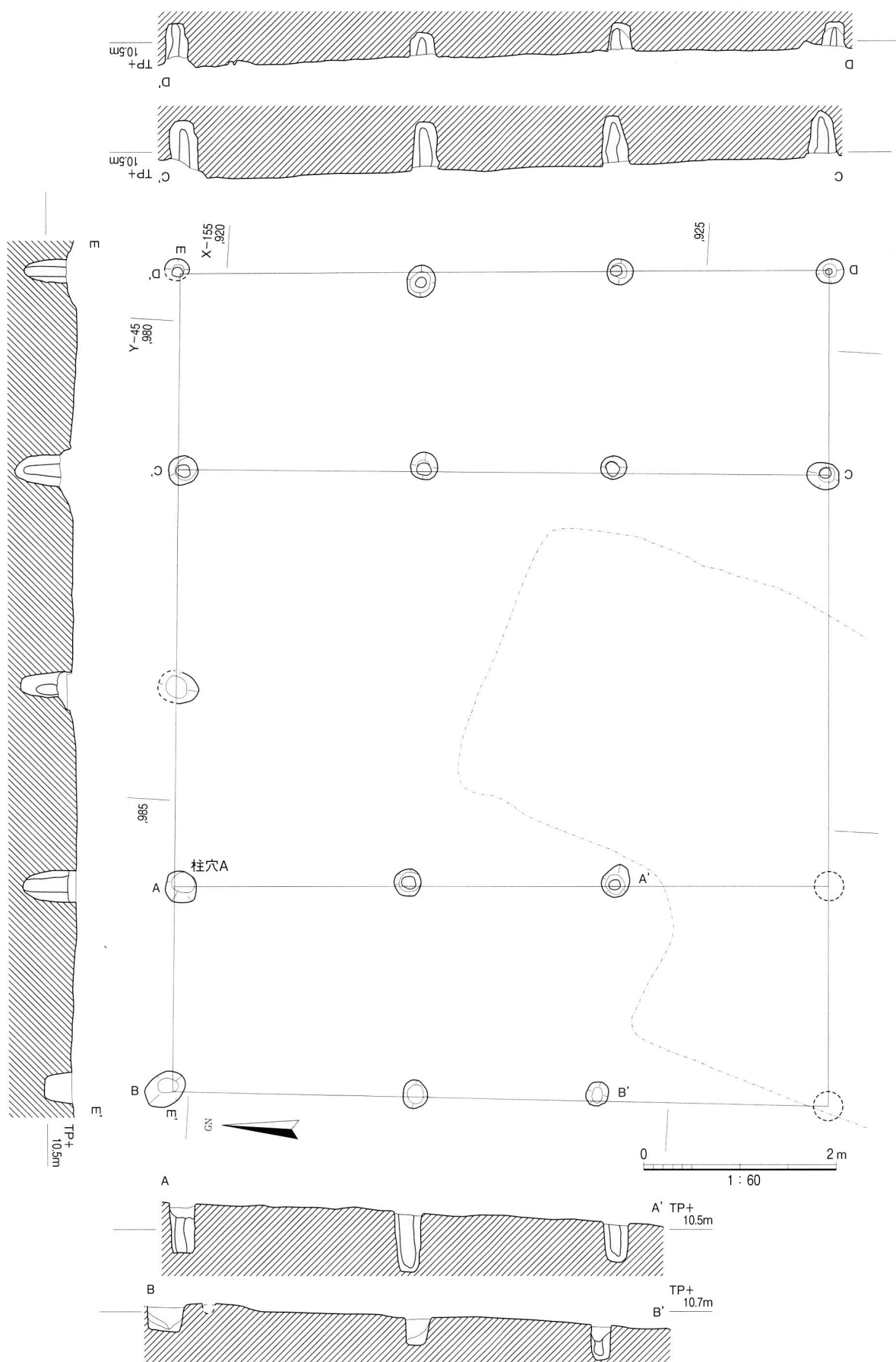


图40 SB2b01实测图

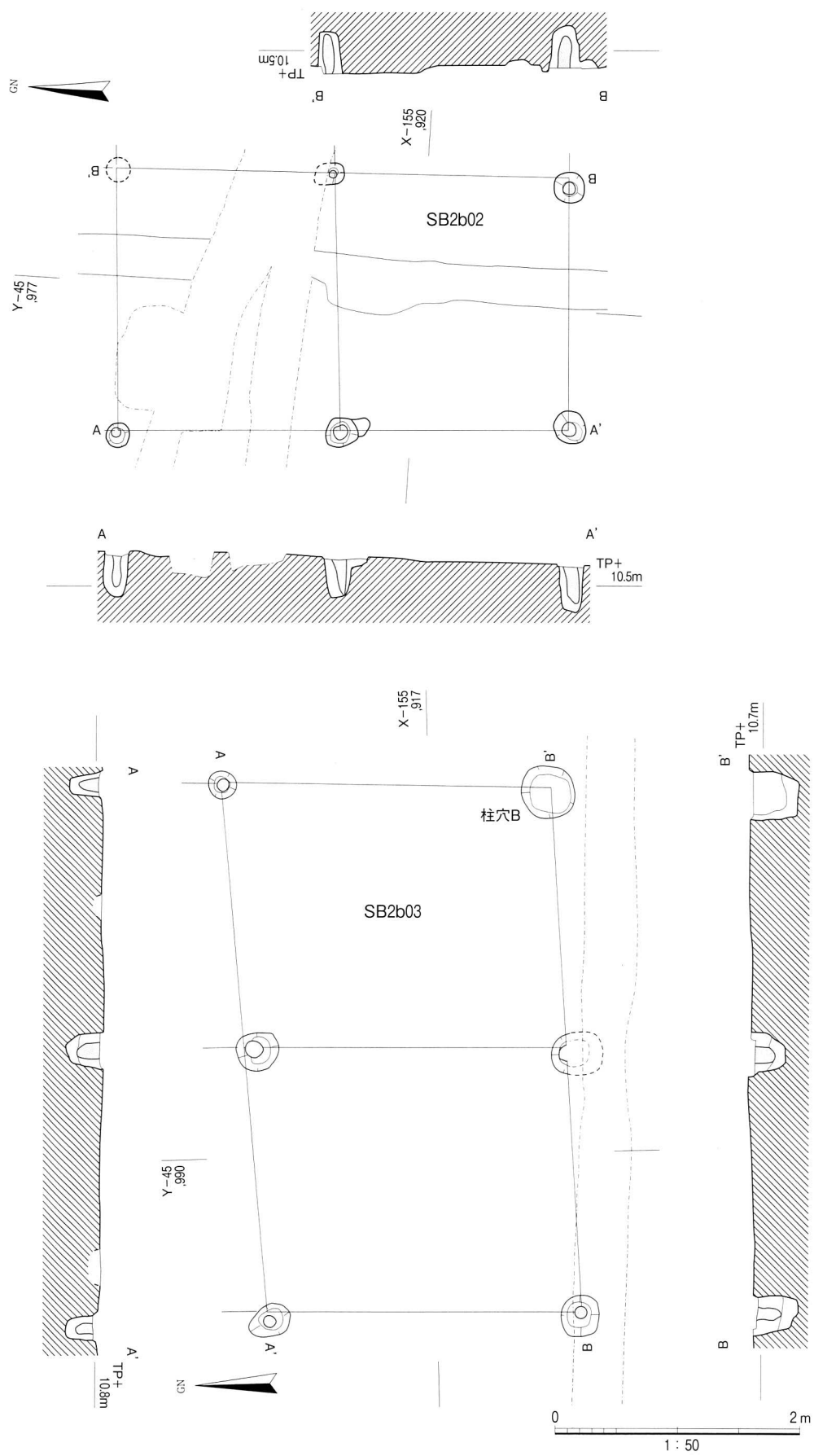


图41 SB2b02・03实测图

南北方向が2.5mであった。

**SB2b04**(図版5、図42) 西調査区の西南部で検出した。東西2間、南北2間以上の総柱建物である。方位は北で約5°西へ振る。後述する**SD2b01**の埋土を除去した段階で北端の柱穴を検出した。掘形は円形で、直径は0.2~0.25m、柱痕跡の直径は0.10mである。芯々間の距離は1.9~2.9mとまちまちであり、また**SB2b01~03**と比較して柱筋の通りも悪い。

これらの掘立柱建物のうち、**SB2b01**の柱穴A(図40)からは瓦器碗の底部75が、**SB2b03**の柱穴B(図41)からは土師器皿76が出土している。また、建物として復元することはできなかったが、柱穴

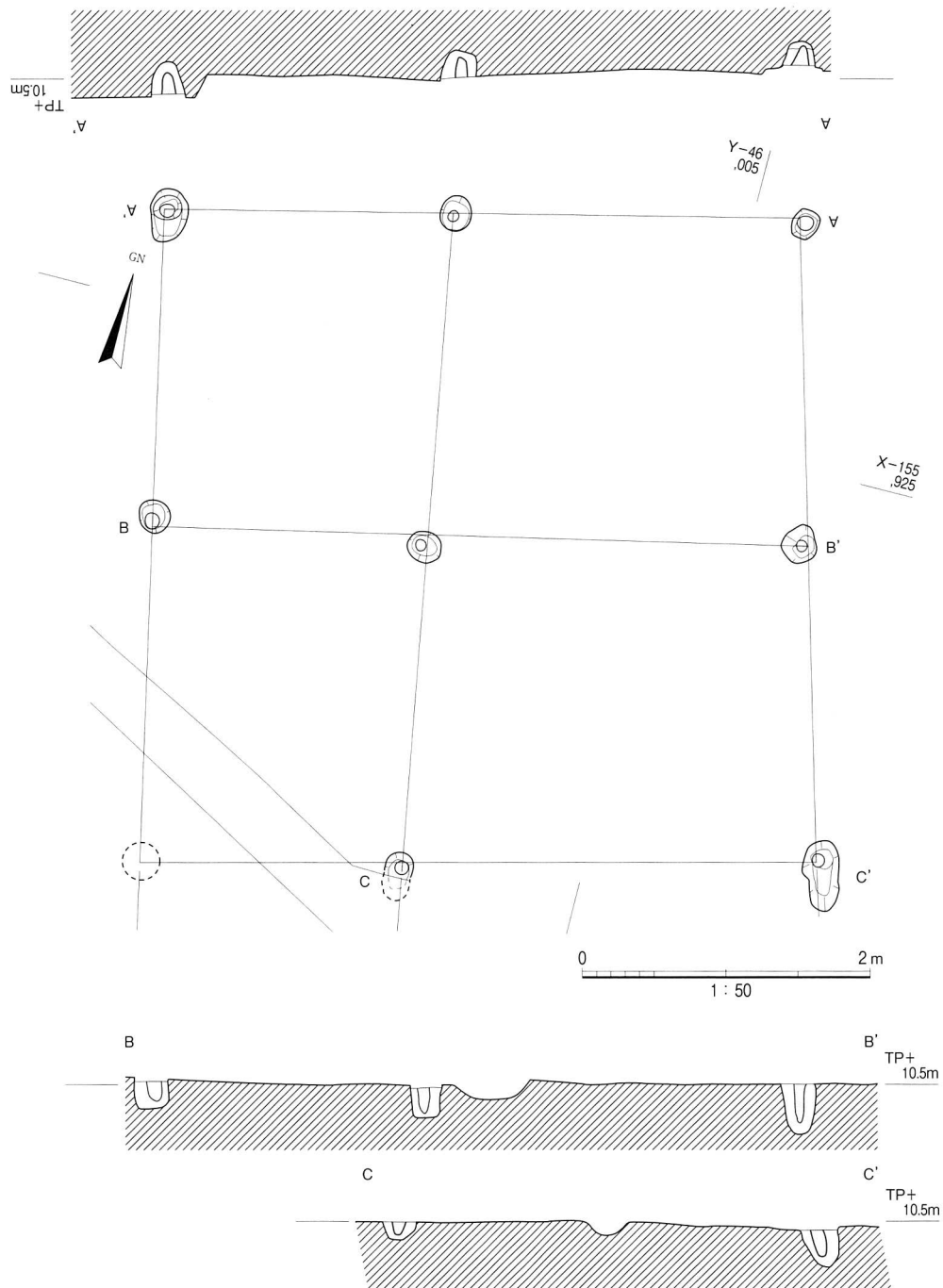


図42 SB2b04実測図

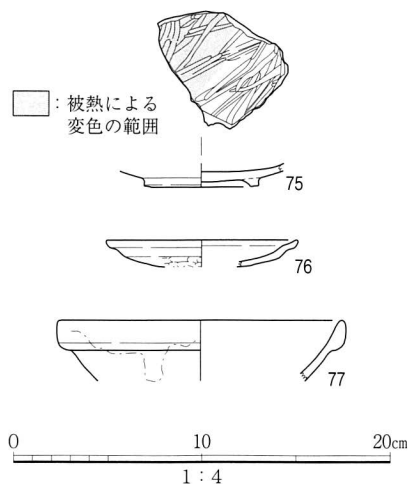


図43 SB2b01・03等出土遺物  
SB2b01(75)、2b03(76)、柱穴C(77)

### iii) 井戸

**SE2b01**(図版5、図44) 西調査区南西部において、第2層基底面で検出した。直径0.8m、検出面からの深さは3.0m以上を測る。埋土は井戸廃絶後の堆積層と考えられるシルト層(④層)・砂混りシルト層(③層)が堆積したのち、第3・4層に由来する偽礫を多く含む埋戻し土(①層)によって埋没している。上半部においては井戸枠の痕跡と考えられるシルト層(②層)が観察できた。ただ、この②層は層厚約5cmと厚く、木質の腐敗・収縮に伴う間隙にシルトが溜まった可能性もある。なお、裏込めは確認できなかった。本遺構は砂礫層からなる粗粒な段丘構成層を深く掘抜いており、井戸の深さは当時の地下水位の低さを反映したものと考えてよいだろう。また、③層から抽出した種子・昆虫を対象として自然科学分析を実施した。その結果は本章第5節にて詳述する。

遺物は③・④層から多く出土し、土師器・須恵器・瓦器・瓦・土製品・石製品がある。このうち、④層から出土した瓦器**78**、羽口**79**、砥石**80**を図化した(図版9、図44)。瓦器**78**は高くしっかりとした高台をもち、ヘラミガキの分割性は崩れているが密に施されている。今回の調査で出土した土師器・瓦器はそのほとんどの個体で表面が著しく痛んでいたが、当遺構から出土したものについては水浸きの状態で埋没していたためか、本来の光沢ある黒色を保っている。羽口の先端部**79**は内径2.0cm、外径8.0cm程度に復元でき、器壁の厚さは3.2cmである。先端はガラス質化している。胎土は粗く砂質であり、最大で粒径4.0mmの長石・石英・チャートを多く含む。胎土への植物繊維の混入は認められない。被熱による変色の痕跡から、炉への挿入角は約60°であったことが推測できる。**80**は泥岩製の砥石であり、割れ面以外の全面が使用されている。また、被熱し一部が黒く変色している。**78**は和泉型瓦器碗のⅡ-1期に位置づけられ、当遺構が12世紀前半には廃絶していたことを示す。

### iv) 土壇

**SK2b01**(図45) 西調査区北東部で検出した、不定形な土壇である。**SB2b03**と重複する位置にあるが、これとの切合い関係はなく、新旧関係はわからない。大きさは南北1.8m、東西2.4mであり、検出面からの深さは0.1m程度と浅い。埋土は下部にシルト～細粒砂層(②層)が堆積し、細粒～粗

**C**(図38)からは白磁碗の口縁部**77**が出土した(原色図版4、図43)。このうち**75**は二次的な被熱のためか、多くの部分で黒色が失われており、その一方で内面には部分的にススが付着している。**75**は12世紀、**76・77**は11～12世紀に属する遺物である。

これらの掘立柱建物のうち、**SB2b01～03**は柱筋の振れ幅が真北から西へ4°とほぼ揃っている。また、柱穴の規模・掘削深度なども類似しており、同一のプランのもとに建てられたことがうかがえる。しかしながら、**SB2b01・02**間の距離は1.4m、**SB2b01・03**間の距離1.7mと近接していることから、3棟の建物が併存したとは考えにくい。したがって、b期の遺構配置にも少なくとも2時期を想定することができる。

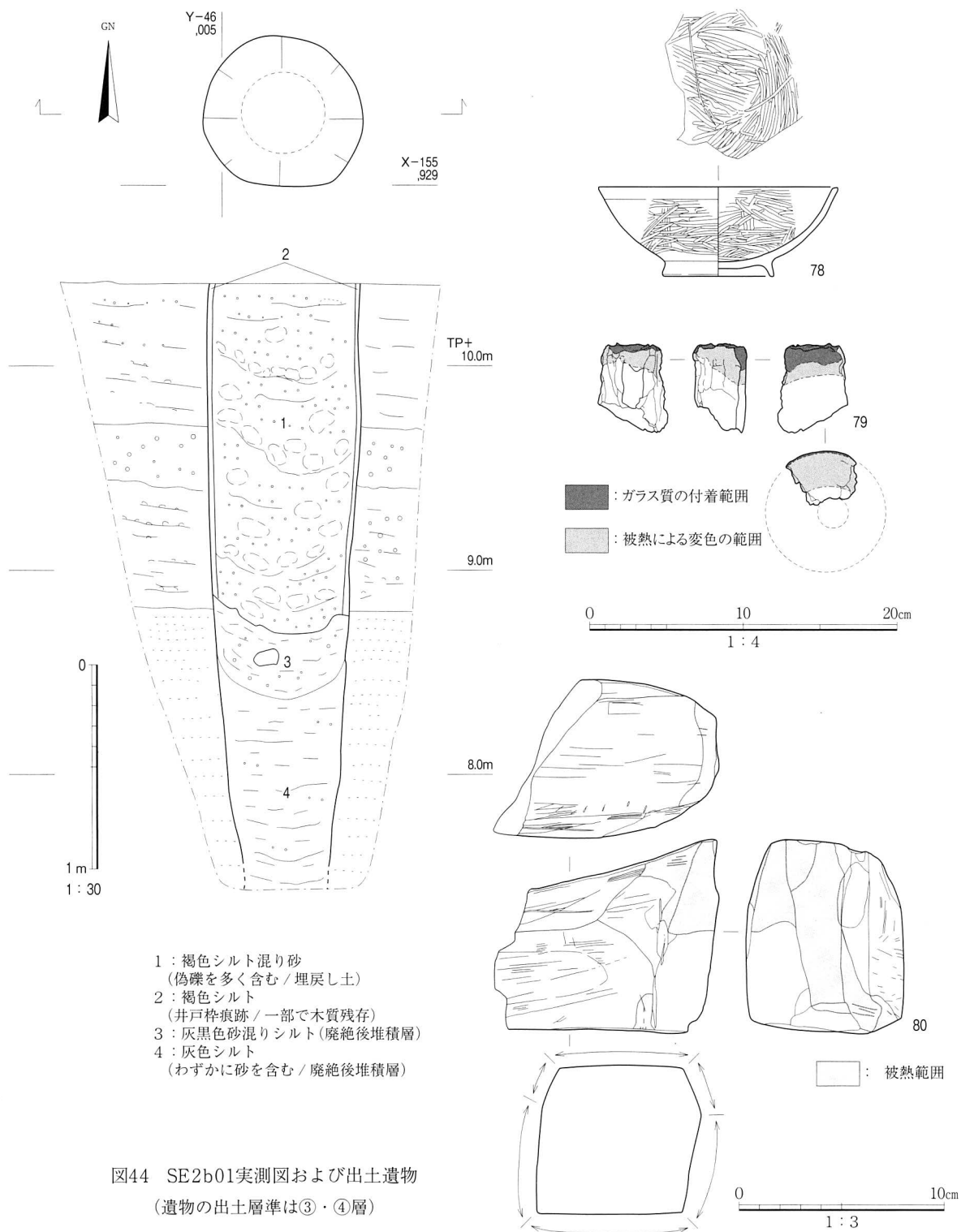


図44 SE2b01実測図および出土遺物  
(遺物の出土層準は③・④層)

粒砂層(①層)で埋没する。遺物は土師器・須恵器・瓦器があり、このうち②層から出土した瓦器碗3点を図化した(図版9、図45)。**81**は断面方形の低い高台を有し、ヘラミガキは内外面ともに密である。内面底部のヘラミガキは一定方向に施している。**82・83**の高台は断面三角形を呈する。**82**は器壁の劣化が著しく、ヘラミガキなどの調整を観察することができなかった。いずれも和泉型瓦器碗Ⅱ-1・2期(12世紀前半)に属する遺物である。

SK2b02(図45) 西調査区北東部で検出した長方形の土壌である。長辺0.6m以上、短辺0.5mを測り、底はおおむね平坦であった。遺構の南半は現代の攪乱によって破壊されている。埋土は第4層由来の偽礫を含む加工時形成層(③層)が最下部に認められ、シルト～細粒砂層(②層)で埋没する。また、偽礫を含んだシルト～細粒砂層(①層)が②・③層を切込んでおり、平面的には検出できなかったが、別の遺構と切合っていた可能性がある。埋土からは土師器・須恵器・瓦器の細片が出土した。

SK2b03(図45) 西調査区北東部で検出した不定形な土壌である。直径はおおよそ0.9mであった。検出面からの深さは0.2mであり、最下部には第4層由来の偽礫を含む加工時形成層(③層)が堆積し、その上位は粘土質シルト層(②層)、シルト～細粒砂層(①層)によって埋没する。須恵器・瓦器・瓦の細片が出土した。

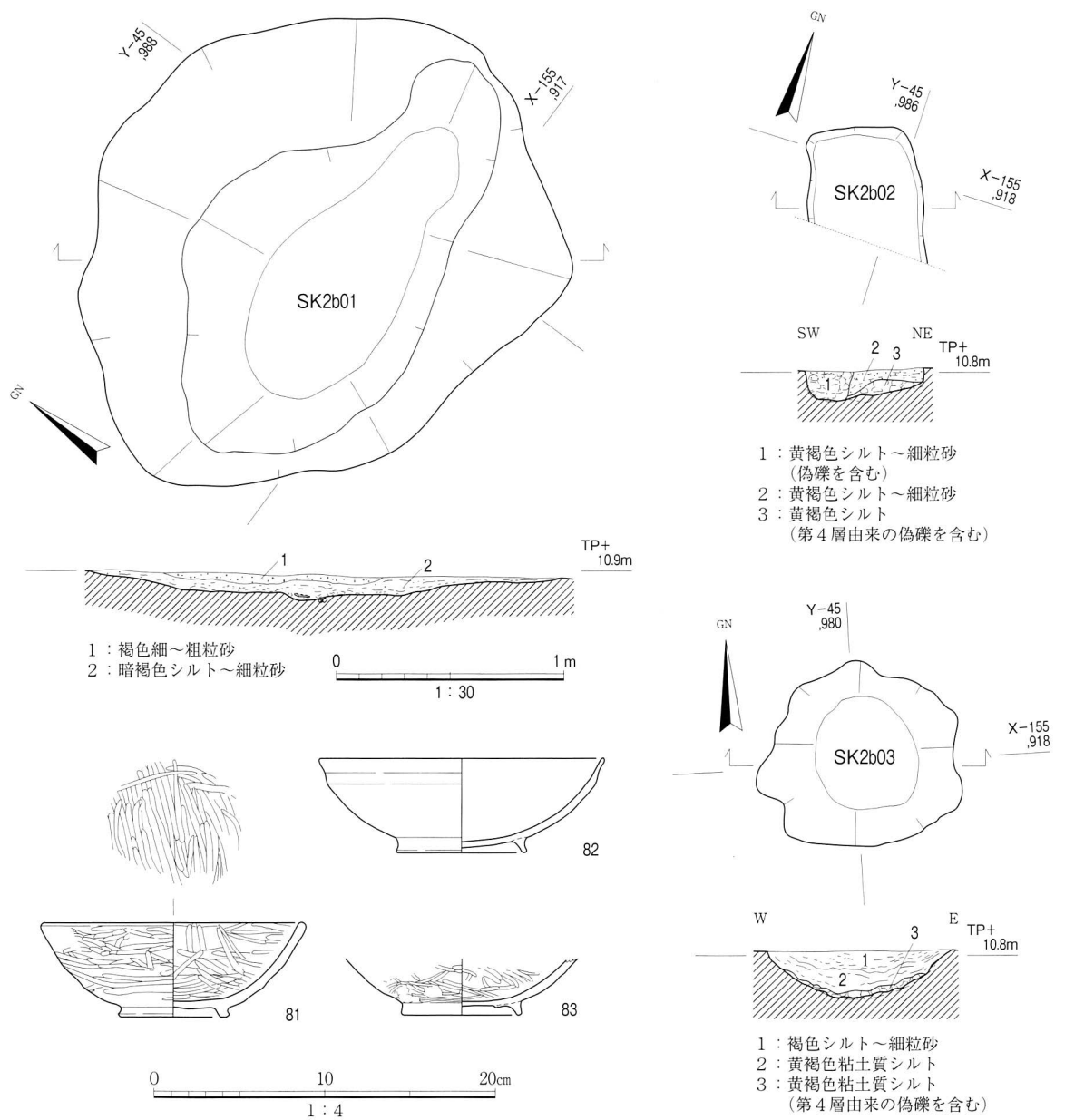


図45 SK2b01～03実測図および出土遺物

## v) 溝

**SD2b01**(図版4、図37・46) 西調査区南西部において、第2層基底面で検出した。おおよそ正方位に乗る溝で、調査区内ではほぼ直角に曲がる。東西に延びる部分は長さ13.0m以上、幅1.5mであり、西側は調査区外へと続いている。溝の北肩は室町時代の溝**SD2a02**によって削平されているため、溝の最深部と南肩との距離から推測して、本来は2.1m以上の幅があったと考えられる。南北に延びる部分は長さ7.2m以上、幅は1.8~2.8mであり、南側は調査区外へと延びる。検出面からの深さは0.30~0.45mほどである。底の標高は遺構の東北コーナー部分が高くてTP+10.45m、ここから西側・南側へは徐々に低くなり、検出範囲の南端・西端のレベルはともにTP+10.30mであった。

埋土は下底付近に砂・礫混りのシルト層(⑥層)がある。明確に分層することはできなかったが、下底付近ではやや粘土分が多い。また、遺物

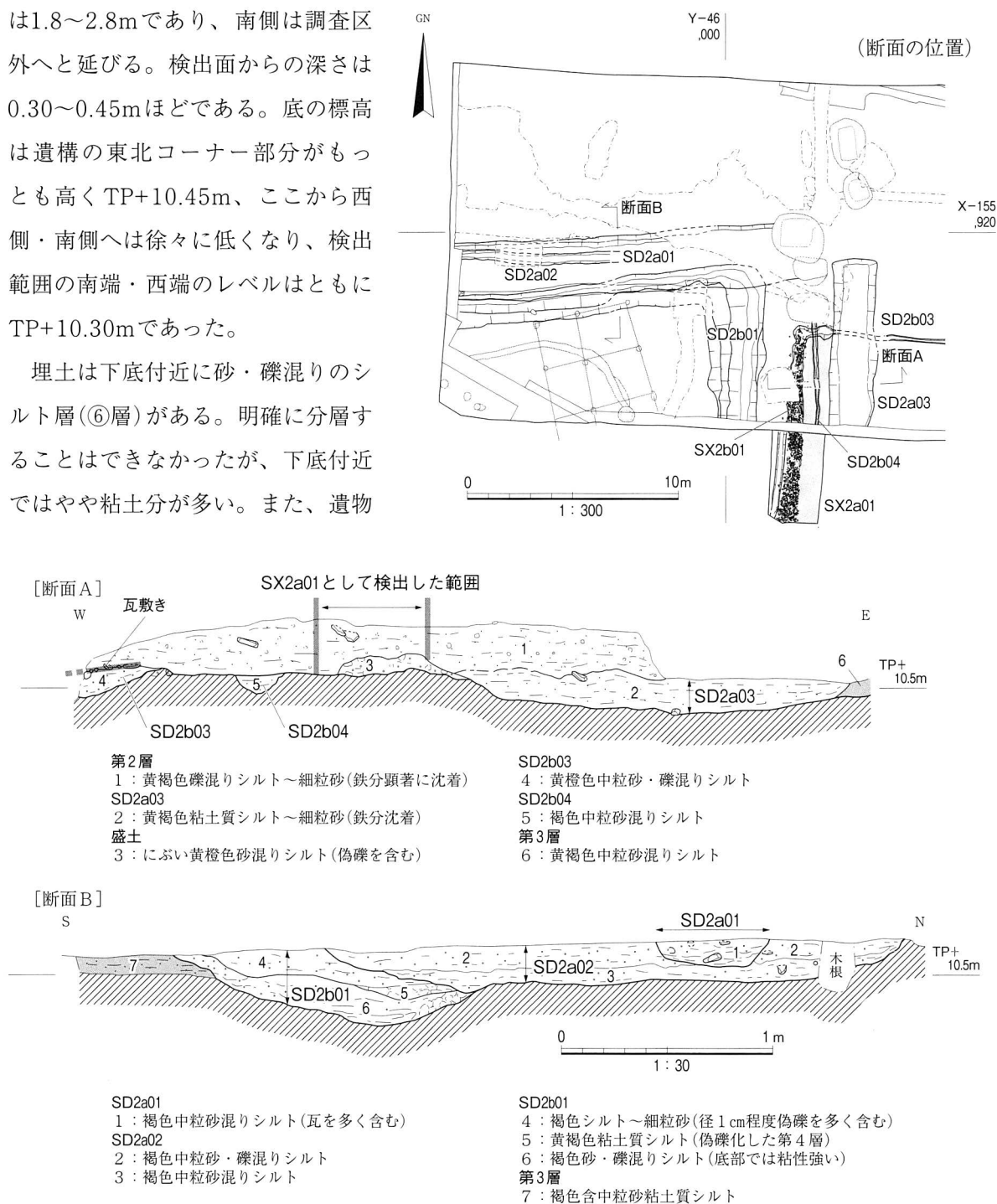


図46 SD2b01・03・2a01～03断面図

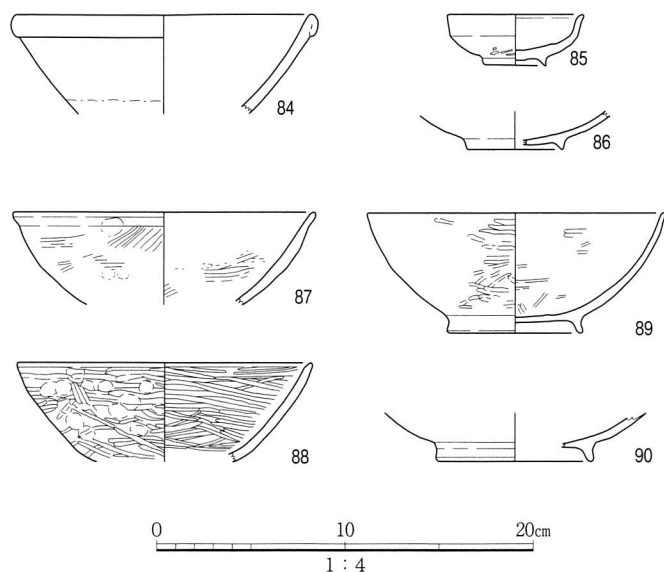


図47 SD2b01～03出土遺物  
SD2b01(84～86)、2b02(87～89)、2b03(90)

の多くはこの⑥層から出土した。その上位には、偽礫を多く含む埋戻し土(④・⑤層)が堆積する。この④・⑤層については、後述するSD2a02掘削前の整地に伴う可能性がある。

遺構の性格としては、その形状から区画溝などの可能性が考えられる。しかしながら、先述したように総柱建物SB2b04の柱穴は当遺構形成時に切られており、併存関係にはない。これを除けば、圍繞されたと予想される空間にそれが必要とする遺構を見い出すことができない。

当遺構からは、土師器・須恵器・瓦器・瓦・輸入陶磁器・スラグが出土し、このうち⑥層から出土した遺物を図示した(原色図版4、図版9、図47)。**84**は白磁碗で、口縁部は玉縁状を呈する。完形の瓦器皿**85**は表面全体が著しく摩耗している。**86**は瓦器碗の底部であるが、表面が摩耗し、高台の断面形態は貧弱な三角形を呈している。出土点数は多くないが、これらの遺物は12世紀代のものとみてよからう。

**SD2b02**(図38) 西調査区南西部で検出した。弧を描き西端は調査区外へと延びる。南端は**SE2b01**によって破壊されていた。長さ8.8m以上、幅0.3m、検出面からの深さは0.2mであった。埋土は中粒砂混りのシルト層である。

当遺構からは土師器・須恵器・瓦器・金属加工関連遺物(羽口・スラグ)が出土し、このうち瓦器碗**87～89**を図示した(図版9、図47)。**87・89**は器面の摩耗が著しく、調整などはほとんど観察できなかった。**88**には内外面とも密なヘラミガキが施されているが、外面は一部に指頭圧痕を残す。いずれも和泉型瓦器碗Ⅱ－1期(12世紀前半)に位置づけられる遺物である。

**SD2b03**(図37・46) 西調査区南半において、瓦敷き**SX2b01**を除去した段階で検出した。ほぼ正方位に乗っており、9mほど延び、東へ曲がる。攪乱などにより確実に連続性を確認することができなかったが、位置関係・埋土・規模から考えて、西調査区東端まで連続するものと考えてよからう。このように考えると、当遺構の規模は南北9.3m以上、東西21.0m以上となる。ただし、検出面からの深さは0.10～0.15m程度と浅い。埋土はいずれの部分でもほぼ同様で、中粒砂・礫混りのシルト(図46、断面A－④層)からなる。

遺物は土師器・須恵器・瓦器が出土しており、このうち瓦器碗の底部**90**を図示した(図47)。12世紀の資料であることから、当遺構を覆う瓦敷き**SX2b01**についてもこの時期をさかのぼりえない。

**SD2b04**(図37・46) 西調査区中央部南半において、第2層基底面で検出した。南北に延びる細い溝で、北端は室町時代の土壌**SK2a04**によって破壊されている。長さ4.8m以上、幅2.1m、検出

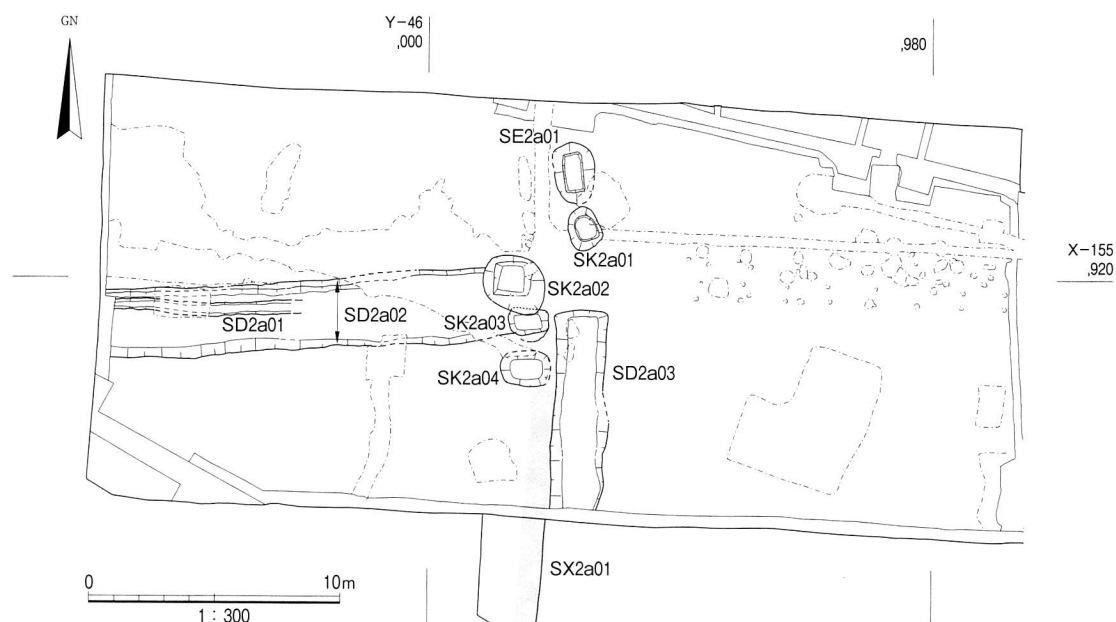


図48 室町時代の遺構分布

面からの深さは0.10～0.15mである。埋土は中粒砂混りのシルト層(図46、断面A-⑤層)である。

**SD2b05**(図38) **SD2b03**の北側で検出した。長さ12.0m以上、幅は0.2～0.3mである。検出面からの深さは0.1m未満である。

**SD2b06**(図38) 東調査区の南西端で検出した浅い窪みである。長さ3.1m、幅1.2m、検出面からの深さは0.1m未満である。須恵器・瓦器・瓦が出土した。

**SD2b07**(図38) 東調査区の南西端、**SD2b06**の南で検出した。東西3.6m以上、南北1.5m以上ある。幅は0.3～0.6m、検出面からの深さは0.1mである。

### 3) 室町時代の遺構と遺物

#### i) 井戸

**SE2a01**(図版6、図48・49) 西調査区の中央部北端において、第2層基底面で検出した。遺構の上端は南北2.4m、東西1.6mの楕円形を呈し、遺構下半は南北1.5m、東西0.8mの長方形を呈する。検出面からの深さは1.1mである。遺構周囲の第4層はシルト～細粒砂から下方へと徐々に粗粒化しており、遺構最深部では砂・礫で構成されていた。埋土は最下部にシルトの薄層(⑧層)

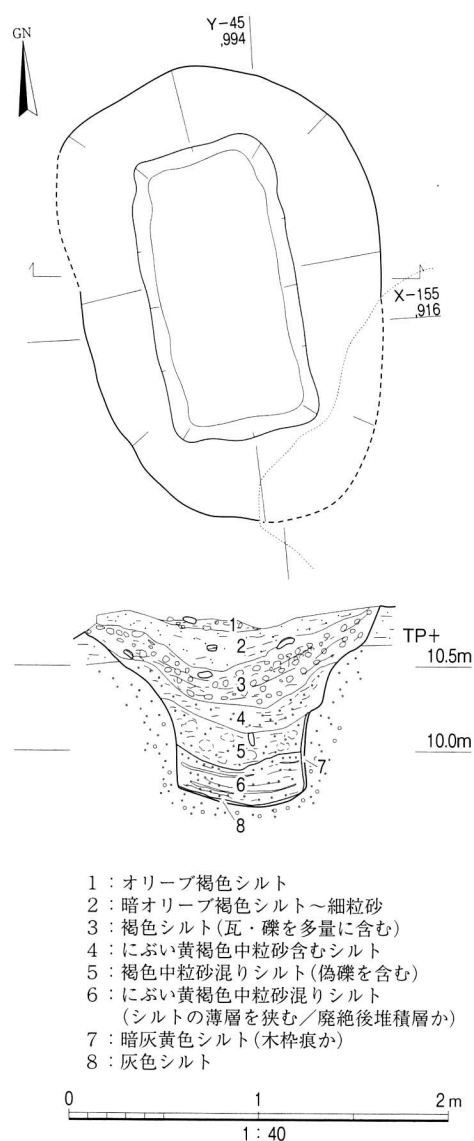


図49 SE2a01実測図

- 1: オリーブ褐色シルト
- 2: 暗オリーブ褐色シルト～細粒砂
- 3: 褐色シルト(瓦・礫を多量に含む)
- 4: にぶい黄褐色中粒砂含むシルト
- 5: 褐色中粒砂混りシルト(偽礫を含む)
- 6: にぶい黄褐色中粒砂混りシルト  
(シルトの薄層を挟む/廃絶後堆積層か)
- 7: 暗灰黄色シルト(木杵痕か)
- 8: 灰色シルト

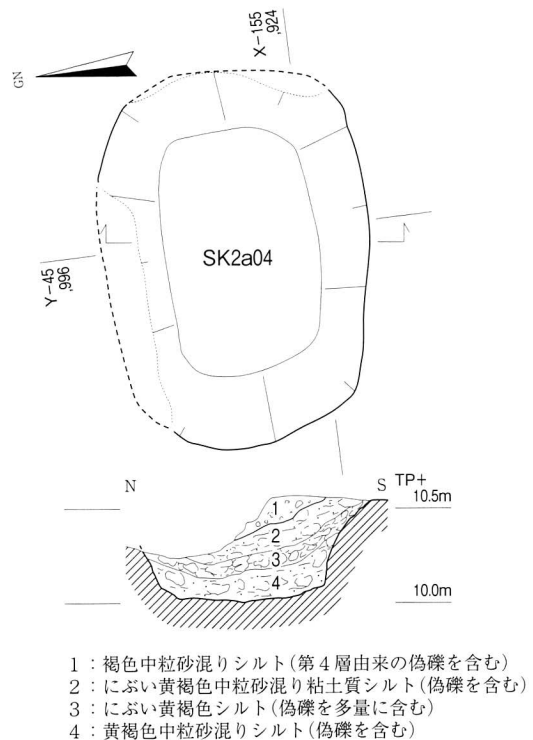
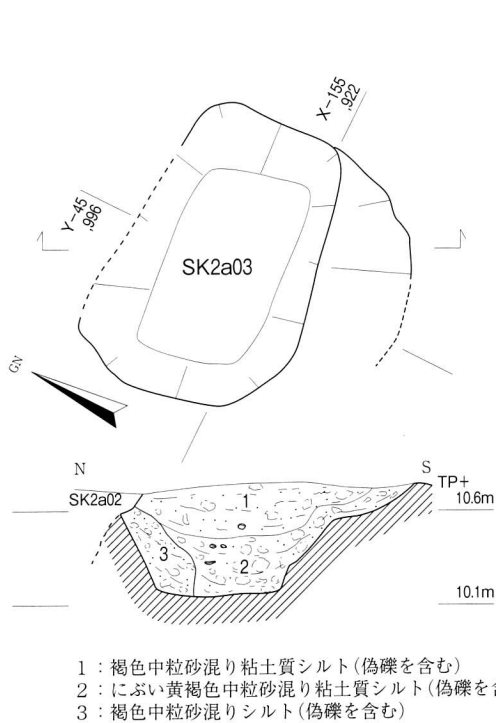
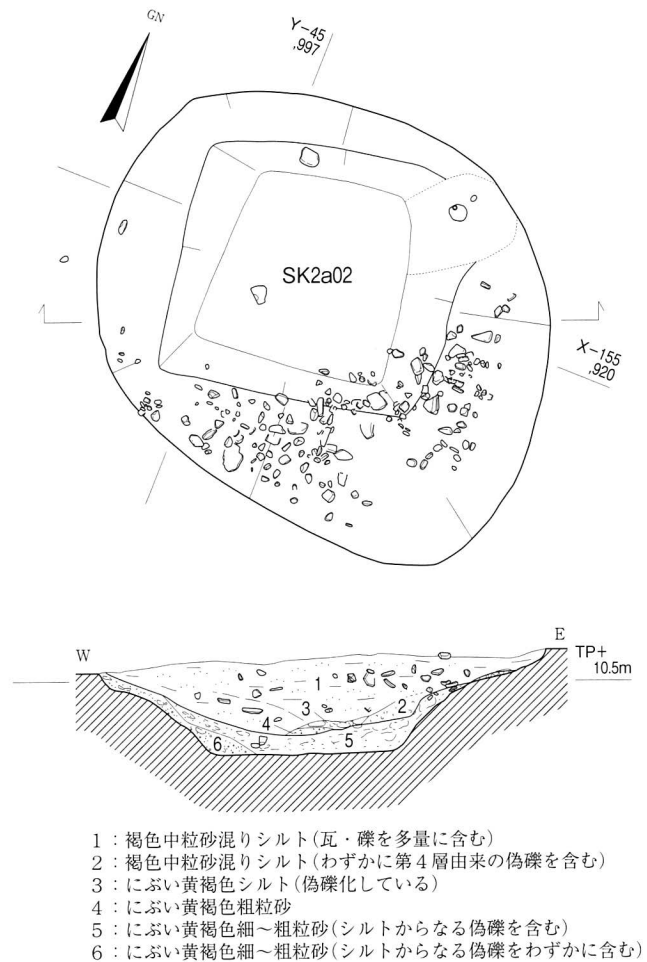
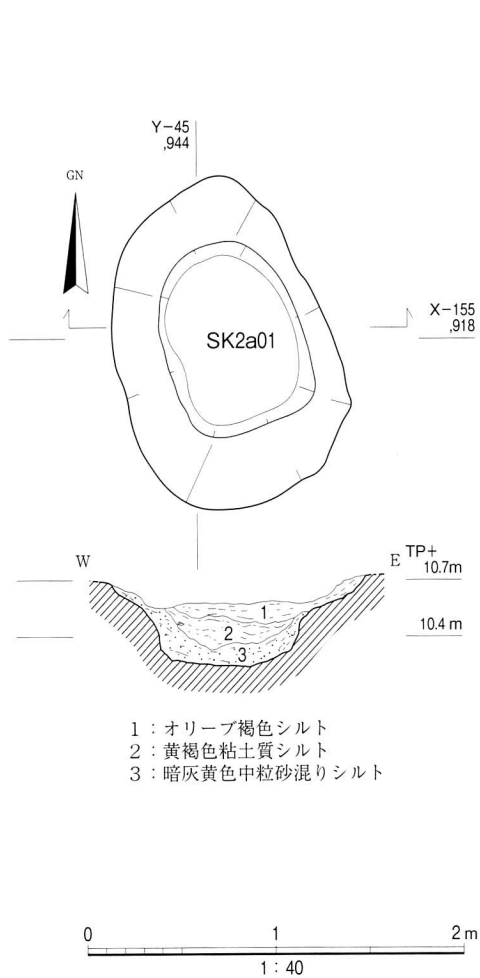


図50 SK2a01～04実測図

が堆積し、その上をシルトの薄層を挟む中粒砂混りのシルト層(⑥層)が覆う。水が浸く状態で放置され、壁面の崩落を繰返したものであると思われる。その後は偽礫を含む埋土(①～⑤層)によって埋戻されるが、このうち③層には古代の瓦や礫、古墳～飛鳥時代の須恵器などが多く含まれている(図版6)。遺構下半部では、東側面のみであるが木柵の痕跡と思われるシルト層(⑦層)が認められ、これらの特徴から井戸であると判断した。

当遺構からは土師器・瓦質土器・輸入陶磁器・瓦・鋳造関連遺物が出土し、このうち⑥層から出土した中国製白磁皿91～93、炉壁片97を図示した(原色図版4、図版9、図51)。91は端反りの皿である。92・93は高台接地面のみを釉剥ぎする。いずれも15～16世紀に位置づけられる遺物である。97は炉壁片である。内面および上面の一部はガラス質化する。炉の最上部に近い破片であろう。

## ii) 土壌

**SK2a01**(図48・50) 西調査区の中央部北半で検出した。不整形な楕円形を呈する土壌で、長軸1.7m、短軸1.2mを測る。遺構の下半は傾斜が急になり、二段に落ち込む。検出面からの深さは0.5mであった。埋土は最下部に中粒砂混りのシルト層(③層)があり、粘土質シルト層(②層)およびシルト層(①層)によって埋没する。出土遺物は土師器・須恵器など古代に属するもののみであったが、埋土の層相から該期の遺構と判断した。

**SK2a02**(図版6、図48・50) 西調査区の中央部で検出した。いびつな円形を呈する土壌であり、上端の最長部は2.7m、最短部は2.1mであった。遺構下半は二段に落ち込み、一辺1.4mの方形を呈する。検出面からの深さは0.5mであった。埋土はいずれも偽礫を含むが、第4層に由来する偽礫を含む②～④層を境として上下に大別できる。このうち上半(①層)には古代の瓦および礫が多量に含まれていた。遺構の時期を示す遺物として、備前焼の播鉢95・96が出土した。このうち95は16世紀に属するものである。

**SK2a03**(図48・50) 西調査区の中央部で検出した。遺構の北辺はSK2a02によって切られている。上部は現代の攪乱によって著しく破壊されていたが、残存部分から推測して円形に近い形状であった可能性が高い。下半部は東西に長い長形状を呈し、長辺1.6m、短辺0.9mを測る。検出面からの深さは0.6mであった。埋土はいずれも偽礫を含んでおり、中粒砂混りシルト層(③層)および中粒砂混りの粘土質シルト層(①・②層)からなる。

遺物はおもに②層から出土し、古代の土師器・須恵器のほか、瓦質土器・輸入陶磁器がある(原

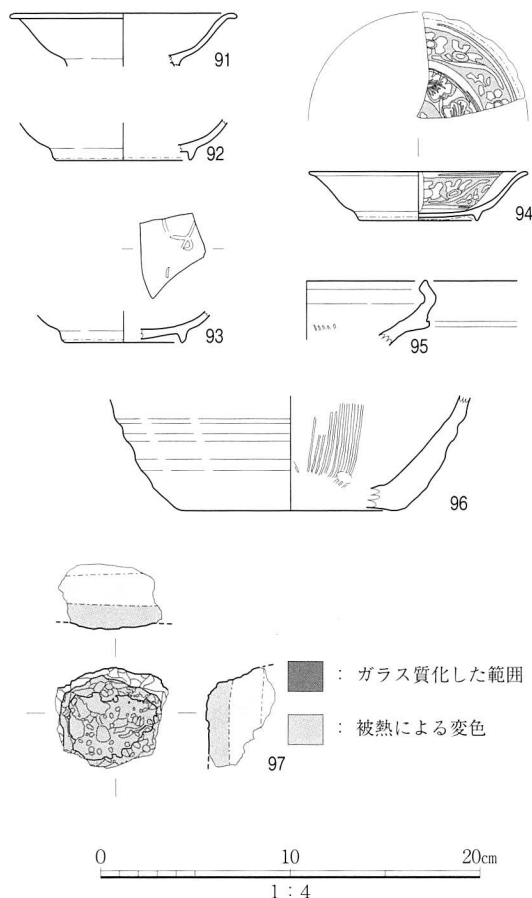


図51 SE2a01・SK2a02・03出土遺物  
SE2a01(91～93・97)、SK2a02(95・96)、SK2a03(94)

色図版4、図51)。94は明代の赤絵である。口径11.6cm、底径6.2cm、器高2.6cmを測り、口縁部はわずかにつまみ輪花とする。器壁は3mm以下と薄い。外面には褐釉を施し、内面は白釉地に上絵を施す。側面には退化した牡丹唐草文と思われる意匠を、底面は残存状況が悪く不明瞭であるが、葉と思われる意匠を、それぞれ赤色で表現している。また、側面では花文の花芯部に、底面では文様の単位の間隙に、白濁色を呈する顔料で色を加えている。このうち赤色の部分はきわめて脆弱な状態で、出土時に付着していた土に転写されるほどであった。胎土はやや灰色がかっており、夾雑物をわずかに含む。これらの特徴から、当資料は明代中期に景德鎮民窯で生産された可能性が高い(註1)。

当資料の上絵付けの技法についての情報を得るため、底面の一部について蛍光X線による成分分析を実施した。図54は、特徴的に検出した元素について、その分布の多寡をマッピングしたものである。この結果から、赤色を呈する部分では鉄(Fe・③)、白濁色を呈する部分では銅(Cu・④)および鉛(Pb・⑤)を多く含むことが読み取れる。カルシウム(Ca・⑥)・カリウム(K・⑦)は地の白色釉に含まれる成分であろう。つまり、赤色の部分では呈色剤として鉄、白濁色の部分では呈色剤として銅、溶媒として鉛が使用されたことが推測できる。このため、白濁色を呈する釉薬は本来は緑色に発色していた(あるいは発色を意図した)可能性が高い。ただ問題となるのは、赤色の部分から鉛が検出されなかったことである。時代はやや降るが、清代の史料と化学的分析結果に基づく釉上彩についての考察を見ると、赤絵は呈色剤としての「酸化鉄」に「鉛粉および牛脂」を加えるという[張福康1985：p.345]。鉛を基礎釉とするいわゆる鉛釉については一般的に融点が低く、二次的な被熱などによって蒸散しやすい性質が知られている。しかし、当資料については、赤色の部分のみ成分が失われたとは考えにくい。前掲の文献においても、19世紀の赤絵を対象として実施した化学分析では鉛が検出されていないようであり[張1985、表16-9]、明～清代を通じて、鉛を含まない赤絵という技法が存在した可能性がある。今後の分析例の増加を待つ必要があるだろう。

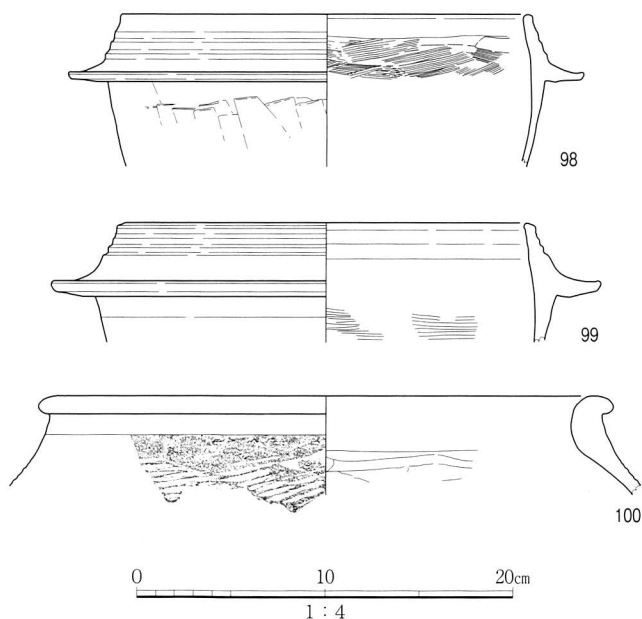


図52 SD2a03出土遺物

**SK2a04(図48・50)** 西調査区の中央部南半で検出した、長方形を呈する土壌である。長辺2.0m、短辺1.4m、検出面からの深さは0.5mであった。埋土はいずれも偽礫を含み、第4層に由来する偽礫を含む①層と、それ以外の層(②～④層)に大別できる。古代の土師器・須恵器のほか、遺構の時期を示す遺物として備前焼擂鉢の破片が出土した。

### iii) 溝

**SD2a01(図46・48)** 西調査区の西部で検出した。**SD2a02**埋没後に掘削された溝である。長さ7.5m以上、幅は0.5m、検出

面からの深さは0.1～0.2mである。埋土は中粒砂混りのシルト層(図46、断面B-①層)からなり、古代の瓦を多く含んでいた。

**SD2a02**(図46・48) 西調査区の西部において、第2層基底面で検出した。東西方向に延びる溝状の遺構である。平安時代後期の溝**SD2b01**を埋めた後に掘削されている。東端は現代の攪乱および**SK2a02・03**によって破壊されており、遺構の形状は明確でない。残存する部分は長さ15.0m以上、幅2.7mを測る。検出面からの深さは0.2mほどであった。底面の標高はTP+10.45～10.48mとほとんど高低差がない。

埋土は上下に二分でき、下部は中粒砂混りのシルト層(図46、断面B-③層)、上部は中粒砂・礫混りのシルト層(同②層)である。③層は②層と比べ粘性が強い。古代に属する土師器・須恵器・瓦のほか、瓦質土器・輸入陶磁器などが出土した。

**SD2a03**(図46・48) 西調査区の中央部南半で検出した、南北方向の溝状遺構である。第2層基底面で検出した。北端は第1層によって削平されており、状況が明確でない。残存部分の長さは8.4mで、南側は調査区外へと続く。幅は1.8m前後、検出面からの深さは0.2mであった。埋土は粘土質シルト～細粒砂層(図46、断面A-②層)であり、遺構の時期を示す遺物として瓦質土器が出土した(図版9、図52)。

瓦質土器の羽釜**98・99**はいずれも口縁部が内傾し、外面には3条の凹線が巡る。口縁端部の形態を見ると、**98**は丸く、**99**は外傾する面をもつ。外面体部のヘラケズリは**98**が縦方向、**99**が横方向である。また、**99**は鏝よりも下部にススが顕著に付着する。同じく瓦質土器の甕**100**は外面に粗い平行タタキを施している。いずれも15世紀代の遺物である[佐藤隆1996]。

#### iv) 瓦溜まり

**SX2a01**(図版6、図46・48・53) 西調査区の中央部南半、平安時代後期の瓦敷き**SX2b01**と室町時代の溝状遺構**SD2a03**の間で検出した。**SD2a03**の西側には、その掘削時に形成された可能性がある盛土(図46、断面A-③層)が南北に延び、土手状になっている。**SX2a01**はこの土手状の盛土を覆う第2層に包含される状態で検出した瓦溜まりであ



図53 SX2a01実測図

り、南北方向に9 m以上延びている。この瓦溜まりに伴う掘込み面などは見い出すことができなかったため、当遺構の瓦は第2層中に埋没する形で存在したものである。(1)西側に瓦敷き **SB2b01** が存在することから、これを破壊する際に偶然この位置に瓦が集積された、(2)排水などの目的のため、積極的な意図をもって第2層に瓦・礫を埋込んだ、などいくつかの可能性が想定できるが、いずれも確定はできない。

#### 4) 小結

以上のように、今回の調査では第1・2層基底面において2時期の遺構群を検出した。

このうちb期とした遺構群については、出土遺物の年代観から12世紀前半を中心とする。

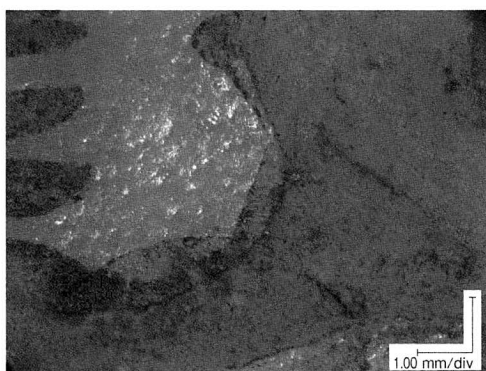
その中で、瓦敷きが特筆できるだろう。その性格を特定するに至らなかったが、ここから出土した瓦によって、従来この地に想定されていた榎津廃寺について新たな知見を得ることができた。これら瓦の成果については次節にて詳述する。また、東西に庇を有する掘立柱建物 **SB2b01**、およびこの周辺に建てられた **SB2b02～04**、区画溝と思われる **SD2b01** など、該期の集落構造の一端を捉えることができたのは重要な成果である。なお、既往の調査成果に照らせば、該期の遺構・遺物は西調査区を東南隅として東西400m、南北450mの範囲に分布しており、集落の範囲を一定程度想定することができる。

一方、a期とした遺構群については15～16世紀に収まる。ただ中国製磁器については、端反りの白磁を中心として、16世紀に特徴的な資料が多い。この時期には、b期と比べ遺構の密度が減っている。削平が著しく明確にできなかったが、**SD2a02・03**は**SD2b01**を踏襲した区画溝である可能性があろう。また、西調査区中央部に該期の井戸・土壇が集中する点は興味深い。この南北に延びるベルト状の区画を挟んで、b期の掘立柱建物もわずかではあるが方位を異にしており、敷地境として機能していた可能性を指摘できる。

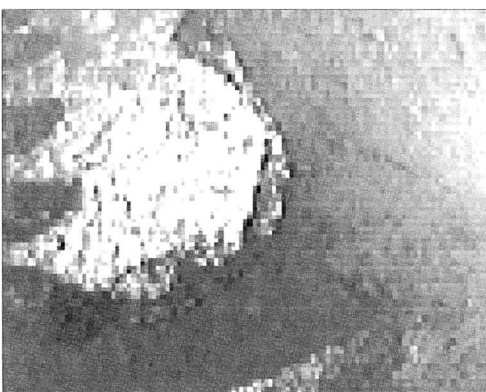
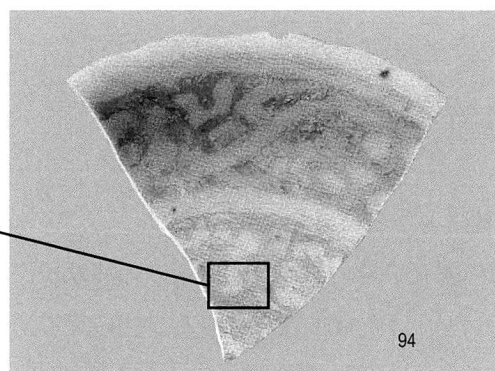
また、住吉区の中世遺跡を評価する上で欠くことのできない鑄造関連遺物についても新しい知見が得られた。b期の遺構からは羽口・スラグ、a期の遺構からは羽口・炉壁・スラグのほか、鑄型と思われる破片が見つかった。山之内遺跡一帯における中世の鑄造関連遺物の分布については、[村元健一2004 a]において集成が行われているが、今回の調査地はここで西限とされた調査地よりも250mほど西に位置する。今回の調査地から出土した鑄造関連遺物と、山之内元町を中心として出土するそれとを1つのまとまりとして把握できるかについては検討を要するが、住吉地域における鑄物師の活動を考察する上で貴重な資料を得たといえるだろう。

#### 註)

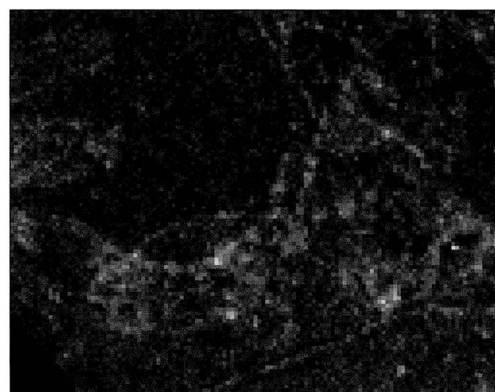
(1) 当資料については、大阪市立東洋陶磁博物館出川哲朗氏・小林仁氏・片山まび氏にご教示を賜った。



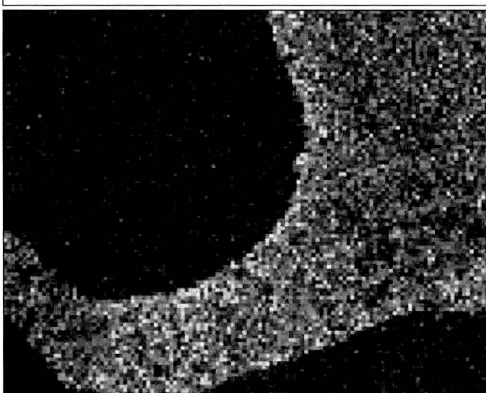
① 測定部位のカラーイメージ



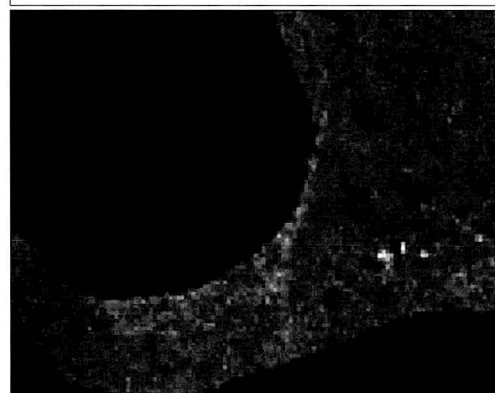
② 測定部位のモノクロイメージ



③ FeK 0 46 93 139 186



④ CuK 0 7 15 23 31



⑤ PbL 0 56 113 170 227



⑥ CaK 0 11 23 35 47



⑦ K\_Ka 0 10 20 30 41

図54 SK2a03出土赤絵94の釉薬組成

## 第4節 瓦塼類

### 1) 概要

今回の調査では、およそ320kgの瓦塼類が出土した。その大多数(約317kg)は布目圧痕を有する古代の瓦である(表2)。その内訳を見ると、中世の遺構から出土したものが61.1%と最も多く、室町時代の第2層(34.1%)がこれに続く。中世の遺構が多くの割合を占めることについては、平安時代後期の瓦敷き **SX2b01**、および室町時代の井戸 **SE2a01**、同じく室町時代の土塋 **SK2a02**に多くの瓦が含まれていたことによる。古墳時代後期～飛鳥時代前半を主体とする遺物包含層である第3層には、わずかな量の瓦が含まれていた。ただし、第3層中、あるいは第4層上面で検出した古墳時代後期～飛鳥時代前半の遺構からは、瓦塼類は出土していない。

表2 瓦の出土量

| 出土区分 | 重量(kg) | 割合     |
|------|--------|--------|
| 中世遺構 | 193.78 | 61.1%  |
| 第2層  | 108.33 | 34.1%  |
| 第3層  | 8.05   | 2.5%   |
| 攪乱など | 7.27   | 2.3%   |
| 総計   | 317.43 | 100.0% |

後述するように、これらの瓦はおおよそ7世紀後半～11世紀に位置づけられるものであり、いずれも異地性の遊離資料である。しかし、いくつかの属性を組み合わせることによって、これらの瓦を一定の分類群に帰属させることができた。そこで、以下ではこれら古代の瓦について、出土層準よりも遺物の型式学的な分類を優先して記述を進めることとする。

出土した瓦塼類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅平瓦・塼がある。このうち塼1点を除き、ほかのすべては瓦である。軒丸瓦および軒平瓦ではそれぞれ大別3種、細別4種、丸瓦・平瓦では共通した属性をもとに大別3種、細別7種の型式を設定した。なお、本報告では布目圧痕を適宜布目と略す。

### 2) 出土した瓦塼類の内容

以下では、出土した瓦塼類について種類ごとに記述する。なお、軒丸瓦・軒平瓦の報告番号と型式、出土位置などの対応については表3に、その他の瓦塼類の報告番号・分類・出土位置との対応については表4に示した。

#### i) 軒丸瓦(図版11・12・14、図55～57)

軒丸瓦と認識できる個体は、今回の調査では合計13個出土した(図55)。これらについての理解を補強するため、今回の調査地付近で出土・採集された既知の資料についても、併せて報告を行う(図56)。軒丸瓦は、文様によって3種に大別し(**NMI**～**Ⅲ**類)、このうちI類は范および製作技法によってA・B類に細分した(註1)。

**NMI型式(101～107・114～117)** 単弁八弁蓮華文軒丸瓦で、逆三角形の間弁を有し、各弁の中には子葉を配する。直立縁で、外縁には文様を施さない。瓦当の直径は復元できるもので21.0cm前後、内区の直径は同じく15.0cm前後、中房の直径は5.2cm前後である。

弁の最大幅は中央部付近にあり、弁端は界線によって切られている。弁は広く平らで、間弁より

もわずかに高い。弁の断面を見ると、やや反りつつ弁端へ向って高くなっている。間弁の先端は弁の中央付近まで延びている。子葉はやはり低く、弁の中程まで延びる。中房の全形を把握できる資料はないが、114から1+6の蓮子を置くものと推測できる。また、周縁の状態が確認できるものでは、すべての個体で外縁の内側角に面取りを施している。胎土はおしなべて緻密・精良で、直径1mm以下の長石・石英・赤色粒を含んでいる。

丸瓦との接合方法および焼成から、NMIA型式(101～105・114・116・117)とNMIB型式(106・107・115)に細分できる。

NMIA型式は、いずれもきわめて堅緻に焼成され、表面は灰色、断面は赤褐色を呈する。瓦当部上面の調整技法には個体差があり、丸瓦の長辺と平行する方向にヘラケズリを行うもの(103・104・114)と、これとは直交して軒丸瓦の円周方向にナデを行うもの(101・102・105)とがある。

103では間弁の大きさが他の個体よりも若干小さい。105は焼成前に穿孔が行われているが、性格は不明である。上面に焼成前に施された穿孔の痕跡がある。114ではいびつな構成をとる1+6の蓮子のほかに、ごく低い痕跡上の蓮子を認める。この114および117では表面にわずかながら木目が認められることから(写真5)、範の摩擦に伴って蓮子の彫直しが行われた可能性が高い。116は丸瓦の剥離部に転写された布目が観察できる。117では、丸瓦裏面の下半部に、外径に沿って突帯が付加されている。なお、当型式の軒丸瓦は丸瓦との接合部に特色ある技法を用いており、これ

表3 軒平瓦・軒丸瓦一覧

| 番号  | 種類    | 型式     | 文様       | 出土位置など        |
|-----|-------|--------|----------|---------------|
| 101 | 軒丸瓦   | NMIA   | 単弁八弁蓮華文  | SX2b01        |
| 102 | 軒丸瓦   | NMIA   | 単弁八弁蓮華文  | 第2層           |
| 103 | 軒丸瓦   | NMIA?  | 単弁蓮華文    | SK2a02        |
| 104 | 軒丸瓦   | NMIA   | 単弁八弁蓮華文  | SK2a02        |
| 105 | 軒丸瓦か  | NMIA?  | —        | SD2a02        |
| 106 | 軒丸瓦   | NMIB   | 単弁蓮華文    | 第2層           |
| 107 | 軒丸瓦   | NMIB   | 単弁八弁蓮華文  | 第2層           |
| 108 | 軒丸瓦   | NMII   | 重弁八弁蓮華文  | SK2a02        |
| 109 | 軒丸瓦   | NMII?  | —        | 第2層           |
| 110 | 軒丸瓦   | NMIII  | 単弁九弁蓮華文  | SX2b01        |
| 111 | 軒丸瓦   | NMIII  | 単弁九弁蓮華文  | SX2a01        |
| 112 | 軒丸瓦   | NMIII? | 単弁九弁蓮華文か | 第2層           |
| 113 | 軒丸瓦   | NMIII? | 単弁九弁蓮華文か | SX2a01        |
| 114 | 軒丸瓦   | NMIA   | 単弁八弁蓮華文  | [大阪市立博物館1987] |
| 115 | 軒丸瓦   | NMIB   | 単弁八弁蓮華文  | [前田洋子1983]    |
| 116 | 軒丸瓦   | NMIA   | 単弁八弁蓮華文  | (YM88-37次)    |
| 117 | 軒丸瓦   | NMIA   | 単弁八弁蓮華文  | (YM83-41次)    |
| 118 | 軒丸瓦   | NMIII? | 単弁九弁蓮華文か | (YM95-8次)     |
| 119 | 瓦当接合部 | (NMIA) | —        | SK2a01        |
| 120 | 瓦当接合部 | (NMIA) | —        | SD2b04        |
| 121 | 瓦当接合部 | (NMIA) | —        | SX2b01        |
| 122 | 瓦当接合部 | (NMIA) | —        | 第2層           |
| 123 | 瓦当接合部 | (NMIB) | —        | SK2a02        |
| 124 | 瓦当接合部 | (NMIB) | —        | 第2層           |
| 125 | 軒平瓦   | NHIA   | 三重弧文     | SE2b01        |
| 126 | 軒平瓦   | NHIA   | 三重弧文     | SX2b01        |
| 127 | 軒平瓦   | NHIA   | 三重弧文     | 第2層           |
| 128 | 軒平瓦   | NHIA   | 三重弧文     | SK2a02        |
| 129 | 軒平瓦   | NHIA   | 三重弧文     | 第2層           |
| 130 | 軒平瓦   | NHIA   | 三重弧文     | SK2a02        |
| 131 | 軒平瓦   | NHIA   | 三重弧文     | 第2層           |
| 132 | 軒平瓦   | NHIB   | 五重弧文     | SD2a02        |
| 133 | 軒平瓦   | NHIB   | 五重弧文     | SX2b01        |
| 134 | 軒平瓦   | NHIA?  | 三重弧文か    | SK2a02        |
| 135 | 軒平瓦   | NHII   | 重圈文      | 第2層           |
| 136 | 軒平瓦   | NHII   | 重圈文      | SX2b01        |
| 137 | 軒平瓦   | NHII?  | 重圈文か     | 第3層           |
| 138 | 軒平瓦   | NHIII  | 唐草文      | SD2a01        |
| 139 | 軒平瓦   | NHIII  | 唐草文      | 第2層           |
| 140 | 軒平瓦   | NHIII? | 唐草文か     | SX2a01        |
| 141 | 軒平瓦   | NHIII? | 唐草文か     | SK2a02        |



写真5 瓦当表面の木目痕(117)

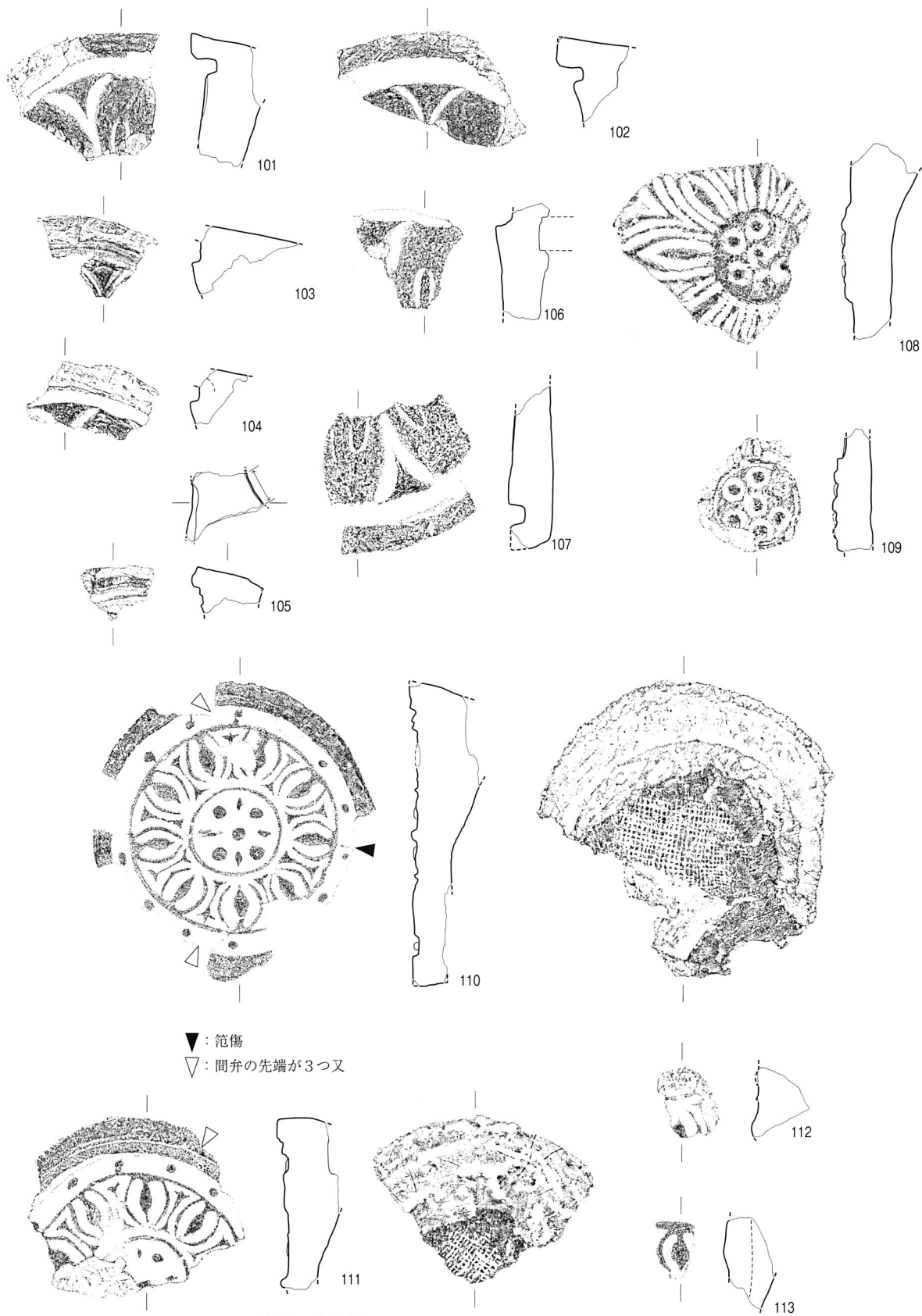


図55 軒丸瓦

NM I A型式(101~105)、NM I B型式(106・107)、  
 NM II型式(108・109)、NM III型式(110~113)

については後に詳述する。114では外区内縁に範傷が確認できる(図の▲部分)。

**NMIB型式**は軟質に焼成され、橙色を呈する。**NMIA型式**と比べて瓦当厚はやや薄い。弁端の高さは、**NMIA型式**では界線のもっとも深い部分から5mmであるのに対し、**NMIB型式**では8mmとやや高くなっている。106は瓦当裏面に溝を切っており、接合技法についても**NMIA型式**と異なる。

**NMII型式(108・109)** 重弁八弁蓮華文軒丸瓦である。素弁を三重の輪郭線が囲む。間弁については残存状況が悪く判然としないが、該当する個所がわずかに盛り上がることから、本来は表現されていた可能性が高い。中房の直径は4.8cmで、河内地域などで出土する重弁蓮華文軒丸瓦と比較してやや大ぶりなのが特徴である。1+6の蓮子はややいびつに配されている。

中房部分のみ残存する109についても、中房の直径および蓮子の配置から、当型式に属する可能性が高いと考えた。ただ、108が土師質に焼成されているのに対し、109はやや瓦質に焼成され表面は灰白色を呈する。中房の端付近には1条の沈線を巡らせ、各蓮子には周環が伴う。

**NMIII型式(110～113)** 単弁九弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当は歪んでいるが、平均すれば直径15.8cm、中房の直径は4.5cmである。弁は素弁の両側にこれを包むように突線を配する独特の意匠で、

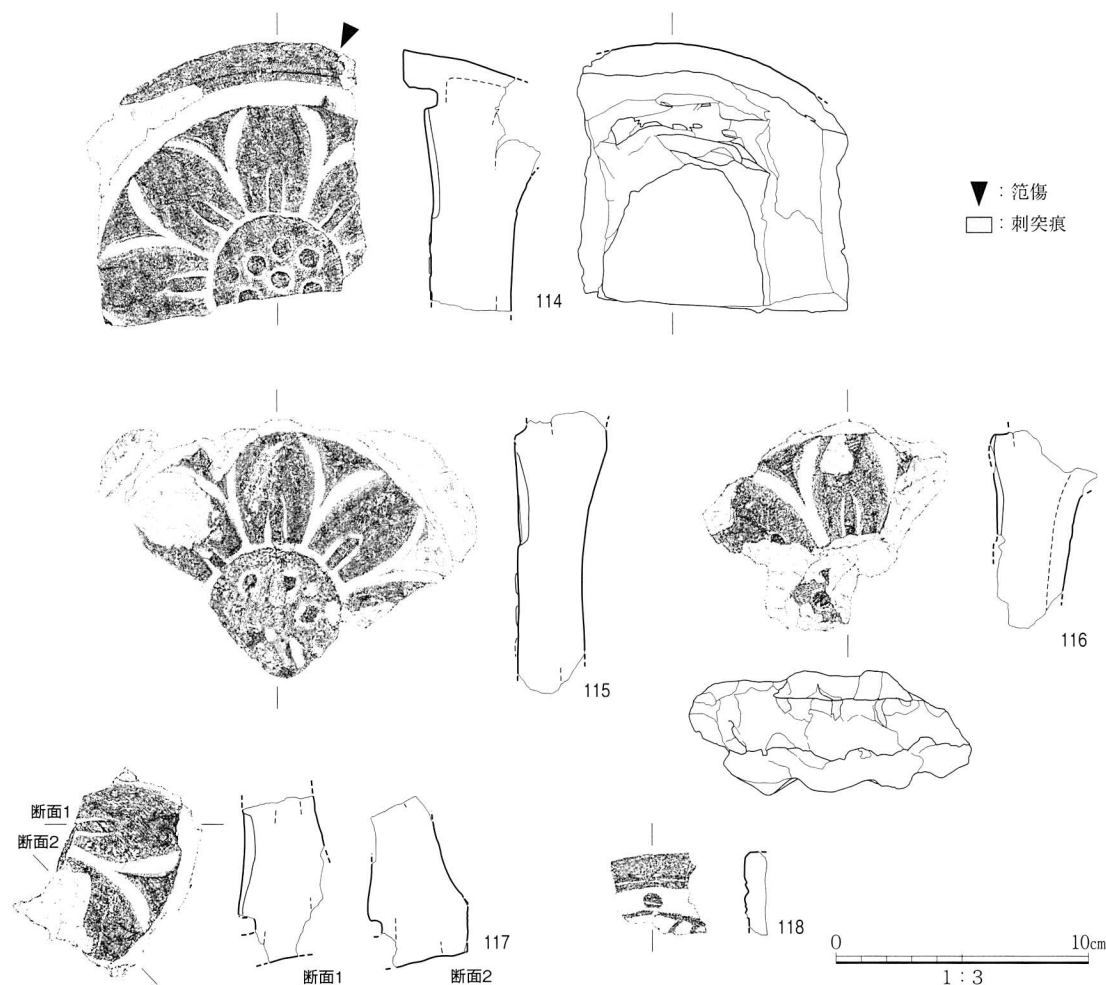


図56 既往の出土資料

NMIA型式(114・116・117)、NMIB型式(115)、NMIII型式か(118)

先端部は界線によって切られる。間弁は突線として表現され、先端が二股に分かれる。一部の間弁では外側先端部が3つ又に分かれており(図の△)、範傷の可能性も考えられる。中房はやはり真円を呈さずにいびつである。瓦当面からの盛り上がりはなく、突線によってのみ内区と画されている。中房内には中心に蓮子1個を配し、その周囲には円形を呈する蓮子と、杏仁形を呈する蓮子を交互に、計8個配する。外区内縁にはいびつな形状の珠文を置く。欠損部分も多いが、14個に復元できる。また、110の外区内縁には範傷(図の▲)が確認できる。外区外縁は文様を配置せず直立縁で、最終的にナデによって整えられている。総体的に見て、平面的な瓦当面と、線による文様表現が特徴的である。胎土は直径2mm以下の長石・石英・チャートを含み、やや粗い。焼成はやや甘く土師質であり、表面は褐灰色、内面はにぶい黄褐色を呈する。拓本から判断する限り、摂津国分寺跡から出土したと伝える軒丸瓦[大脇正一1932: 第7図]と非常によく似た文様構成である。

瓦当裏面を見ると、高い位置に丸瓦の剥離痕跡を認める。裏面中央部は凹凸が著しく、粗い布目を留める。この布目は、通常のいわゆる1本造りによるものとは異なり、布目の間延びなどが見られない。3cm当りの布目の密度は、110で経糸11本、緯糸13本である。112・113は細片であるが、弁の形状から当型式に属するものと判断できる。118についても、胎土・焼成などの類似性から当型式に属する可能性がある。瓦当部が折り曲げによって造り出されるという点で違いはあるが、瓦当裏面の状況(丸瓦の剥離痕、中央部の凹凸、間延びのない布目)についてのみいえば、法隆寺において金堂・塔の修理に用いられた一本造り軒丸瓦に類例がある[山崎信二2003: p.199-202]。年代は10世紀末～11世紀初頭に比定されており、瓦当裏面に凹凸がある理由として、「土を固めた内型」を使用した可能性が提示されている。剥離跡を残すことから、今回の調査で出土した110・111は瓦当部と丸瓦部が別造りされたことは明らかである。法隆寺例を勘案すれば、瓦当部に範を打込む際、裏支えが手や生粘土などの柔らかい素材であり、その裏支えの表面に布が貼付けられていたものと想定できる。

**NMIA型式の接合技法** 先述したように、当型式の軒丸瓦と丸瓦の接合に際しては、特徴的な技法が採用されている。当型式に属する瓦当部のうち、丸瓦部との接合痕跡を残すものは114・116である。また、丸瓦部先端に瓦当部との接合痕跡を残す資料119～124について、図57に示した。119～122は硬質で、NMIA型式に属する資料である。

このうちまず瓦当部から見ると、114・116ともに、瓦当上方からヘラ状の工具によって刺突した痕跡が認められる(図版12)。次に丸瓦部119～121を観察すると、先端がナデによって細く加工されていること、およびヘラ状工具によって下方・側方から刺突が行われたことを確認できる。

これらの知見を合わせると、①丸瓦先端部がまだ生乾きの状態でその先端部をナデて変形させ、②先端を瓦当部に差込み(この際、瓦当裏面には接合のための加工は施されない)、③粘土を足して補強したのち、④上下左右からヘラ状工具によって刺突して、瓦当部・丸瓦部・付加粘土をなじませ、⑤ヘラケズリ・ナデによって接合部の表面を整える、という工程が復元できる。瓦当部と丸瓦の接合に際しては、キザミを加えるなど丸瓦先端部に一定度の加工を施すことはある。しかし、当例のように生乾きの丸瓦先端部を変形させ、ヘラ状工具による刺突を加える例を、管見の限り知らない。

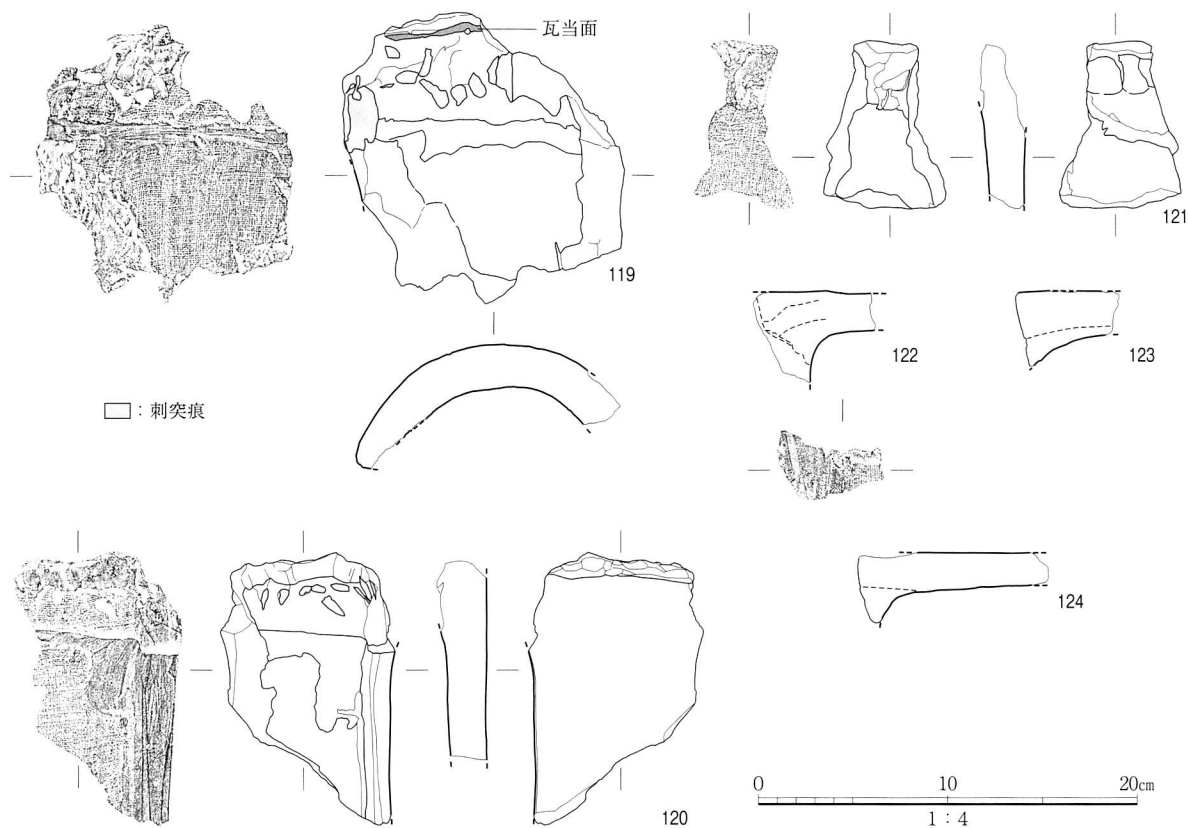


図57 軒丸瓦の接合技法

NM I A型式(119~122)、NM I B型式(123・124)

ただし、この技法が後に継承されないことを考えれば、生産の合理性という意味では利点が少なかったと考えられる。

なお、図57に示したうち、123・124は軟質に焼成されている。剥離痕も119~121とは異なり、丸瓦先端部に特別な加工は施していない。胎土・焼成・丸瓦の厚さ、また、106裏面に残る痕跡と整合的であることから考えて、**NM I B型式**の軒丸瓦から剥離したものと考えてよい。このように、**NM I A型式**と**NM I B型式**とでは、文様構成を同じくするものの、範の違い、瓦当裏面の突帯の有無、焼成、瓦当の厚さ、丸瓦との接合技法など様々な違いを有する。

## ii) 軒平瓦(図版 13・14、図 58～60)

軒平瓦は文様によって3種に大別し(**NH I**~**Ⅲ類**)、このうちI類は文様によってA・B類に細分した。

**NH I型式(125~134)** 桶巻き造りの重弧文軒平瓦である。以下、重弧文を記述するに当り、「弧の数」は凸部分(弧線)の数により、上から順に第1、第2と呼ぶ。三重弧文軒平瓦**NH I A型式(125~131)**と、五重弧文軒平瓦**NH I B型式(132・133)**とに細分した。

両者は平瓦部の製作技法においてほぼ共通した特徴を有する。すなわち、平瓦部の側面は深く削込まれ、分割断面を残さない。また、側面の上下部および瓦当面と接する部分は斜めに面取りを行う。凸面は最終的に施された横方向のナデ調整によって、それ以前の製作痕跡がすべて消されている。これに対して凹面は不調整で、布目・模骨痕を留める。布目の密度は3cm当り経糸25~29本、緯糸24~29本である。模骨痕は幅2.5cm前後で、模骨の綴じ目は観察できない。胎土は緻密・精良であり、

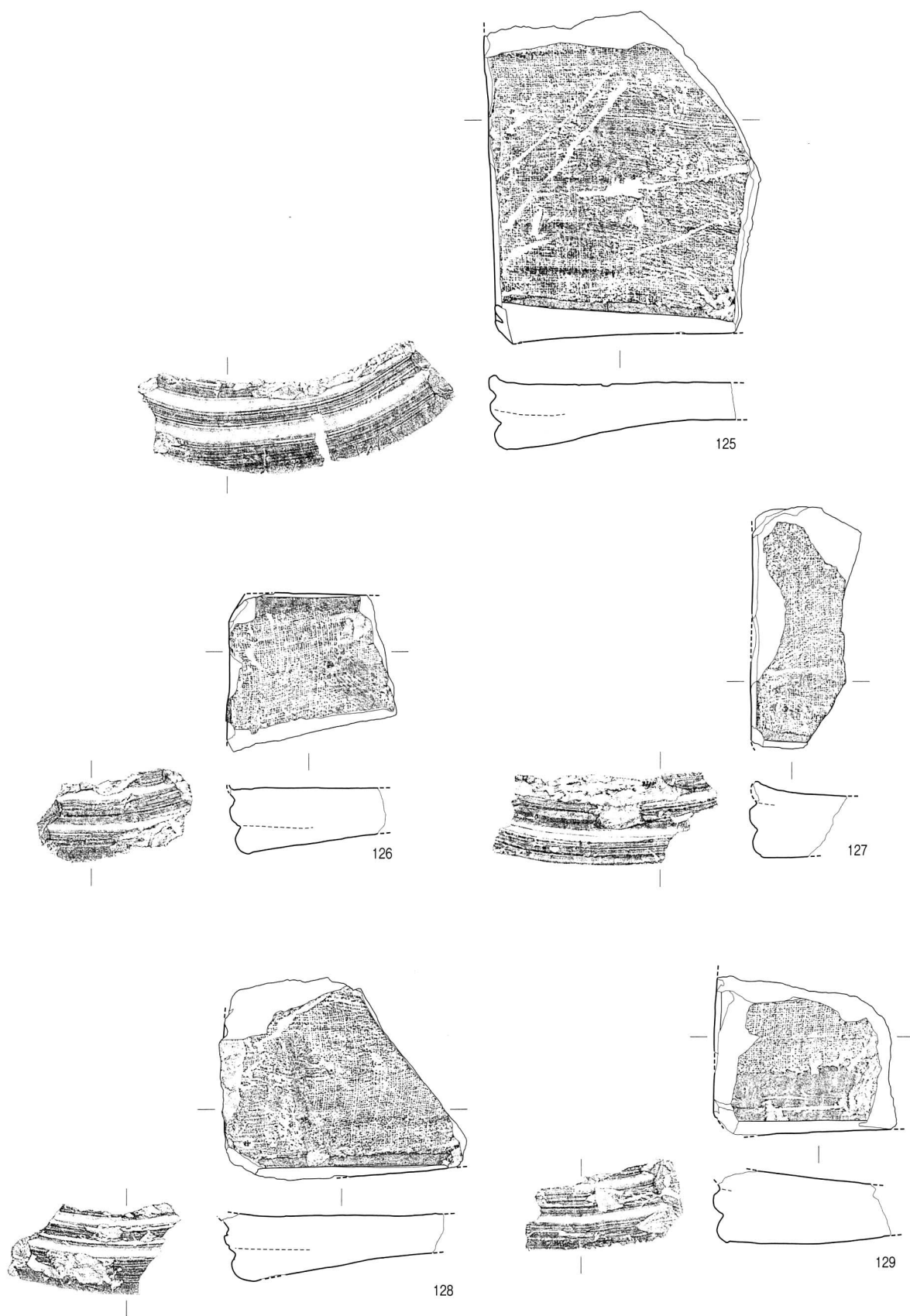


図58 軒平瓦(1)  
NH I A型式(125~129)

直径1mm以下の長石・石英・赤色粒を含む。

**NHIA型式**は、桶巻き造りによる三重弧文軒平瓦である。瓦当面には櫛歯状の工具を移動させた際に生じる擦痕・砂粒の移動痕が観察でき、いわゆる型挽き技法によることがわかる。第1弧線が他と比べてやや細いことが特徴である。弧線の断面は半円形で、そのため凹部は深いV字形を呈している。当型式内での施文原体の差異は少なくとも認識できない。瓦当部は通用の平瓦に粘土板を付加している。粘土板の貼付けに伴う段差は完全に消され、そのため直線顎となっている。焼成は、灰色を呈し非常に硬質なもの125～127と、硬質で灰白色を呈するもの128・129、軟質で単褐色を呈するもの130・131がある。

このうち131では、凹面に残る布目の下に糸切り痕を認める。また、瓦当部の粘土板の接合面を観察すると、凹面側の粘土板が強いナデによって凹んでいる(図版13)。同様の痕跡は、134でも観察できる。また、同じく134の凹面では布目の下に糸切り痕が観察でき、凸面側に付加された補足粘土板の凹面側にも、糸切り痕が認められる。

**NHIB型式**は、桶巻き造りによる五重弧文軒平瓦である。瓦当面には工具の移動に伴う痕跡が確

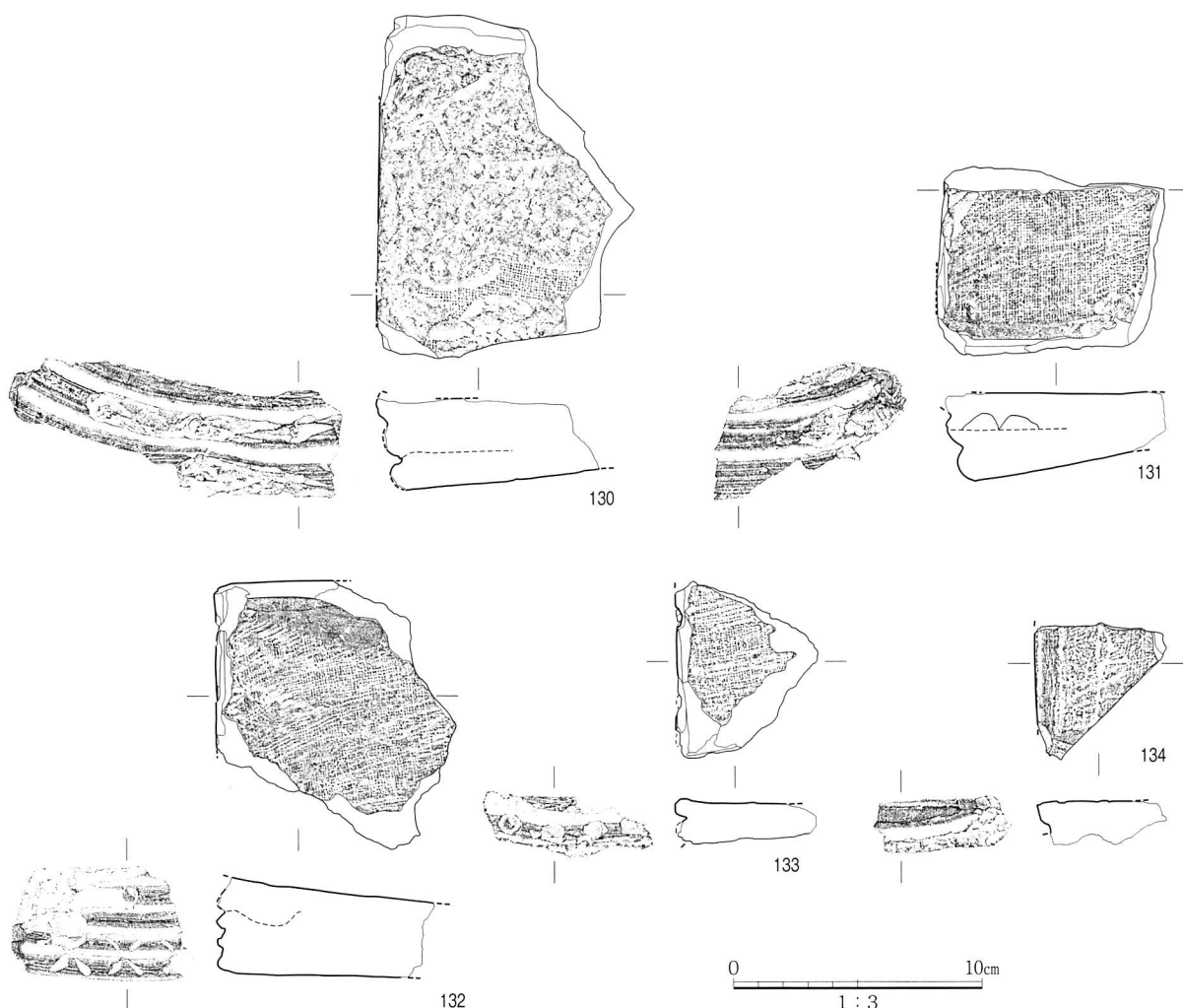


図59 軒平瓦(2)

NHIA型式(130・131)、NHIA型式か(134)、NHIB型式(132・133)

認でき、型挽き技法による施文と判断できる。重弧文に加えて、竹管状工具による「○」文を第2弧線上に、ヘラ状工具による「×」文を第4・5弧線上に施している。この「○」文と「×」文は、132・133から復元すると上下に並んで施されていたようである。弧線の数、施文の間隔などは異なるが、重弧文の上位に「○」文、下位に「×」文を施す例として、興福寺出土資料[6561B 型式/ 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会1996：p.91]がある。

弧線の特徴を見ると、「○」文を施すためか第2弧線がやや太く、また第3・4弧線は断面が三角形状を呈している。NHIA型式とほぼ同じ瓦当厚に2本多い弧線を配しているため、両者を比較した際にかなり繊細な印象を受ける。瓦当部は2枚の粘土板を貼合わせて厚くする。顎はおそらく直線顎であるが、残存部の少ない資料のみであり、あるいは幅広の段顎となるかもしれない。平瓦部の調整、および胎土の特徴はNHIA型式と同様である。

132は、凹面側粘土板の凸面側に、転写されたと思われる布目を認める(図版13)。粘土板の接合面は凹凸が著しく、他の資料と異なった特徴を示している。また、凹面には布目の下に糸切り痕を認める。焼成は堅緻で灰色を呈する。133は、焼成は堅緻であるが色調は灰白色を呈する。粘土板の接合面で剥離した資料である。接合面には、NHIA型式と同様に強いナデが施されている。

NHII型式(135～137) 突線を2重に巡らせる重圈文軒平瓦である(註2)。2重の突線の外側には、側方にのみ突帯を付している。例示した3点のうち、137は残存状態が悪く確実に当型式に属するとは言えない資料である。胎土には直径1mm以下の長石・石英・チャートを含み、軟質に焼成されている。本来は3重の重圈文であった可能性も考えうるが、軒平瓦6575型式[奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会1996：p.92]とは一致しない。

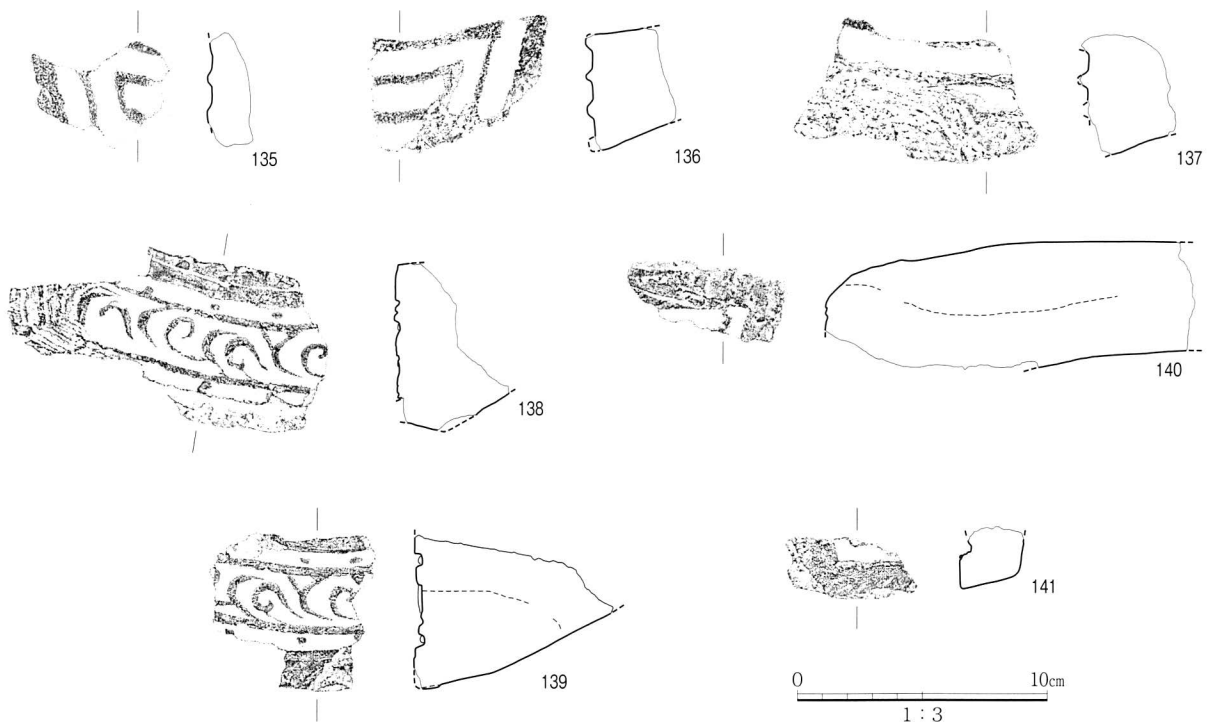


図60 軒平瓦(3)

NHII型式(135・136)、NHII型式(137)、NHIII型式(138・139)、NHIII型式(140・141)

**NHⅢ型式(138～141)** 唐草文軒平瓦である。成形技法は1枚造りによる可能性が高い。外区にはいびつな形の珠文を配し、C字の中心飾りの左側に唐草とY字形の文様(子葉が変容したものか)を3転以上施す。本来の唐草文とはかけ離れた独特の意匠となっている。顎部の成形は粗雑だが、曲線顎を意図したものかと思われる。胎土は石英・長石・赤色粒を含む。焼成は軟質で、表面は黄褐色、内部は黄灰色を呈する。また、断面を観察すると赤っぽい部分と白っぽい部分が層状を呈する場合がある。摂津国分寺跡出土資料[宮本佐知子・佐藤隆1996:p.102]に類例があり、この資料に照らせば、本型式は中心飾りとして対向C字文を配する均整唐草文である可能性が高い。

**138**は全体的に範の傷みが進行し、向って左端付近では凹凸がほとんど失われている。**139**は周縁部に段差が生じており、範の幅を推測することができる。また、凸面の瓦当面に近い3cmほどは横方向、それ以外は縦方向にヘラケズリを施している。**140**はわずかな瓦当面のみ残存するが、胎土の質、焼成の状況から考えて当型式に属するものと考えてほぼ間違いない。凹面には全面に施されたヘラケズリの下に、わずかに布目が観察できる。凸面・側面にも全面にヘラケズリが施されている。

### iii) 丸瓦・平瓦の分類(原色図版2、図61、表5～7)

丸瓦・平瓦の記述に先立ち、その分類基準を示しておく。分類は両者に共通する製作技法の組合せをもって**A～C類**を設定し、各分類の特徴については表5にまとめた。また、摩滅などによって分類できないものや、攪乱などから出土した資料を除いた各分類の総量について、表6では重量によって、表7では角部分の数によって集計を行った。

この分類名に、丸瓦では頭にM、平瓦では頭にHを付す。また、焼成状況を加味し、各分類を1～3類として細分した。布目密度の計測は、3cm四方以上の範囲が残存し、かつ側面が残るなど上下を決定できる資料に対して行った。なお、瓦の全形を知りうる資料は出土しなかった。

**A類**：凸面には執拗なまでにヘラケズリを行い、それ以前の成形痕跡をまったく残さない。したがって、前段階の調整としてタタキが行われたかどうかは不明である。凹面は不調整であり、そのため平瓦では模骨痕を観察できる場合がある。側面調整は分割断面を完全に削取り、側面の上下を斜めに面取りする。布目密度は経糸16～30本、緯糸14～34本であるが、21～30本・20～29本のものが多い。丸瓦は無段式で、方形の釘孔を空ける場合がある。平瓦は桶巻き造りで、凸面にはヘラケズリののち、格子目状のタタキを施す場合がある。焼成は、きわめて硬質で灰～黒灰色を呈するもの、硬質で灰白色を呈

表4 丸瓦・平瓦はか一覧

| 番号  | 種類  | 分類   | 出土位置など |
|-----|-----|------|--------|
| 142 | 丸瓦  | MA 1 | 第2層    |
| 143 | 丸瓦  | MA 1 | 第2層    |
| 144 | 丸瓦  | MA 1 | SX2b01 |
| 145 | 丸瓦  | MA 2 | SX2b01 |
| 146 | 丸瓦  | MA 1 | SK2a02 |
| 147 | 丸瓦  | MA 3 | SX2b01 |
| 148 | 丸瓦  | MA 1 | SX2b01 |
| 149 | 丸瓦  | MB 3 | SX2b01 |
| 150 | 丸瓦  | MB 3 | 第2層    |
| 151 | 丸瓦  | MB 3 | SX2b01 |
| 152 | 丸瓦  | MB 3 | SX2b01 |
| 153 | 丸瓦  | MC   | SD2b02 |
| 154 | 平瓦  | HA 1 | SX2b01 |
| 155 | 平瓦  | HA 2 | SE2b01 |
| 156 | 平瓦  | HA 3 | SX2b01 |
| 157 | 平瓦  | HA 1 | SX2b01 |
| 158 | 平瓦  | HA 1 | SX2a01 |
| 159 | 平瓦  | —    | SD2a02 |
| 160 | 平瓦  | —    | SX2a01 |
| 161 | 平瓦  | HA 1 | SK2a02 |
| 162 | 平瓦  | HA 3 | SX2b01 |
| 163 | 平瓦  | HA 1 | SX2a01 |
| 164 | 平瓦  | HB 1 | SX2b01 |
| 165 | 平瓦  | HB 1 | SD2a02 |
| 166 | 平瓦  | HB 1 | SX2b01 |
| 167 | 平瓦  | HB 2 | SX2b01 |
| 168 | 平瓦  | HB 3 | SE2b01 |
| 169 | 平瓦  | HB 3 | SK2a02 |
| 170 | 不明  | —    | SX2b01 |
| 171 | 隅平瓦 | —    | 第2層    |
| 172 | 磚   | —    | SE2a01 |

表5 丸瓦・平瓦の分類

| 分類 | 調整                  |      | 側面処理   | 布目密度(3cm四方) |       | 丸瓦の特徴 | 平瓦の特徴 |       |
|----|---------------------|------|--------|-------------|-------|-------|-------|-------|
|    | 凸面調整                | 凹面調整 |        | 経糸          | 緯糸    |       | 製作技法  | 格子タタキ |
| A類 | ヘラケズリによりタタキメを残さない。  | 不調整  | 上下を面取り | 16～30       | 14～34 | 無段式   | 桶巻き造り | 有り    |
| B類 | タタキメを残す。離れ砂を施すものあり。 | 不調整  | 面取りなし  | 9～29        | 12～26 | 有段式   | 1枚造り  | 無し    |
| C類 | タタキメを残す。            | 不調整  | 上下を面取り | —           | —     | —     | ?     | 無し    |

表6 丸瓦・平瓦各分類の出土量1 (重量による集計)

| 出土区分 | 重量(kg) |       |       |        | 割合(%) |      |     |       |
|------|--------|-------|-------|--------|-------|------|-----|-------|
|      | A類     | B類    | C類    | 合計     | A類    | B類   | C類  | 合計    |
| 中世遺構 | 97.96  | 34.77 | 9.43  | 142.16 | 43.6  | 15.5 | 4.2 | 63.3  |
| 第2層  | 54.77  | 15.78 | 5.76  | 76.31  | 24.4  | 7.0  | 2.6 | 34.0  |
| 第3層  | 4.39   | 1.38  | 0.37  | 6.14   | 2.0   | 0.6  | 0.2 | 2.8   |
| 合計   | 157.12 | 51.93 | 15.56 | 224.61 | 70.0  | 23.1 | 7.0 | 100.1 |

表7 丸瓦・平瓦各分類の出土量2 (角部の数による集計)

| 出土区分 | 角部の数(個) |    |    |     | 割合(%) |      |     |       |
|------|---------|----|----|-----|-------|------|-----|-------|
|      | A類      | B類 | C類 | 合計  | A類    | B類   | C類  | 合計    |
| 中世遺構 | 71      | 26 | 7  | 104 | 45.2  | 16.6 | 4.5 | 66.3  |
| 第2層  | 29      | 14 | 3  | 46  | 18.5  | 8.9  | 1.9 | 29.3  |
| 第3層  | 5       | 1  | 1  | 7   | 3.2   | 0.6  | 0.6 | 4.4   |
| 合計   | 105     | 41 | 11 | 157 | 66.9  | 26.1 | 7.0 | 100.0 |

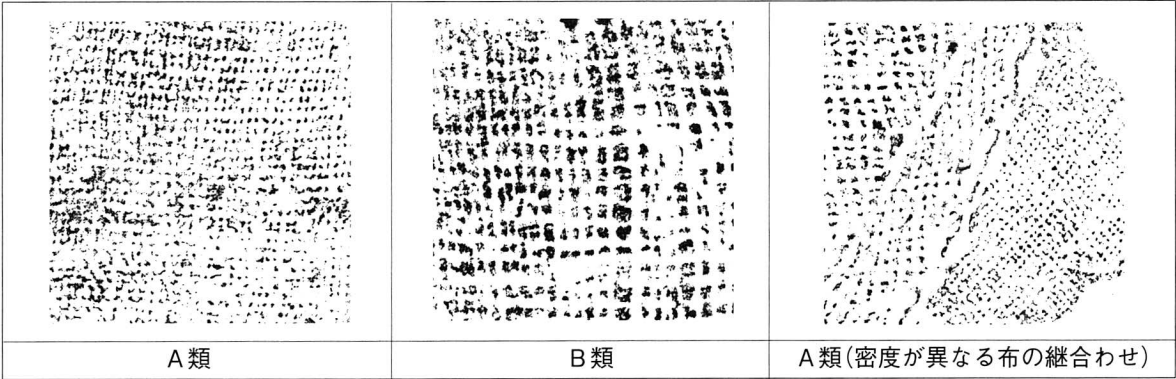


図61 丸瓦・平瓦各分類の布目(実寸)

するもの、軟質で赤褐色を呈するものの3種があり、1～3類として細分した。なお、ごく少数であるが、小型で薄い平瓦が含まれている。

**B類**：凸面にはヘラケズリが行われるものが多いが、縄目タタキの痕跡を完全に消すには至らない。タタキ工具には少なくとも2種が認められるが、離散的に分類することができなかつたため、細分しなかつた。凹面は不調整である。側面にはヘラケズリを施すが、面取りは行わない。布目密度は経糸9～29本、緯糸12～26本とやや幅がある。焼成によって、A類と同様、3種に細分した。

**C類**：瓦質に焼成され、小型の一群を**C類**とした。ごく少数であるため厳密な定義は難しいが、基本的な調整は**A類**と共通する。

iv) 丸瓦(図版15、図62・63)

**MA類(142～148)** 142～144・146・148は硬質に焼成され灰色を呈する**MA1類**、145は硬質だが灰白色を呈する**MA2類**、147は軟質で黄褐色を呈する**MA3類**である。

142・143はともに四角形の釘孔を凸面側から穿つ。軒丸瓦の丸瓦部である可能性があるだろう。穿孔面は非常に平滑で、釘そのものを穿孔具として使用した可能性もある。凹面側にはみ出した粘土を焼成前に掻き取る場合142と、そのまま焼成する場合143とがある。142では布の合わせ目が認められるが、明瞭な綴合わせ痕跡を観察できない。おそらくはぐし縫い[大脇潔1991]によるもの

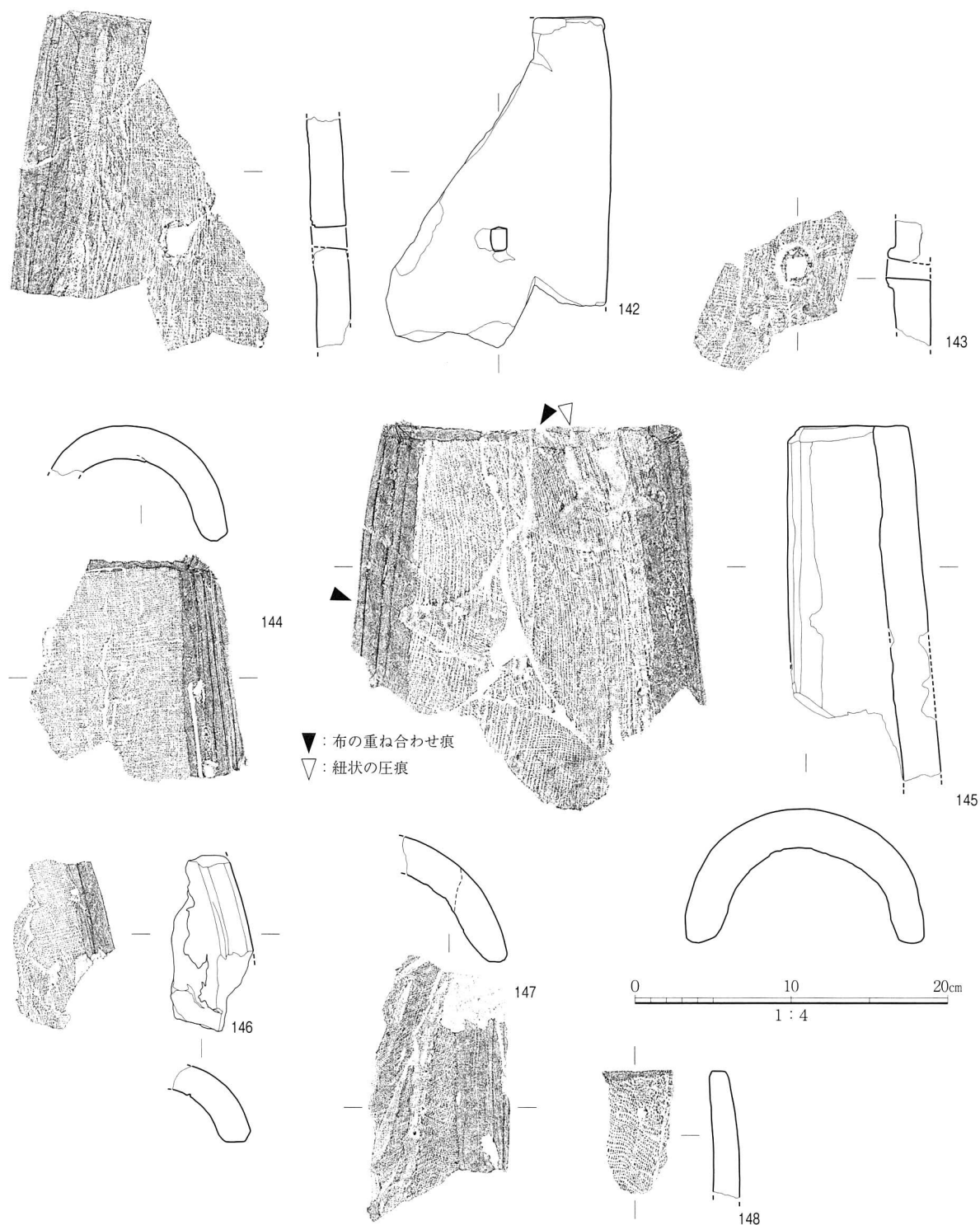


図62 丸瓦(1)

MA 1類(142~144・146・148)、MA 2類(145)、MA 3類(147)

であろう。**144**は凹面にZタイプの粘土板接合痕[佐原眞1972]を残す。広端側の破面は比較的面を揃えて割れており、あるいは割面戸として使用された可能性がある。凸面頂部と側面部の風化度が異なることも、その傍証となろうか。**145**は布目を重ね合わせた痕跡を確認できる(図の▲)。また、狭端部近くには布目を介して細い溝状の凹みが観察できる。布を剥がすために入れ込まれた紐の可能性がある。**146**は高温での焼成のためか歪みが生じ、凸面はひび割れている。また、凹面には粘土板の接合痕を明瞭に残す。**147**の凹面にも布目を介して縦走する紐状の圧痕が観察できる。**146・147**とも、粘土板の接合はZタイプである。**148**は小型で薄い。

**MB類(149～152)** いずれも軟質な**MB3類**である。**149・150**はいずれも有段式丸瓦である。玉縁部にも布目痕を有する。同一分類として一括したが、断面形状(=模骨の形状)、粘土の付加方法とも異なっており、細分可能な資料である。**151・152**は粘土板の接合痕を明瞭に残す。**151**の上端部にはわずかに段差が認められ、有段式丸瓦であることがわかる。

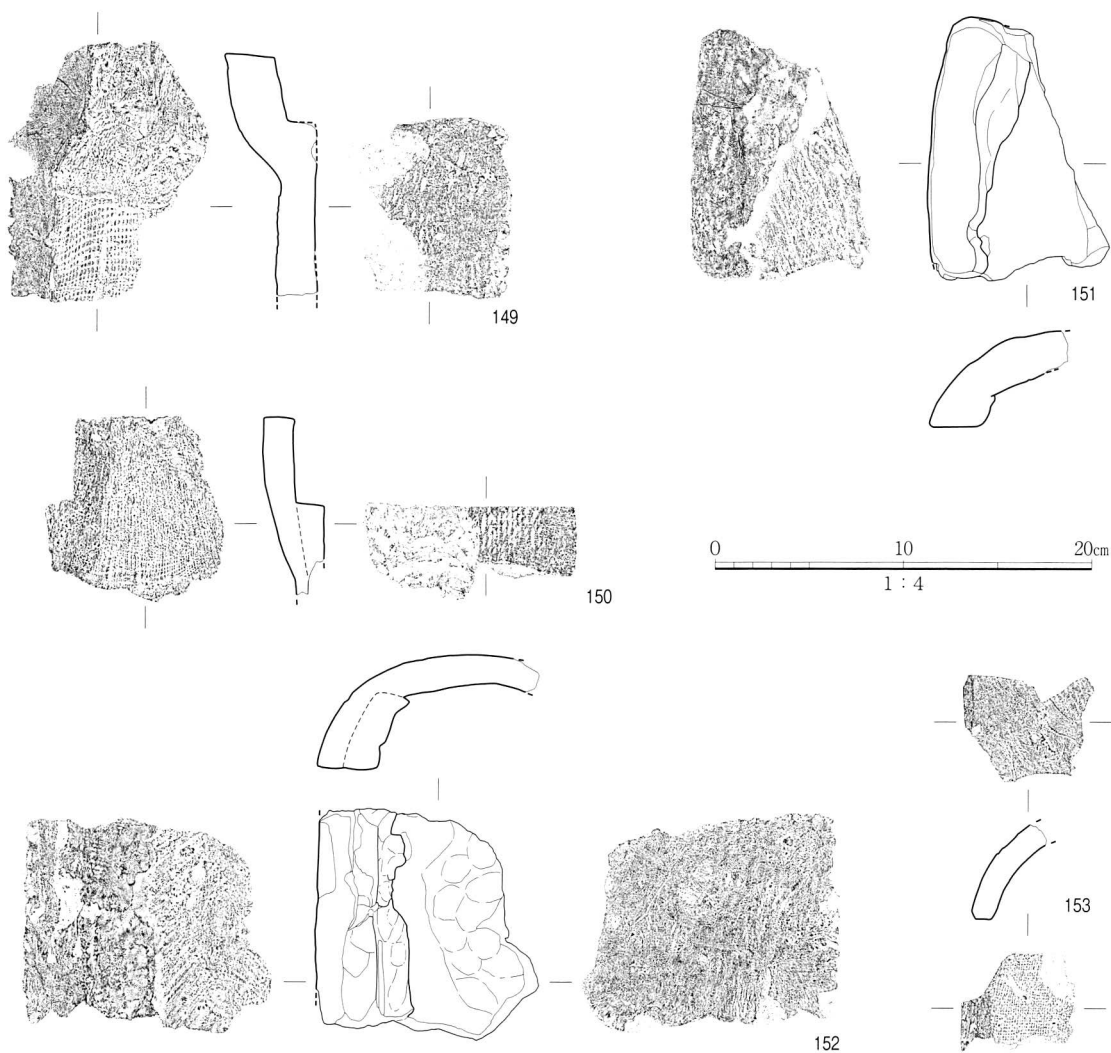


図63 丸瓦(2)  
MB3類(149～152)、MC類(153)

**MC類(153)** 153は薄く小型で、焼成は瓦質である。無段式で、隅部分は斜めに切落とす。

v) 平瓦(図64～66)

**HA類(154～163)** 154・157・158・161・163は硬質に焼成され灰色を呈する**HA1類**、155は硬質だが灰白色を呈する**HA2類**、156・162は軟質で黄褐色を呈する**HA3類**である。159・160は今回行った分類に当てはまらない資料である。

**HA類**の平瓦は、凹面に模骨痕を残し、桶巻き造りによることがわかる。凸面には格子目タタキを施している。このタタキメはヘラケズリを切っており、また側面では分断されているため、凸面の調整後、平瓦を分割する前に施されたものであることがわかる。タタキメの原体は長辺6.1cm、短辺4.7cmの長方形の中に格子目が切られ、隅の一角のみさらに仕切りが入る。この仕切りが入る側にはタタキメの外側に木目の圧痕を認め、また、タタキメの周囲は浅く凹んでいる。これらのことから、原体は格子目を刻んだ羽子板状の木板であると推定できる。完全に原体が異なる159・160を除き、同種のタタキメの中で原体の差違は認識できない。また、原体の傷みの進行などは観察できなかった。

さて、いまだ少しこのタタキメを観察すると、木目が残る方が原体が深く当っており、こちら側が柄に近いと考えられる。また、2回以上のタタキが行われた資料を観察すると、各タタキメが一定の曲率を描くものと復元でき、作業には右手を使用したと想定できる。なお、当例のように製作技法上必ずしも必要でないタタキメについては、工人集団の目印としての機能[安村俊史1997]や、屋根に葺いた際の滑り止めとしての機能(註3)が想定されている。

154は模骨痕を明瞭に観察でき、布目の下に糸切り痕が認められる。155・156はSタイプの粘土板接合痕を認める。統計的な処理を行うことはできなかったが、今回出土した資料では丸瓦でZタイプが多く、平瓦でSタイプが多い。157は凹面全体にうっすらと自然釉がかかる。158は凹面に斜走する細く鋭い沈線を3条認めるが、性格は不明である。161～163はいずれも粘土板接合痕が観察できる。このうち161の凸面には、わずかであるが布目が付着している。

**HB類(164～169)** 164～166は硬質な**HB1類**、167は硬質で灰白色を呈する**HB2類**、168は軟質な**HB3類**である。成形技法は1枚造りで、凸面には縄目タタキの痕跡を残すほか、タタキ調整に際し離れ砂を施すものがある。縄目タタキはいずれも長辺に平行して行われる。凹面には布目の下に糸切り痕を認める場合がある。側面の調整では面取りを行わないなど、**HA類**と比較して製作技法が簡略化されている。多くはごく粗い縄目タタキを施すが、169のように、まれに紐の間隔が密なものが認められる。

167は凹面に布目を切る紐状の圧痕を認めるが、性格は不明である。168は二次的に被熱している。**B類**の平瓦には、このように被熱した資料が少数含まれている。

vi) 隅平瓦(図66)

171の1点のみ出土した。布目と側辺の関係から、通常の平瓦を成形したのち、焼成前に分割したのちと考える。焼成の質、また側辺の上下を面取りしていることから、**HA3類**に近い。

vii) 塼(図66)

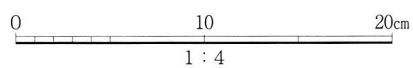
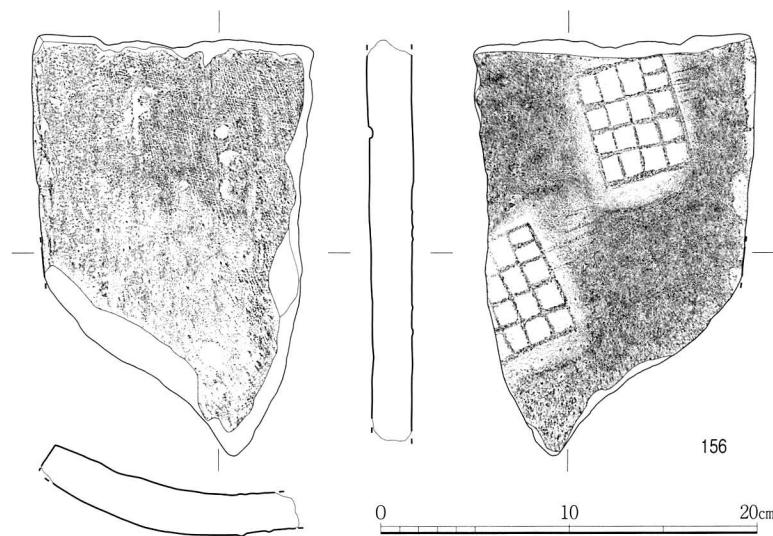
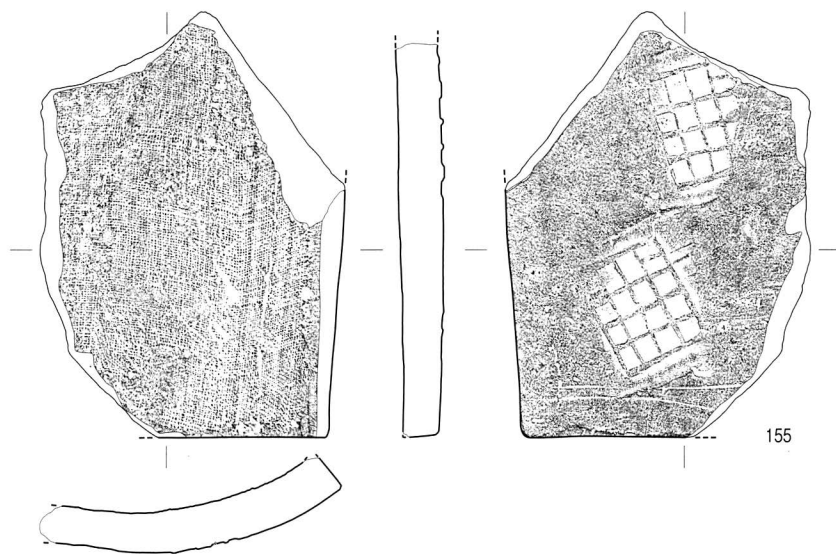
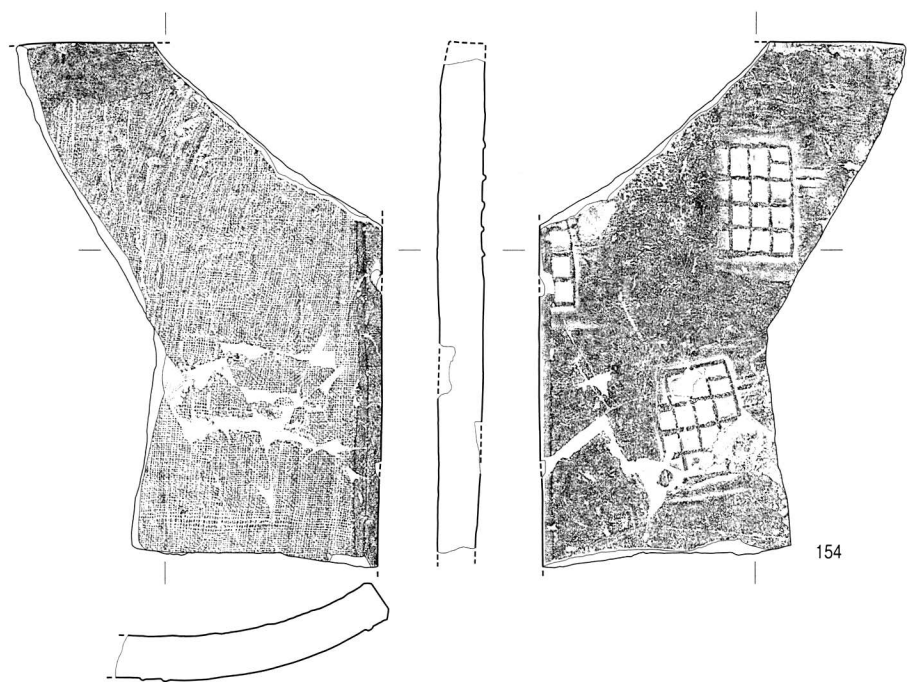


図64 平瓦(1)  
HA 1類(154)、  
HA 2類(155)、  
HA 3類(156)、

172の1点のみが出土した。焼成は甘く、赤褐色を呈する。一部が灰黒色に変色しており、二次的に被熱した可能性がある。表面は摩耗しているが、ヘラケズリの痕跡をわずかに留める。

viii) 不明品(図66)

170は板状の粘土に太く低い突帯を貼付ける。焼成は甘く、もろい。胎土には直径2mm以下の長石・石英・チャートを比較的多く含む。表面は灰黒色、内部は黄褐色を呈する。胎土は今回の調査で出土したいずれの土器・瓦塼とも異質である。類例を知らないが、厚さなどから瓦塼類と考えた。

3) 小結

i) 瓦の組合せ案と時期区分(図67・68)

以上に報告した資料はいずれも遊離資料ではあるが、近隣における瓦の分布に明確な集中が認め

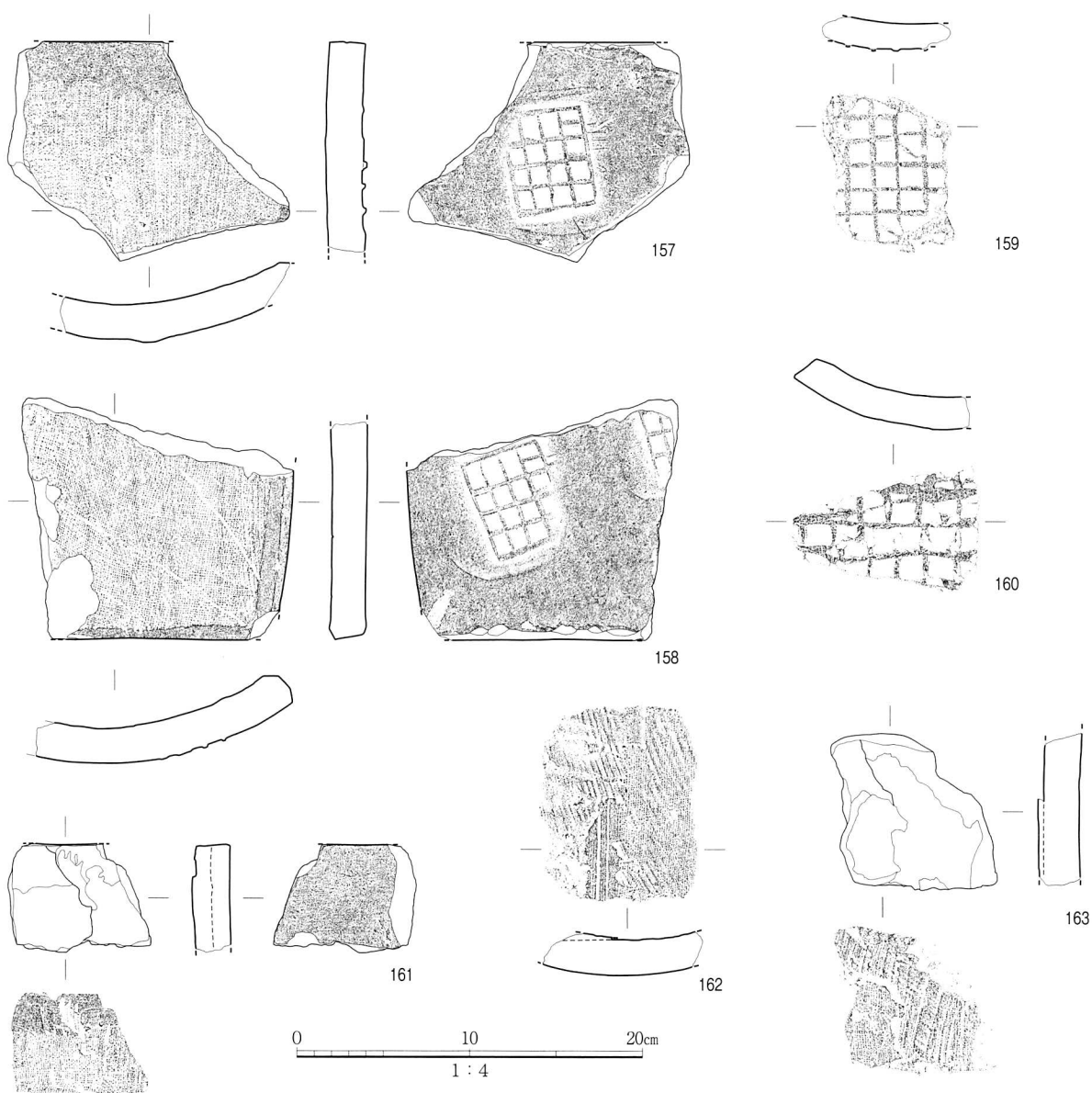


図65 平瓦(2)

HA 1類(157・158・161・163)、HA 3類(162)、その他(159・160)

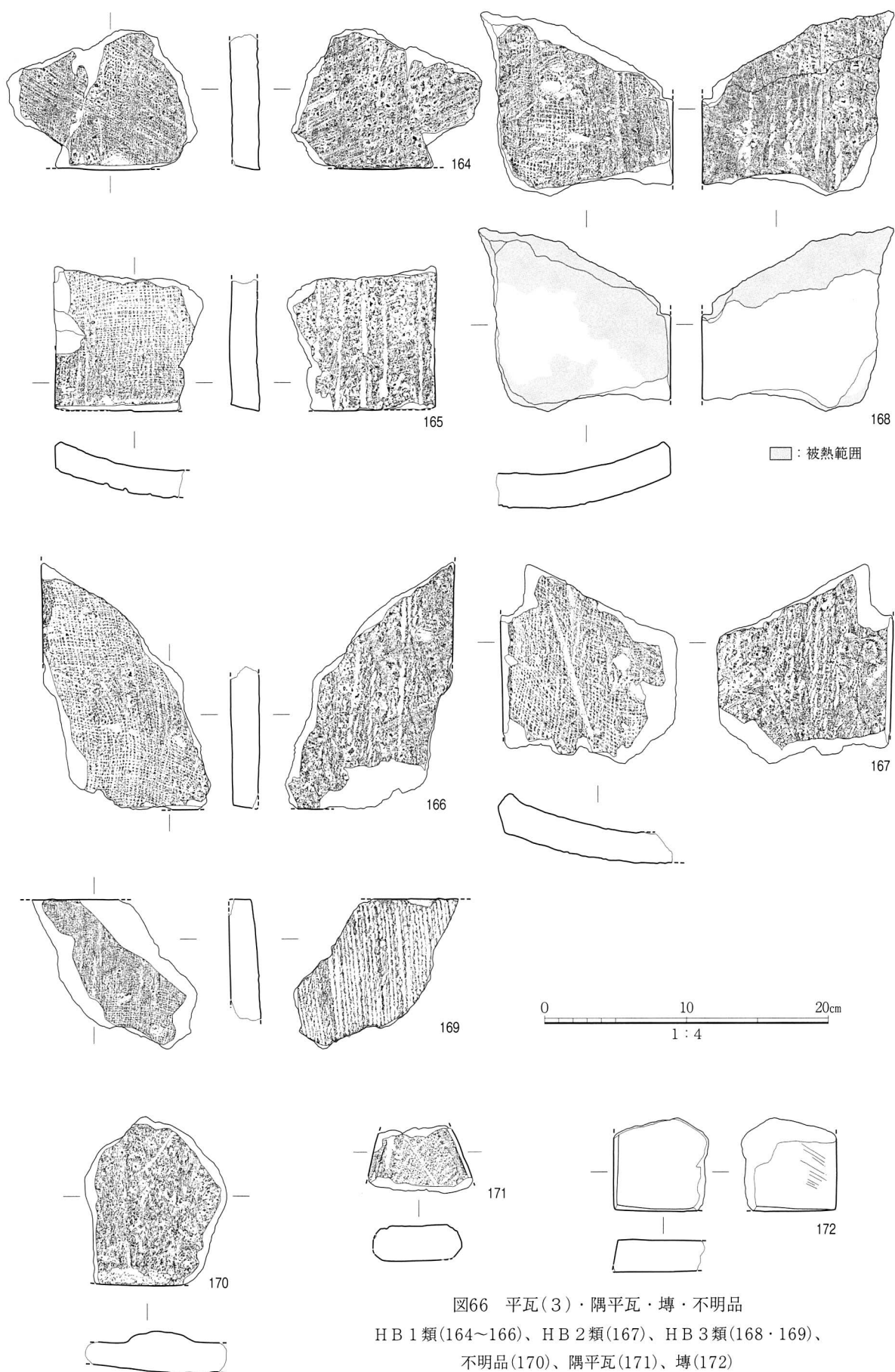


図66 平瓦(3)・隅平瓦・塼・不明品  
HB 1類(164~166)、HB 2類(167)、HB 3類(168・169)、  
不明品(170)、隅平瓦(171)、塼(172)

られることから(図5)、今回の調査地付近を中心として展開した単一の瓦葺き施設に伴う資料群であると考え。この前提のもと、以下では瓦の組合せ・時期区分案を示しておきたい。

まず軒丸瓦について、瓦当文様の意匠から見て、もっとも古相を呈するのは単弁蓮華文のNMⅠ型式である。このうち、NMⅠA型式とNMⅠB型式に見られる製作技法の差違は時期差に還元できる可能性もあるが、論証できるだけの根拠はなく、本稿では一括して考える。これに対応する軒平瓦は、重弧文NHⅠ型式と考えて間違いないだろう。限られた出土量の中ではあるが、瓦当部の中に占める比率の高さもこの想定 of 妥当性を示す。五重弧文NHⅠB型式については、意匠としては三重弧文NHⅠA型式より後出的なものである。しかしながら、古い意匠が使用されることはまま認められる事象であり、NHⅠA・B型式の製作技法が一致している以上、積極的に時期をさかのぼらせる根拠を有さない。この単弁蓮華文NMⅠ型式と重弧文NHⅠ型式の組合せを、Ⅰ期のものとして捉える。一方、同じく意匠からもっとも新相を呈する型式を探せば、軒丸瓦では単弁蓮華文NMⅢ型式、軒平瓦では唐草文NHⅢ型式である。この組合せをⅢ期とし、このどちらにも属さないものをⅡ期とする。

さて次に、軒平瓦・軒丸瓦の組合せによって設定したⅠ～Ⅲ期と、丸瓦・平瓦の対応を考えたい。布目密度が時期の指標となることは、かねてより指摘され[石田茂作1947]、今日的な理解としてもおおよその傾向としては異論のないところであろう。そこで、今回出土した資料の中で、分析に堪える資料数を確保できたA類およびB類について、3cm四方の布目の密度とその分布を示した(図67)。図67には同時に、同じく3cm四方の布目密度を計測できた軒丸瓦・軒平瓦の分布をも示した。この図から、B類についてはややデータにばらつきがあるものの、A類と軒平瓦NHⅠA・B型式、B類と軒丸瓦NMⅢ型式の布目密度は対応するものとみてよいだろう。

製作技法・胎土からも検証を行っておく。先に報告したように、軒平瓦NHⅠ型式と丸瓦・平瓦A類は同様の技法・胎土を用いている。一方、軒丸瓦NMⅢ型式とB類のセットについては、明確な技法の一致は確認できないが、胎土が層状をなすなど共通した特徴が認められ、同一産地の胎土を使用していると考えられる。

よって、軒丸瓦NMⅠ型式、軒平瓦NHⅠ型式、丸瓦・平瓦A類をⅠ期のセットと考える。また、Ⅲ期のセットとして軒丸瓦NMⅢ型式、軒平瓦NHⅢ型式、そして丸瓦・平瓦B類の組合せを復元する。Ⅰ～Ⅲ期に帰属させることができなかったC類については、少数かつ小型であることから、差し瓦である可能性や、小規模な建物に使用された可能性を考えておきたい。図68には、以上のようにして復元したセットの変遷を示した。

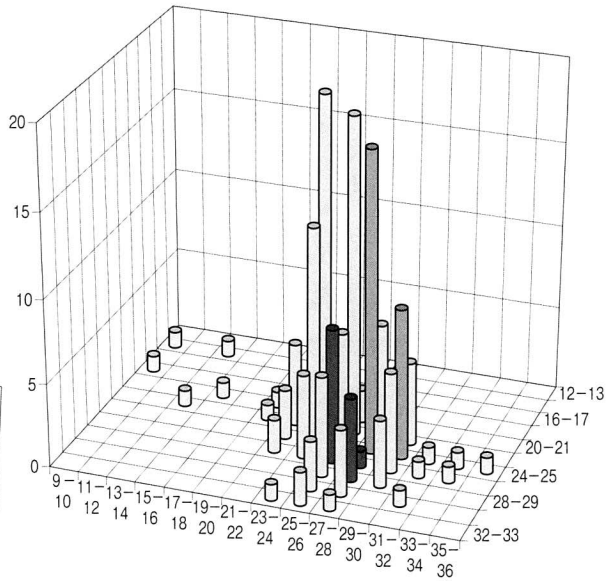
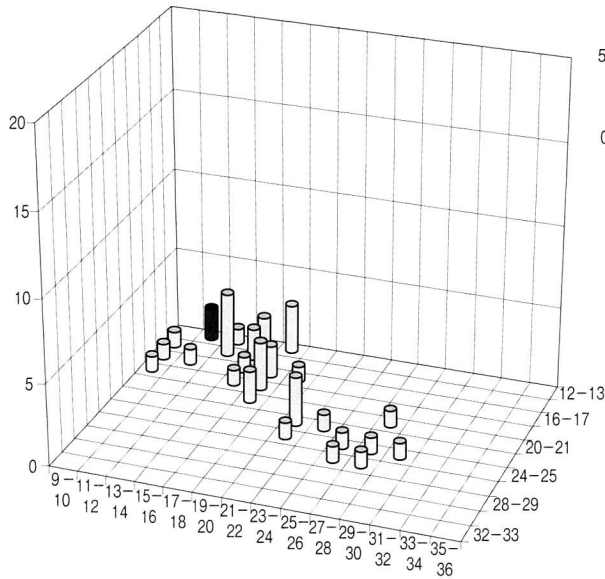
## ii) 各期の実年代観と評価

これらの瓦に伴うと考えられる土器類はきわめて少なく、実年代観の比定に当っては瓦の型式的な検討に拠らざるを得ない。

まずⅠ期については、子葉を配する単弁八弁蓮華文軒丸瓦NMⅠ型式、重弧文軒平瓦NHⅠ型式という組合せから、7世紀後葉に属するものと考えて大過なからう。対応する平瓦HA類が桶巻き造りであること、丸瓦が無段式であること、硬質に焼成されることなどもこの想定と整合的である。

[丸瓦・平瓦B類と瓦当の対応↓]

■：単弁蓮華文軒丸瓦  
(NMⅢ)



[↑丸瓦・平瓦A類と瓦当の対応]

■：三重弧文軒平瓦  
(NHⅠA)

■：五重弧文軒平瓦  
(NHⅠB)

個体数  
緯糸数  
経糸数

【A類の布目密度】

| →経糸<br>↓緯糸 | 9-10 | 11-12 | 13-14 | 15-16 | 17-18 | 19-20 | 21-22 | 23-24 | 25-26 | 27-28 | 29-30 | 31-32 | 33-34 | 35-36 |
|------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 12-13      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 14-15      | 1    | 0     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 16-17      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 18-19      | 1    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 20-21      | 0    | 0     | 0     | 1     | 0     | 1     | 2     | 3     | 2     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 22-23      | 0    | 0     | 1     | 0     | 0     | 1     | 5     | 21    | 19    | 7     | 5     | 0     | 0     | 0     |
| 24-25      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 3     | 13    | 7     | 18    | 9     | 1     | 1     | 1     |
| 26-27      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 2     | 5     | 8     | 1     | 6     | 1     | 1     | 0     |
| 28-29      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 6     | 5     | 4     | 0     | 0     | 0     |
| 30-31      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 3     | 4     | 0     | 1     | 0     | 0     |
| 32-34      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1     | 2     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     |

n = 175

【B類の布目密度】

| →経糸<br>↓緯糸 | 9-10 | 11-12 | 13-14 | 15-16 | 17-18 | 19-20 | 21-22 | 23-24 | 25-26 | 27-28 | 29-30 | 31-32 | 33-34 | 35-36 |
|------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 12-13      | 0    | 2     | 1     | 2     | 3     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 14-15      | 1    | 0     | 4     | 2     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 16-17      | 1    | 1     | 0     | 1     | 2     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 18-19      | 1    | 0     | 0     | 1     | 3     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 20-21      | 0    | 0     | 0     | 0     | 2     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 22-23      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 3     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 24-25      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1     | 0     | 1     | 1     | 1     | 0     | 0     | 0     |
| 26-27      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 28-29      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 30-31      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 32-34      | 0    | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |

n = 39

図67 布目密度の対応

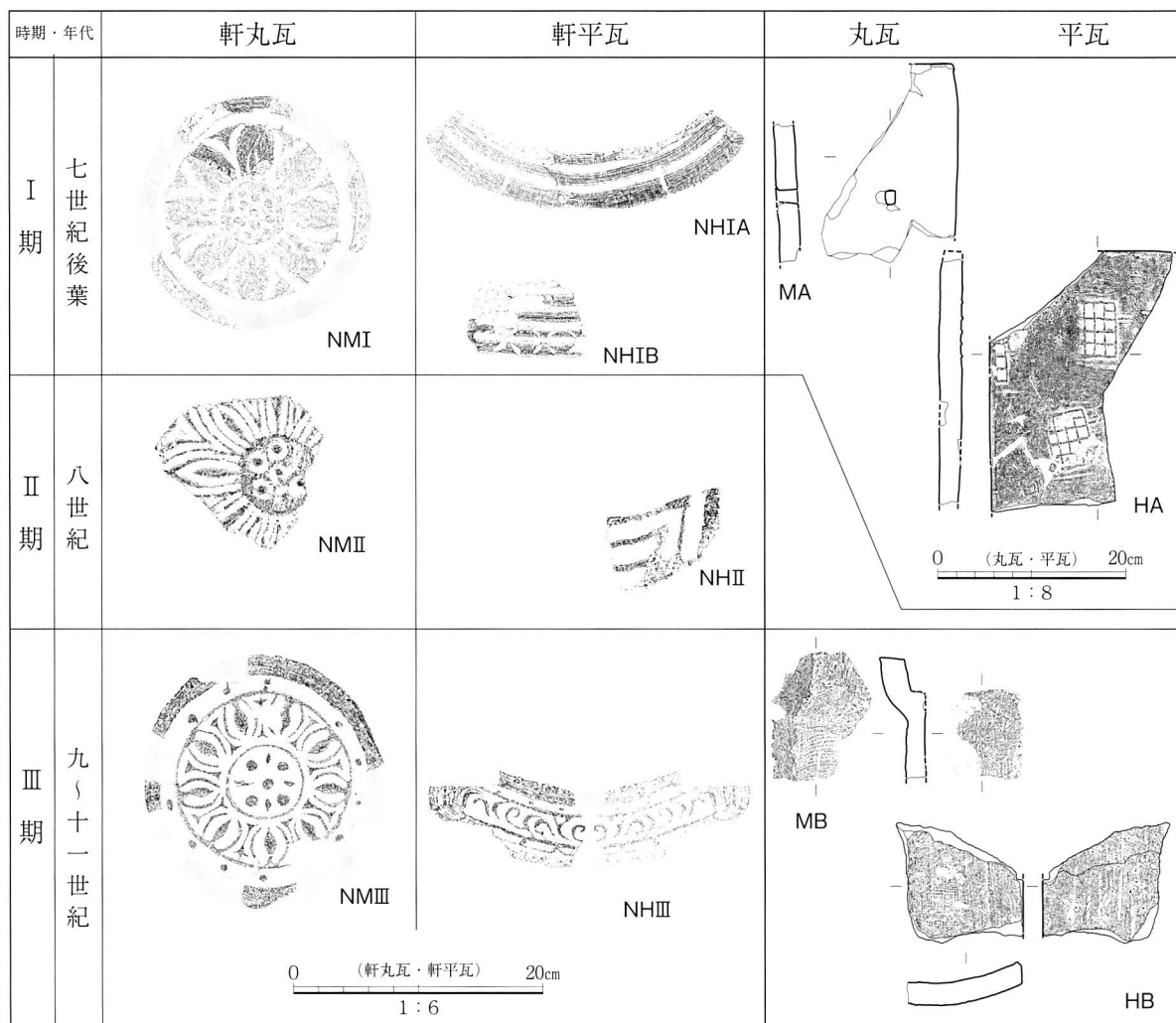


図68 瓦の組合せと時期

続くⅡ期については時期比定の根拠が非常に薄いですが、Ⅰ期と、後述するⅢ期の年代観から8世紀代と考える。ただし、堺市丹比廃寺出土の重弁八弁蓮華文軒丸瓦が7世紀後葉～8世紀前葉と評価されていること[上田睦2003]、また上町台地への重圈文軒丸瓦・重圈文軒平瓦導入の契機を後期難波宮造営に求めるのであれば、軒丸瓦NMⅡ型式と軒平瓦Ⅱ型式には一定の年代差が想定できる。

Ⅲ期については、対向C字文を中心飾りとし、Y字形の子葉を配する均整唐草文軒平瓦NHⅢ型式を、平安京に特徴的な意匠[上原真人1994：p.636]が変容したものと捉えれば、少なくとも9世紀前半をさかのぼるものではない。同文の瓦を出土する摂津国分寺の年代観が8世紀末葉をさかのぼらないと想定されること[黒田慶一2004]もこれと整合的である。下限については明確でないが、意匠および接合式の軒丸瓦NMⅢ型式から、平安時代後期に降る可能性は低いと考える。したがって、Ⅲ期の実年代はおおよそ9～11世紀に求められる。

このうちⅠ期の組合せについては、出土量の多さから瓦葺き施設の創建に伴う一群と考えて間違いないだろう。Ⅱ期には、建物の修理などに伴って少量ながら継続的な瓦の供給が行われている。また、後続する瓦が近隣に認められないことから、Ⅲ期をもってこの施設は廃絶したものと見てよい。したがって、これらの瓦が供給された瓦葺き施設について、短く見積もっても250年以上の存続期

### 第Ⅲ章 調査の結果

間が想定できる。この間の瓦当文様の特徴をみれば、とくにⅡ～Ⅲ期において、大和あるいは平安京において主流となる文様をそのままには採用しない点を特筆することができるだろう。Ⅰ期のNMI型式にしても、周縁に圈線をもたず、大和の諸寺院よりもむしろ四天王寺や難波宮下層遺跡との関連性が注目できる。こうした文様変遷の特色については、上町台地上に展開する宮都やほかの寺院の動向とも併せ、第Ⅳ章において論じることとする。

註)

- (1) 細片資料がほとんどであるため、同型式とした資料が必ずしも同範品とは限らない。
- (2) 本報告書では当型式を重圈文と呼称する。その根拠については、以下の文献を参照されたい[八木久栄 1995：註1]。
- (3) 京都市埋蔵文化財研究所 網伸也氏にご教示頂いた。

## 第5節 自然科学的分析

### 1)はじめに

今回の分析調査は、平安時代後期の井戸 **SE2b01** から出土した種実などの大型植物遺体と昆虫遺体について、おのおの種類同定を行い、当時の古環境に関する情報を得ることが目的である。

### 2)試料

井戸 **SE2b01** の埋積物の堆積状況は、本章第3節(p.44-45、図44)にてすでに記述したとおりである。今回同定を行う大型植物遺体と昆虫遺体は、廃絶後の放置期に形成された③層から水洗篩別によって得られた、0.25mm以上のものである。大型植物遺体は約90個含まれており、これらすべてについて分類・同定を実施した。一方、昆虫遺体は種類判別に必要な部位が残っている39点を抽出し、それら全点について同定を行った(便宜的に試料1~39の番号を付す)。

### 3)分析方法

#### i) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出した。現生標本および原色日本植物種子写真図鑑[石川茂雄1994]、日本植物種子図鑑[中山至大ほか2000]との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を求めて表8に示した。分析後の種実遺体は、種類ごとに容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管した。

#### ii) 昆虫同定

試料から抽出した39点について、双眼実体顕微鏡やルーペを用いて種類同定を行った(表9)。同定に当っては、東京農業大学松本浩一氏の協力を得た。

### 4)結果

#### i) 種実同定

分析の結果、被子植物12分類群(イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ツユクサ、アサ、タデ属、ヒユ科、ナデシコ科、カタバミ属、イヌコウジュ属、ナス科、メロン類)、75個の種実を検出したほか、木の芽・植物のトゲ・昆虫を確認した(表8)。アサ、メロン類は、確実な栽培植物とされる。以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを記す。

#### イネ科(Gramineae)

果実を検出した。黄褐色、半挟卵体でやや偏平。長さ4mm、径2.5mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面には微細な網目模様が縦列する。

#### ホタルイ属(*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実を検出した。灰褐色、片凸レンズ状の広倒卵体。径2.3mm程度。果実頂部は尖る。背面はや

や高く正中線上に稜がある。基部から逆刺を持つヒゲ状の腕が伸びる。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

カヤツリグサ科(Cyperaceae)

果実を検出した。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡黒褐－黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径1.5～2.0mm程度。頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。

ツユクサ(Commelina communis L.) ツユクサ科ツユクサ属

種子を検出した。灰褐色で半横長楕円体。径3mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、背面と側面の表面は、大きな播鉢状の孔が散在する。他の面は円形の小孔が多数存在する。

アサ(Cannabis sativa L.) クワ科アサ属

種子の破片を検出した。灰褐色、いびつな広倒卵体でやや偏平。長さ4.2mm、幅4mm、厚さ2.5mm程度。縦方向に一周する稜に沿って半分に割れている。基部には淡褐色、径1mm程度の楕円形の臍点がある。種皮表面には葉脈状網目模様がある。

タデ属(Polygonum) タデ科

果実を検出した。形態上差異のある複数種を一括した。サナエタデ(Polygonum lapathifolium L.)に似る個体を確認した。黒褐色、広卵形で偏平な二面体。径2～3mm程度。頂部はやや尖る。果実表面は平滑で光沢があり、花被が残る。

ヒユ科(Amaranthaceae)

種子を検出した。黒色、円盤状で偏平、縁は稜状。径1.1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。

ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子を検出した。黒褐色、腎状円形でやや偏平。径0.9mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は

表8 種実遺体同定結果

| 分類群     | 部位 | 状態 | 個数 | 備考                             |
|---------|----|----|----|--------------------------------|
| イネ科     | 果実 | 完形 | 1  |                                |
| ホタルイ属   | 果実 | 完形 | 2  |                                |
| カヤツリグサ科 | 果実 | 完形 | 5  |                                |
| ツユクサ    | 種子 | 完形 | 1  |                                |
| アサ      | 種子 | 破片 | 4  | 栽培種                            |
| タデ属     | 果実 | 完形 | 10 |                                |
| ヒユ科     | 種子 | 完形 | 2  |                                |
| ナデシコ科   | 種子 | 完形 | 1  |                                |
| カタバミ属   | 種子 | 完形 | 3  |                                |
| イヌコウジュ属 | 果実 | 完形 | 2  |                                |
| ナス科     | 種子 | 完形 | 19 | 栽培種？                           |
| メロン類    | 種子 | 完形 | 25 | 栽培種                            |
|         |    |    |    | マクワ・シロウリ型：12個<br>モモルディカメロン型：9個 |
| 木の芽     |    |    | 1  |                                |
| 植物のトゲ   |    |    | 8  |                                |
| 昆虫      |    |    | 9  |                                |

薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取囲むように瘤－針状突起が同心円状に配列する。

カタバミ属(Oxalis) カタバミ科

種子を検出した。黒褐色、倒卵形で偏平。長さ1.5mm、幅1.1mm程度。基部はやや尖る。種皮は薄くて柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4～7列の肋骨状

横隆条が並ぶ。

イヌコウジュ属(*Mosla*) シソ科

果実を検出した。灰褐色、倒広卵体。径1.3mm程度。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

ナス科(Solanaceae)

種子を検出した。淡灰褐色、いびつな腎臓形で偏平。長さ3mm、幅3.7mm程度と大型であることから、栽培種に由来する可能性がある。基部のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く、表面には微細な星形状網目模様が臍を中心として同心円状に発達する。

メロン類(*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子を検出した。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。長さ7.0～8.9mm、幅3～4mm、厚さ1mm程度。[藤下典之1984]の基準による中粒のマクワ・シロウリ型(長さ6.1～8.0mm)が12個、大粒のモモルディカメロン型(長さ8.1mm以上)が9個確認された。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。

ii) 昆虫同定

同定結果を表9に示す。一部は保存状態等から細かな種類が同定できなかった遺体も存在する。分析した遺体のうち、種の段階まで同定できたものは、コブマルエンマコガネ・ツヤエンマコガネ・マルエンマコガネ・オオゴミムシ・ヤマトモンシデムシである。

表9 昆虫遺体同定結果

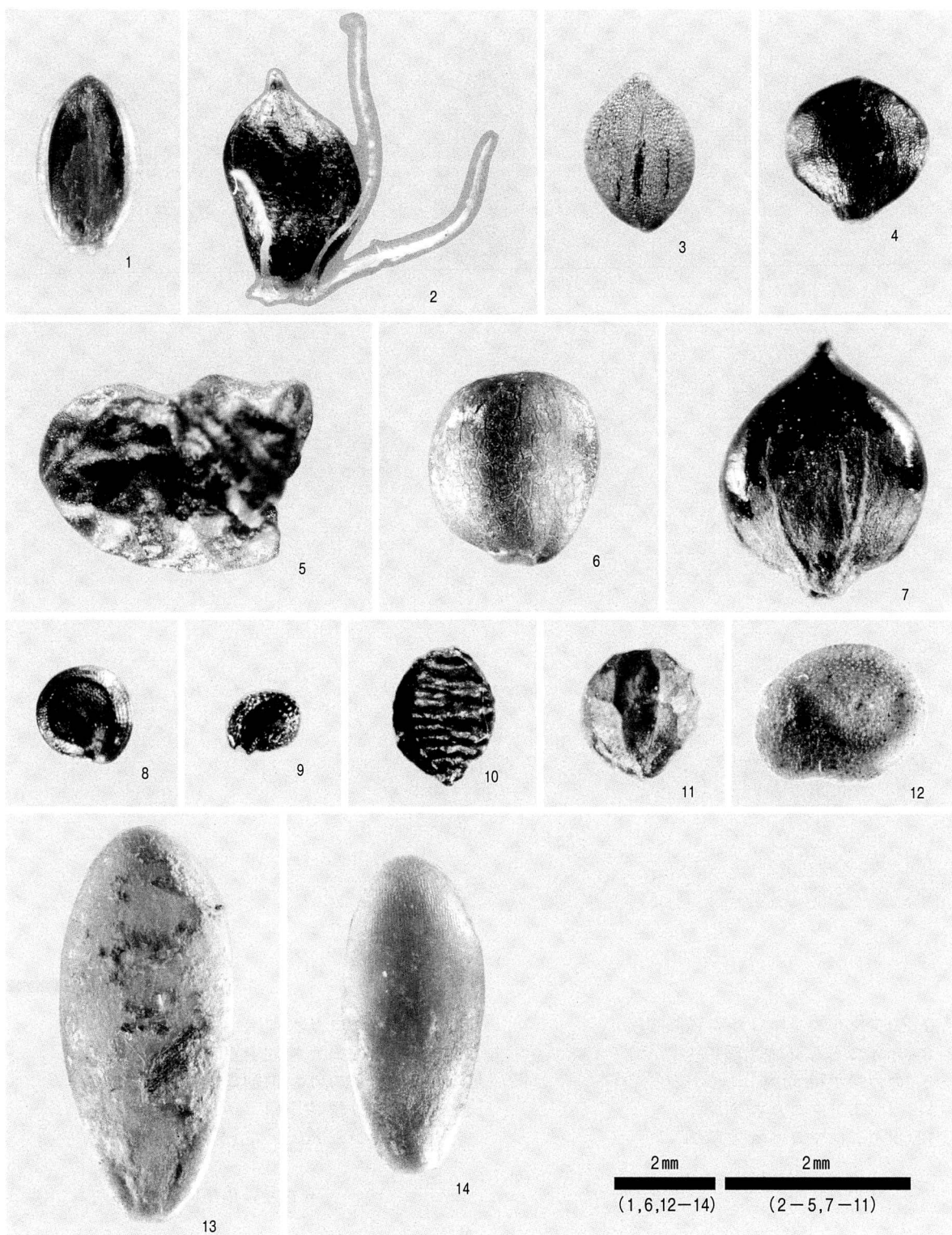
| 試料番号 | 種類         | 部位      | 備考      |
|------|------------|---------|---------|
| 1    | ゴミムシ類の一種   | 右上翅     |         |
| 2    | コブマルエンマコガネ | 前胸腹板    |         |
| 3    | オオゴミムシ     | 左上翅     |         |
| 4    | コブマルエンマコガネ | 前胸背板    | 2と同一個体? |
| 5    | ガガンボ科の一種   | 幼虫の一部   |         |
| 6    | コブマルエンマコガネ | 左上翅     | 2と同一個体? |
| 7    | ツヤエンマコガネ   | 前胸・前脚   |         |
| 8    | 不明         | 不明      |         |
| 9    | エンマコガネ属の一種 | 左上翅     |         |
| 10   | エンマコガネ属の一種 | 左上翅     |         |
| 11   | ツヤエンマコガネ   | 前胸・前脚   |         |
| 12   | ツヤエンマコガネ   | 左前脚     |         |
| 13   | ツヤエンマコガネ   | 前胸      |         |
| 14   | ツヤエンマコガネ   | 前胸      |         |
| 15   | ゾウムシ科の一種   | 剝節      |         |
| 16   | マルエンマコガネ   | 左上翅     |         |
| 17   | オオゴミムシ     | 右上翅先端部  |         |
| 18   | エンマコガネ属の一種 | 前胸腹板    |         |
| 19   | マルエンマコガネ   | 頭部      |         |
| 20   | エンマコガネ属の一種 | 左上翅     |         |
| 21   | エンマコガネ属の一種 | 前胸腹板    |         |
| 22   | エンマコガネ属の一種 | 前胸腹板    |         |
| 23   | エンマコガネ属の一種 | 前胸の一部   |         |
| 24   | ツヤエンマコガネ   | 前胸背板中央部 |         |
| 25   | エンマコガネ属の一種 | 前胸腹板    |         |
| 26   | エンマコガネ属の一種 | 前胸腹板    |         |
| 27   | マルエンマコガネ   | 前胸背板左半  |         |
| 28   | マルエンマコガネ   | 頭部      |         |
| 29   | ハナムグリ属の一種  | 左上翅     |         |
| 30   | エンマコガネ属の一種 | 頭部      |         |
| 31   | ツヤエンマコガネ   | 右上翅     |         |
| 32   | ヤマトモンシデムシ  | 左上翅先端部  |         |
| 33   | エンマコガネ属の一種 | 腹部腹板    |         |
| 34   | エンマコガネ属の一種 | 腿節      |         |
| 35   | エンマコガネ属の一種 | 基節      |         |
| 36   | コウチュウ目の一種  | 基節      |         |
| 37   | ツヤエンマコガネ   | 前胸背の一部  |         |
| 38   | マルエンマコガネ   | 左前脚     |         |
| 39   | エンマコガネ属の一種 | 中胸腹板    |         |

### 5) 考察

平安時代の井戸廃絶後に形成された井戸 SE2b01埋土③層から出土した大型植物遺体には、アサ・メロン類といった栽培のために渡来した植物[南木睦彦1991]の種実を確認した。アサは種子が食用や油料、繊維が衣料や縄用に利用される。メロン類は果実が食用されるが、中粒のマクワ・シロウリ型と大粒のモモルディカメロン型が確認されることから、複数の品種が利用されていた可能性がある。これらは何らかの経路で③層中に取込まれた、当時の生活残滓である可能性が高い。

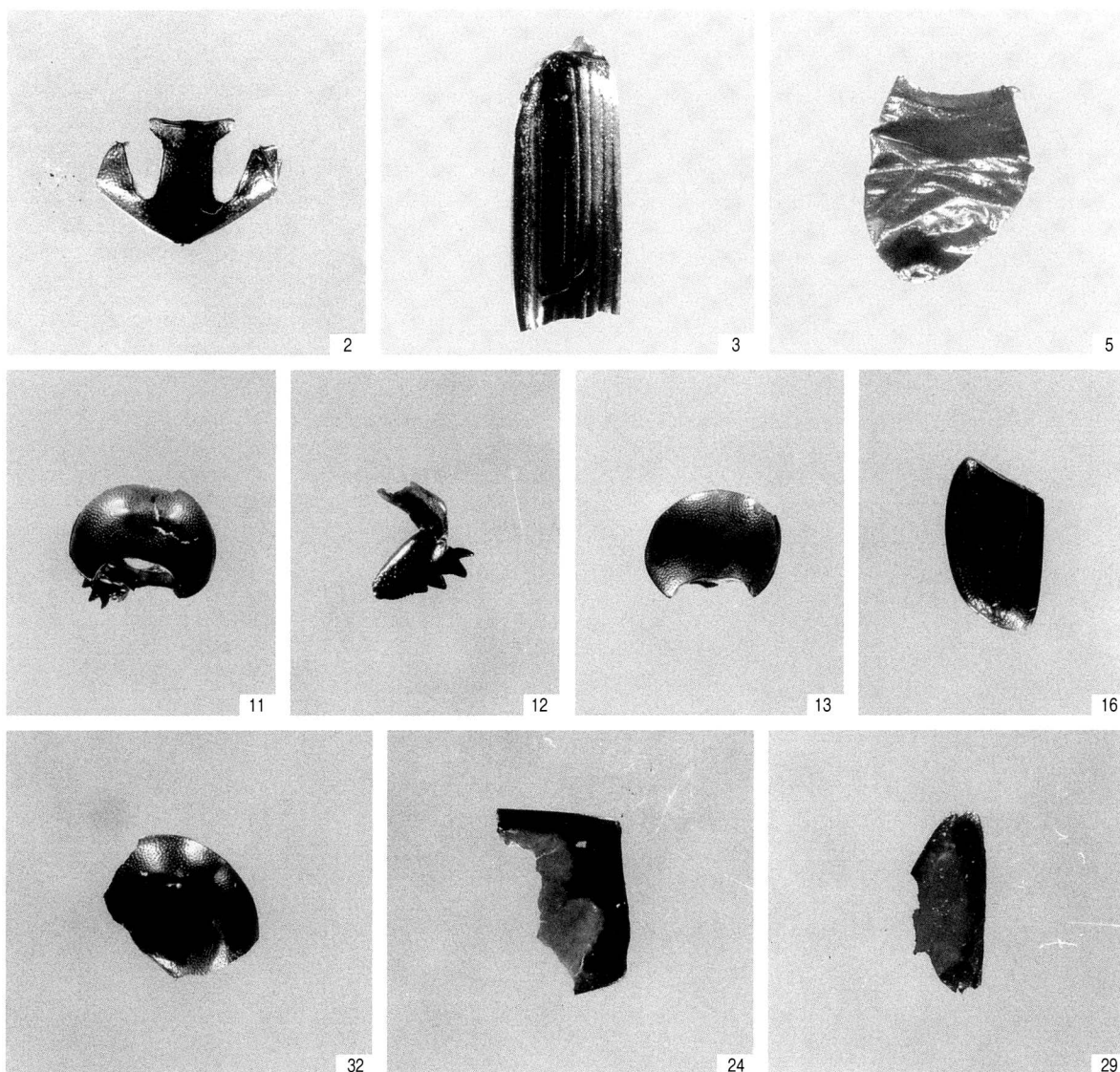
栽培種以外では、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ツユクサ、タデ属、ヒユ科、ナデシコ科、カタバミ属、イヌコウジュ属、ナス科などの草本植物を確認した。これらの草本植物は、明るく開けた場所に生育する人里植物に属する分類群を多く含むことから、調査区周辺域に形成されていた草本群落に由来すると考えられる。なお、イネ科、ヒユ科、ナス科などには、蔬菜として利用可能な種類が含まれることから[青葉高1991]、栽培もしくは山野からの採取により利用されていた可能性もある。このような草本植物主体の組成は、平安時代頃の調査地が集落域として開けていたとする発掘調査成果と同調的な結果といえる。

一方、昆虫遺体で種まで同定できたものは、ツヤエンマコガネ・マルエンマコガネ・コブマルエンマコガネのエンマムシ類と、ヤマトモンシデムシ・オオゴミムシである。このうち、出土数の大部分を占めるエンマムシ類は食糞性の昆虫である。また、ヤマトモンシデムシは腐敗動物質に集合する種であり、オオゴミムシは昆虫や小動物の死骸を餌とする種である。このように廃絶後の③層から出土した昆虫遺体は、動物遺体や糞便などの存在を示唆する組成である。先述のように種実類でもメロン類やアサといった生活残滓に由来する可能性が高い種実が確認されていることを併せて考えると、井戸廃絶後の③層形成期に井戸内が廃棄坑として利用されていた時期があったことが示唆される。遺構廃絶後に井戸を廃棄坑として利用する例は多く[久世康博2002]、今回もこれに類するものである可能性がある。



- |               |                         |
|---------------|-------------------------|
| 1. イネ科 果実     | 8. ヒユ科 種子               |
| 2. ホタルイ属 果実   | 9. ナデシコ科 種子             |
| 3. カヤツリグサ科 果実 | 10. カタバミ属 種子            |
| 4. カヤツリグサ科 果実 | 11. イヌコウジュ属 果実          |
| 5. ツユクサ 種子    | 12. ナス科 種子              |
| 6. アサ 種子      | 13. メロン類(モモルディカメロン型) 種子 |
| 7. タデ属 果実     | 14. メロン類(マクワ・シロウリ型) 種子  |

写真6 大型種実遺体



2. コブマルエンマコガネ 前胸腹板  
 3. オオゴミムシ 左上翅  
 5. ガガンボ科 幼虫  
 11. ツヤエンマコガネ 前胸  
 12. ツヤエンマコガネ 左前脚

13. ツヤエンマコガネ 前胸  
 16. マルエンマコガネ 左上翅  
 24. ツヤエンマコガネ 前胸背板中央部  
 29. ハナムグリ属 左上翅  
 32. ヤマトモンシデムシ 左上翅先端部

※番号は表9に対応

## 第Ⅳ章 「榎津寺」について

### 1) 発掘調査からの知見

発掘調査から得られた知見について、いま一度簡潔にまとめておく。まず、調査地の近辺で瓦が出土するのは、今回の調査地をほぼ中心として南北650m、東西500mほどの範囲である(図5)。近世に開削された現大和川以南、現在の堺市域では立会調査を含めて古代瓦の出土例はないという(註1)。これらの瓦は、その分布域が限定され、明確な焼損品を含まないことから、かつて存在した瓦葺きの施設に供給されたものであると考えられる。また、近隣で出土するのは大多数が古代の瓦であって、中世以降に降る瓦はきわめて少量である。

瓦葺き施設の存続期間は、おもに瓦当文様から、7世紀後葉～11世紀頃と推定できる。7世紀後葉段階で瓦を使用する建造物であることから、この瓦葺き施設は寺院であることが推定できる。以上の知見から、7世紀後葉から11世紀頃まで、今回の調査地付近に寺院が存在した可能性が高い。

### 2) 文献史料からの検討

次に、その寺院の様相について、文献史料からの検討を行いたい。今回の調査成果に係わる寺院についての記録は、いずれも近世に降るものである。以下にそれらの記述を概観する。

まず、元禄～正徳年間(1688～1716年)に成立したとみられる『住吉松葉大記』(以下、『大記』と略す)を見ると(註2)、その巻二十寺院部の榎津寺(註3)の項に、以下のまとまった記録を見ることができる(原文は漢文)。

榎津寺は今の遠里小野村の南に榎津谷の名有り。谷の北岸 大路より二・三町ばかりに寺の旧地あり。其の地 平地より高きこと三尺ばかり、上面一段に足らず。四方皆墾いて田畝と為す。(中略)榎津寺壮麗文華にして かつ広大、故に榎津の大寺と称す。後世毀て堺に引く、今方違の社の別当向泉寺というは是なり。(中略)中世 朴津寺の仏像を以て慈恩寺の境内に移し、僅かに寺を建て仏像を置く。(中略)礎趾尚ほ慈恩寺の内に存す。(以下略)

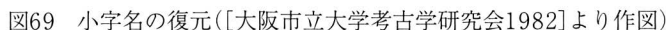
次に、序文に享保丁酉(1717年)と記される『界府 墨江紀略』が引く『朴津寺記』の記述を見ると(原文は漢文)、

遠里小野の南三町に、朴津大寺の旧跡有り。(中略)住吉社家等記曰く、朴津郷は乃ち住吉社務津守氏の所領なり。南朝長慶帝の世、社務国夏、朴津大寺を以て、慈恩寺開祖卓然立和尚に付す

また、寛政8～10(1796～1798)年刊行の『摂津名所圖會』(以下『図会』)には、

遠里小野の南、榎津谷、又榎津寺の旧跡に礎あり  
との記載が見える。

このうち榎津寺の所在地について、『郡誌』とほぼ同じ内容を伝える『墨江村誌』（以下『村誌』）、[大



阪市墨江教育会1929))によると、「現今堂跡」は摂津メリヤス株式会社大和川工場敷地であるといい、まさに今回の調査地に当る(図69)。以上のことから、榎津寺の所在地について、いずれも今回の調査地がその比定地とされていることがわかる。

問題となるのは、これらの記録に伝えられる榎津寺の年代である。『大記』ではその廃絶を「中世」と伝え、『郡誌』では「戦場の一部となりて」焼失したと記述する。両者とも具体的な年代については触れられていないが、ただ、『朴津寺記』からは「長慶帝の世」(1368～1383年)まで榎津寺が存続したことがうかがえ、『大阪府全志』も朴津寺と楠木正成の関係を伝える[井上正雄1922：pp.82－83]。したがって、文献史料から見る限り、榎津寺は南北朝期まで存続した可能性が高い。

したがって、発掘調査によって存在が想定された寺院は、近世の文献史料に伝承が伝えられる榎津寺に比定できるものと考ええる。問題となるのは、文献史料に見える年代と、発掘調査によって得られた知見との齟齬である。前者では榎津寺が南北朝期まで存続したことがうかがえるが、後者からは、この地に中世に降る寺院が存在したことを証明する資料を得ることができなかった。この齟齬がいかなる要因によるものか、今後の調査を通じての解明が期待される。

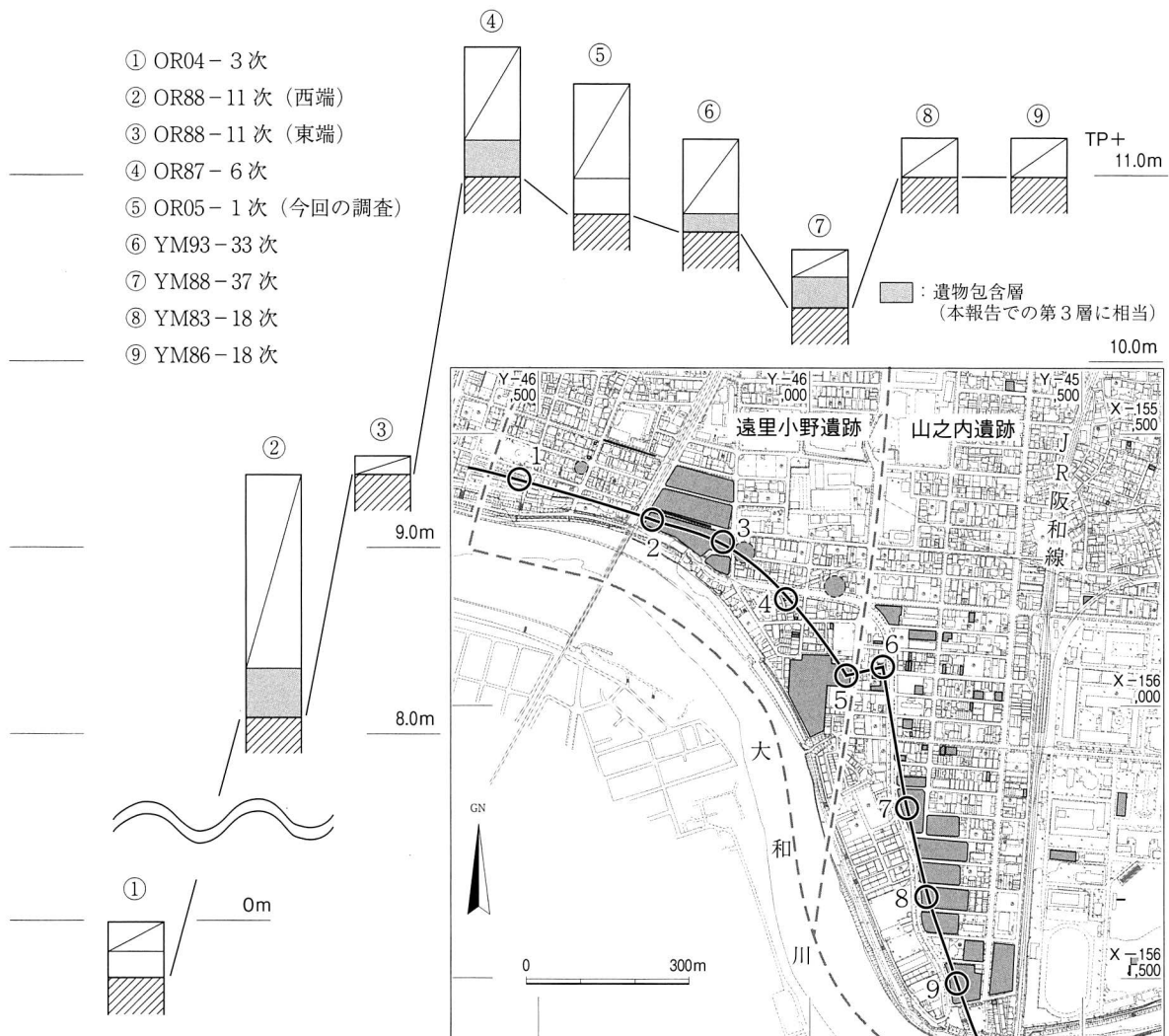


図70 発掘調査成果から見た調査地付近の地形

### 3) 榎津寺出土瓦の特色

非常に断片的な資料ではあるが、榎津寺から出土した瓦について、その特色を論じておきたい。

まず創建期と想定されるⅠ期(7世紀後葉)のうち単弁八弁軒丸瓦NMⅠ型式については、文様構成のみ見れば、いわゆる山田寺式軒丸瓦と同文ではある。しかしながら、素文縁であること、また弁中央に稜線を有さないこと、弁に輪郭線を表現しないことなど、文様が全体的に平坦・簡略であることが指摘でき、大和諸寺院に採用されたものと懸隔があることは明らかである。近隣で完全に一致する瓦当文様は知られていないが、素文縁への退化という点では、四天王寺NMⅡb型式(型式名については[網伸也1998]に拠る)や難波宮域内での出土例[大阪市文化財協会1981:報告番号3]に類例を求めることができる。また軒平瓦については、四天王寺Ⅱ期に見られる無顎あるいは直線顎上の三重弧文軒平瓦(NHⅡa2型式)、阿倍寺跡の立会調査で出土した段顎の三重弧文軒平瓦[宮本・佐藤1996]などが参考になる。

Ⅱ期については判然としないが、後期難波宮や平城宮・京で使用されたものとは異なる重圈文軒平瓦、および河内地域を中心として分布する重弁文軒丸瓦が採用されている点は注目できるだろう。

Ⅲ期についても出土例は少ないが、摂津国分寺跡出土瓦との関係は確実に指摘できる。

上町台地上を中心として展開した諸寺院で使用された瓦については、さまざまな系譜をもつ資料が混在する中で、難波宮・四天王寺との関係(あるいはその関係解明の必要性)が指摘されている[網伸也1992、宮本・佐藤1996、前田洋子1997など]。以上に見た榎津寺の瓦は、難波宮・四天王寺・摂津国分寺跡など上町台地上に展開した諸寺院との一定の関係が想定できる一方で、Ⅱ期に見られる重弁八弁蓮華文軒丸瓦や後期難波宮とは異なる重圈文軒平瓦の採用、そして軒丸瓦における特色ある接合技法など、独自の展開をも見せている。限られた資料からこれ以上の推論を重ねることは避けるが、今後とも調査資料を積み重ねることで、これらの寺院の動向をより具体的に論じることができるようになるだろう。

なお、寺院造営の背景にある古代氏族などについて、本報告では踏込むだけの資料をもたない。今後の検討課題としておきたい。

註)

- (1) 堺市立埋蔵文化財センター近藤康司氏の御教示による。
- (2) 『大記』については、①1934年に安在政義によって翻刻されたもの、②1984年に皇學館大學出版部より一部校訂のうえで復刻されたもの、③2000年から大阪市史編纂所によって3分冊として発行されているもの[大阪市史編纂所2000・2001・2004]とがある。これらは底本、編集方針などいくつかの差違があるが、本稿ではこのうち③を参照し、巻数等もこれに準じた。
- (3) 「えなつ」については、「榎津」・「朴津」の2種の表記があり、『開口神社文書』に見える記述など、中世にはもっぱら後者が当てられる。ただ本報告では、『大記』および残存した字名における表記に従い、引用などの場合を除き「榎津」を用いる。

## 第V章 まとめ

今回の調査では旧石器時代から中世に至る遺構・遺物を報告した。近隣の遺跡を含め、その各期における調査成果の意義をまとめ、本報告を締めくくる。

### 1) 古墳時代後期～飛鳥時代前半

該期には、山之内遺跡西地区から連続する居住域の一部を検出した。西調査区の北西端では古墳時代後期前半の居住域、東調査区では古墳時代後期後半を中心とする居住域を検出した。このうち東調査区で検出した居住域は建物などが方位を揃え、柵によって囲繞されている。このような特徴は、遠里小野遺跡と連続して展開する山之内遺跡西地区の居住域と同様である。

視点をやや上げてみたい。瓜破台地からその東側の沖積地にかけて立地する長原遺跡では、古墳時代中期に展開した東地区の居住域が洪水によって廃絶し、以後は主として遺跡西側や瓜破遺跡など、台地上を好んで占地する[高橋工1999]。山之内遺跡西地区において弥生時代中期末をもって断絶した居住域が、古墳時代後期に再び展開することの背景として、このような周辺における集落の動向と関連している可能性も高い。

また遺物についてみれば、漁具・羽口の出土が目に見える。このうち羽口については、性格は明らかにできなかったものの、灰・炭を面的に検出した土壌に伴っていた点に注意しておく必要がある。つとに指摘されてきたように、当地に展開する居住域ではこれらの遺物がなかば普遍的に出土し、生業のあり方を考える上で興味深い。また、滑石製品の未製品や、関東系の土器など、搬入された遺物が目につくことも特徴の一つである。

### 2) 飛鳥時代後半～平安時代前・中期

前章で論じたように、該期には調査地近辺に榎津寺が存在した可能性が高い。さて、この間の調査地周辺では、すでに指摘のあるところではあるが、柱穴が大型化・方形化し、建物のプランも正方位を指向するようになる。その原因として、寺院の建設を可能性の一つとして挙げられるだろう[平田1999]。ただ、調査地の北西300mで検出された飛鳥時代末葉～奈良時代前葉のものとされる四面庇付きの大型建物[大阪市文化財協会1999b]のプランは、北で大きく東に振るものである。とはいえ、榎津寺の建立、大型建物の建設といった該期の状況は、該期の状況は港湾「榎津」の重要性を如実に示しているといえよう。

### 3) 中世以降

さて、榎津寺が廃絶したのち、平安後期(12世紀)に調査地は再び集落として利用されるようにな

る。この集落では、東西に庇が付く掘立柱建物を中心として、総柱建物・区画溝などを検出し、また榎津寺廃絶後の瓦が瓦敷きとして再利用されている。該期には、平安時代以降低調であった住吉地域において、住吉大社旧境内遺跡・住吉行宮跡などを中心に再び遺構・遺物が多く認められるようになる。莊嚴浄土寺が建立されるのも、この時期である。この時期の住吉地域は、平安時代以降に活発となった熊野参詣を背景として、遺跡の形成が熊野街道沿いに南北方向を指向することが指摘されている[村元健一2004b]。今回の調査で検出した集落も、近世熊野街道の東側に営まれたものであり、こうした動向の中で捉えられよう。ただし、調査地内で明確に13世紀まで降る遺物を出土する遺構はなく、この集落は比較的短期間で廃絶したようである。

なお、該期の井戸SE2b01の埋土について行った分析では、生活残滓の可能性が高い種実類や、動物遺体や糞便の存在を示唆する昆虫遺体を検出した。OR88-11次調査で検出された井戸SE02（8世紀後葉頃に廃絶）では、粃殻・マクワウリの仲間・ヒョウタンなど、やはり生活残滓と考えられる種実類を検出している[大阪市文化財協会1999b]。今後、周辺における分析成果を蓄積することで、より豊かに当時の環境や食生活のあり方を復元することが可能になるだろう。

その後、15～16世紀には再び遺構が見られるようになる。なお、前章で見たように、調査地周辺には「榎津千軒」と称された中世集落の存在が想定され、今回検出した遺構群はその一画を占める可能性がある。類例が少ない赤絵の存在などは、隆盛を誇った中世港湾集落の断片を今に伝えるものかも知れない。

中世後期に展開した集落が廃絶したのち、調査区一帯には耕作地が拡がり、農村としての風景は昭和に至り周辺が急激に開発されるまで継続することとなる。

## 引用・参考文献

- 青葉高1991、『野菜の日本史』八坂書房。
- 網伸也1992、「後期難波宮と古代寺院」：『古代』第93号 早稲田大学考古学会、pp.101-127。
- 1998、「四天王寺出土瓦の編年的考察」：『堅田直先生古希記念論文集』真陽社、pp.535-551。
- 安間拓巳1995、「古代の鍛冶炉－その形態および鍛冶工程との関連について－」：『考古学研究』第42巻第2号 考古学研究会、pp.88-102。
- 池崎譲二2001、「博多駅・築港線1次調査51号土壌・4号石組」：『季刊考古学』第75号 雄山閣、pp.66-67。
- 石井信一1938、「摂津国分寺」：角田文衛編『国分寺の研究』上巻 考古学研究会、pp.465-469。
- 石川茂雄1994、『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会。
- 石田茂作1947、「布目瓦の時代判定」：『考古学雑誌』第34巻第10号 日本考古学協会、pp.7-13。
- 伊藤純2004、「『界府墨江紀略』所収 榎津寺記」：大阪市教育委員会『大阪の歴史と文化財』第13号、pp.25-27。
- 井上正雄1922、『大阪府全志』 清文堂出版。
- 上田睦2003、「丹比廃寺式軒瓦と丹治比野の開発－出土瓦からみた河内の古代寺院と氏族(四)－」：『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』下巻 関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会、pp.833-858。
- 上原真人1994、「前期の瓦」：古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、pp.625-640。
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1984a、「山之内遺跡(YM82-30)発掘調査略報」：『昭和57年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.81-84。
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1984b、「山之内遺跡(YM82-31)発掘調査略報」：『昭和57年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.85-90。
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990、「萬木邸新築工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR88-18)略報」：『昭和63年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.241-245。
- 大阪市史編纂委員会1988、『新修大阪市史』第1巻。
- 大阪市史編纂所2000、『住吉松葉大記』上(大阪市史史料第55輯) 大阪市史料調査会。
- 2001、『住吉松葉大記』中(大阪市史史料第58輯) 大阪市史料調査会。
- 2004、『住吉松葉大記』下(大阪市史史料第63輯) 大阪市史料調査会。
- 大阪市墨江教育会1929、『墨江村誌』。
- 大阪市文化財協会1981、「第85次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報』、pp.81-84。
- 1983、『若野氏による共同住宅建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM83-41)略報』。
- 1985、『府営杉本町団地内のガス管新設に伴う山ノ内遺跡の工事立会調査(YM85-40)略報』。
- 1996、『森の宮遺跡』Ⅱ。
- 1998a、『山之内遺跡発掘調査報告』。
- 1998b、『南住吉遺跡発掘調査報告』。
- 1999a、『山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ。
- 1999b、「付篇 遠里小野遺跡」：『山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-146。
- 1999c、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ。

- 2000、「石器器種とその分布」：『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.150-179.
- 2002、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅱ.
- 2004a、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅲ.
- 2004b、『荻田4丁目所在遺跡発掘調査報告』.
- 2005、『大阪市立大学構内における山之内遺跡発掘調査(YM05-2)報告書』
- 2006、『荻田4丁目所在遺跡(KL06-1)現地見学会資料』.
- 大阪市立大学考古学研究会1982、『史峯』第6号.
- 大阪市立博物館1987、『大阪市立博物館報』No.26.
- 大阪府東成郡役所1922、「墨江村」：『東成郡誌』、pp.1544-1598.
- 大脇潔1991、「丸瓦の製作技術」：『研究論集』Ⅸ(奈良国立文化財研究所学報 第49冊) 奈良国立文化財研究所、pp.1-56.
- 大脇正一1932、「疏瓦の分布上より推定したる難波宮址」：『歴史と地理』第29巻第4号 史学地理学同致会、pp.35-42.
- 小倉徹也2002、「周辺遺跡との層序対比」：大阪市文化財協会編『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.21-24.
- 尾上実1983、「南河内の瓦器碗」：古代を考える会編『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』 藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会、pp.689-705.
- 梶山彦太郎1986、「少林寺町西遺跡の貝層」：『堺環濠都市遺跡発掘調査報告』、堺市文化財調査報告第30集、pp.1-15.
- 久世康博2002、「井戸検出に伴う土坑の検討」：『財団法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第8号、pp.155-167.
- 黒田慶一1989、「橘邸建替工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR87-6)」：『昭和62年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.159-165.
- 1995、「北村邸建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM93-33)略報」：『平成5年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.87-95.
- 2004、「摂津国分寺の軒瓦覚書」：『大阪文化財研究』第26号 大阪府文化財センター、pp.33-41.
- 建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』.
- 古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』.
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社.
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114.
- 1996、「中世後期の陶磁器・土器について」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡』、pp.81-92.
- 佐原眞1972、「平瓦桶巻作り」：『考古学雑誌』第58巻第2号、pp.30-64.
- 清水和明1999、「土鍾と蛸壺」：大阪市文化財協会編『山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.131-137.
- 鋤柄俊夫1989、「大阪府南部の瓦質土器生産について(1)」：大阪文化財センター編『大阪文化財論集』、pp.427-444.
- 瀬川芳則1959、「住吉区の上代遺跡」：『社会科と教育』研究紀要第1集 大阪市立中学校教育研究会社会部、pp.1-8.
- 積山洋1982、「古環境の復元」：『史峯』第6号、大阪市立大学考古学研究会、pp.49-71.
- 古典籍刊行会1975、『摂津名所図會』.
- 高野源治1907、『大阪府東成郡墨江村全図』.
- 高橋工1993、「久保田邸建設に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR92-1)略報」：『平成4年度 大阪市内埋蔵文化財包

- 蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.167-170.
- 高橋工1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-106.
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』角川書店.
- 張福康1985、「中国伝統低温色釉和釉上彩」：『中国古代陶瓷科学技術成就』上海科学技術出版社、pp.333-348.
- 趙哲濟1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44.
- 辻美紀2005、「遠里小野遺跡発掘調査(OR04-2)報告書」：『平成16年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.55-58.
- 寺井誠1997、「沢井氏による建設工事に伴う発掘調査(YM95-8)略報」：『平成7年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.181-193.
- 續伸一郎1995、「中世後期の貿易陶磁器」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.485-501.
- 富田林市教育委員会2003、『新堂廃寺・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000、『日本植物種子図鑑』東北大学出版会、p.642.
- 奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ.
- 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良国立文化財研究所.
- 奈良文化財研究所2002、『山田寺発掘調査報告』(奈良文化財研究所学報).
- 西畑佳恵1991、「福田寛治・義明氏による建設工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR90-13)略報」：『平成2年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.154-159.
- 原田正三・佐原眞1958、「瓦類」：『河内船橋遺跡出土遺物の研究』(大阪府文化財調査報告書 第8輯)大阪府教育委員会、pp.36-46.
- 藤岡謙二郎1942、「大阪市住吉区遠里小野町弥生式遺跡」：『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第12輯 大阪府、pp.67-80.
- 平井和2005a、「遠里小野遺跡試掘調査(OR04-3)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』2002・03・04 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.263-268.
- 2005b、「遠里小野遺跡試掘調査(OR04-4)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』2002・03・04 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.269-274.
- 平田洋司1991、「嶋田邸新築工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査(OR90-4)略報」：『平成2年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.147-153.
- 1999、「調査成果のまとめ」：大阪市文化財協会編『山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.71-78.
- 藤下典之1984、「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」：古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学的研究』同朋舎、pp.638-654.
- 前田長三郎1930、「遠里小野石器時代遺跡に就いて」：『考古学雑誌』第20巻第9号、p.52.
- 前田洋子1983、「大阪上町台地検出の屋瓦資料-飛鳥・奈良時代前期(白鳳期)の屋瓦とそれらを検出する遺跡」：『摂河泉文化資料』第31号 摂河泉文庫、pp.1-22.
- 1997、「都城(難波宮)と古代寺院」：『摂河泉の古代寺院とその周辺』(第1回摂河泉古代寺院フォーラム資料集) 摂河泉文庫、pp.73-89.
- 三浦圭一1988、「南北朝内乱の幕開き」：大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第2巻、pp.341-376.
- 南木睦彦1991、「栽培植物」：石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究』4 生産と流通Ⅰ、雄

山閣、pp.165-174.

宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川旭1998、「大阪東南部地域の地質」：『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』地質調査所.

宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡』、pp.93-119.

村元健一2004a、「KL02-1次調査の中世土壙と鋳物師について」：大阪市文化財協会編『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.45-58.

2004b、「莊嚴浄土寺の歴史と周辺遺跡の消長」：大阪市文化財協会編『莊嚴浄土寺境内遺跡発掘調査報告』pp.75-96.

森島康雄1992、「畿内産瓦器碗の併行関係と年代」：『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会、pp.113-127.

八木久栄1995、「後期難波宮大極殿院の屋瓦」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十、pp.175-184.

安村俊史1997、「柏原市域出土平瓦の叩き目について」：『摂河泉古代寺院論叢』第1集 摂河泉古代寺院研究会、pp.1-14.

山崎信二2003、「大和における平安時代の瓦生産(再論)」：『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、pp.179-246.

山本信夫1995、「中世前期の貿易陶磁器」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.485-501.

## あ　と　が　き

ここに遠里小野遺跡の発掘調査報告書を上梓することができた。本遺跡単独の報告書としては初の刊行となる。

調査以前から注目されていた榎津寺に係わる成果もさることながら、古墳時代の集落や、寺院廃絶後に展開する中世集落のあり方など、これに前後する時期の成果がもたらした知見も多大である。遠里小野遺跡、そして東に接する山之内遺跡における既往の成果と併せ、この地域が大阪の歴史を復元する上で重要な役割をもつことを再確認する結果になったといえよう。

調査の結果を公表するに当たり、本報告書の刊行がひとつの区切りであることは確かである。しかしながら、ここで得られた成果を研究資料として活用し、また広く一般に活用されるよう、今後とも努力を惜しまない所存である。

(藤田幸夫)



# 索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

## 〈遺構・遺物に関する用語〉

- あ 赤絵…………… 51, 52, 88
- 飛鳥時代 …… 6, 7, 10, 15, 21, 31, 36, 38, 51, 56, 87
- い イイダコ壺…………… 4, 5, 13, 40
- 鋳型…………… 54
- 井戸 …… 8, 10, 38, 39, 44, 49, 51, 54, 56, 77, 80
- お 落込み…………… 10, 15, 25, 30, 31, 33, 34
- か 瓦器…………… 40, 43, 44~46, 48, 49
- 瓦質土器 …… 12, 51, 53
- 滑石…………… 6, 35, 87
- 唐草文…………… 52, 65, 73, 75
- 瓦敷き …… 2, 10, 38~40, 48, 53, 54, 56, 88
- 瓦溜まり…………… 53, 54
- 関東系 …… 7, 87
- き 旧石器時代 …… 6, 10, 87
- 漁具…………… 4, 5, 13, 87
- 近世 …… 9, 83, 85
- 金属加工 …… 31, 36, 48
- け 蛍光X線 …… 2, 21, 31, 52
- こ 格子目タタキ…………… 69
- 古代…………… 1, 2, 5, 10, 13, 38, 39, 51~53, 56, 83
- 古墳時代 …… 1, 6, 10, 15, 21, 25, 31, 36, 56, 87
- さ 柵…………… 8, 15, 27, 30, 36, 87
- し 重圏文…………… 64, 75, 76, 86
- 重弧文…………… 61, 63, 64, 73, 86
- 重弁蓮華文…………… 59
- 縄文時代…………… 6
- す 須恵器…………… 12, 13, 17, 18, 20, 21, 24, 25, 30, 31, 33~36, 44~46, 48, 49, 51~53
- スラグ…………… 6, 24, 36, 48, 54
- せ 石鍾…………… 34, 35
- 石鏃…………… 6
- 接合技法…………… 59, 60, 61, 86
- そ 総柱建物…………… 27, 40, 43, 48, 88
- た 竖穴建物…………… 10, 15, 17, 18, 20, 36
- 段丘構成層…………… 9, 10, 44
- 単弁九弁蓮華文…………… 59
- 単弁八弁蓮華文…………… 56, 73
- ち 中国製白磁…………… 12, 49
- 中世…………… 8~10, 38, 54, 56, 83, 85~88
- 鋳造…………… 51, 54
- と 砥石…………… 17, 44
- 土壙…………… 10, 15, 17, 20, 21, 22, 24, 25, 30, 31, 36, 38, 39, 44, 46, 48, 51, 52, 54, 56, 87
- 土鍾…………… 4, 5, 13, 40
- な ナイフ形石器…………… 6, 12
- 奈良時代…………… 8, 10, 13, 40, 87
- の 野壺…………… 9
- は 灰・炭…………… 20, 21, 31, 87
- 羽口…………… 6, 30, 31, 36, 44, 48, 54, 87
- 土師器…………… 17, 20, 24, 31, 34, 40, 43, 44~46, 48, 51~53
- 埴輪…………… 6
- ひ 庇…………… 40, 54, 87, 88
- 備前焼…………… 51, 52
- へ 平安時代…………… 7, 8, 38, 39, 53, 56, 75, 77, 80, 87, 88
- ほ 掘立柱建物…………… 8, 10, 15, 18, 26, 27, 36, 38, 40, 43, 44, 54, 88
- み 溝…………… 10, 15, 17~20, 24, 25, 31, 36, 38, 40, 47, 48, 52, 53
- む 室町時代…………… 1, 25, 38, 39, 47, 48, 49, 53, 56
- や 弥生時代…………… 1, 5, 6, 87
- ゆ 床束…………… 27
- よ 窯壁…………… 13
- り 緑色片岩…………… 34, 35
- ろ 炉壁…………… 51, 54
- わ 椀形滓…………… 17, 36

〈地名・遺跡名など〉

う 上町台地…………… 3, 11, 75, 76, 86  
え 榎津…………… 4, 83, 84, 86, 87  
榎津寺…………… 83～ 88  
榎津廃寺…………… 8, 54  
お 大阪湾…………… 4  
遠里小野遺跡…………… 1, 3, 5, 6, 8, 36, 87  
し 莊厳浄土寺境内遺跡…… 3

す 住吉大社旧境内遺跡…… 3, 88  
つ 津守廃寺…………… 3  
て 帝塚山古墳…………… 3  
み 南住吉遺跡…………… 3  
や 大和川…………… 1, 3, 83, 84  
山之内遺跡…………… 3, 5, 6, 36, 54, 87

**Archaeological Reports  
of  
Oriono Site in Osaka, Japan**

**Volume I**

A Report of Excavations  
Prior to the Reconstruction of  
the Municipal Apartmenthouse

October 2006

Osaka City Cultural Properties Association

## Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA: Palisade or Fence

SB: Building

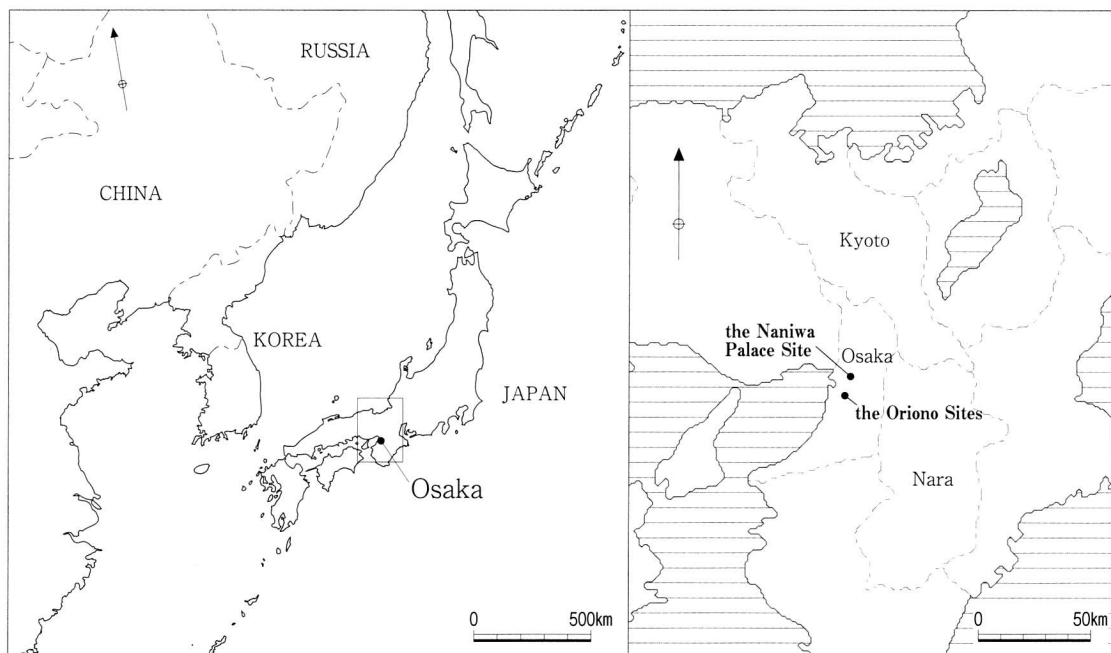
SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SP: Pit or Posthole

SX: Other features



# CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

|   |    |
|---|----|
| Chapter I Background and Progress of Reserch .....            | 1  |
| 1 ) Background of Reserch .....                               | 1  |
| 2 ) Progress of Reserch .....                                 | 1  |
| 3 ) Report Making .....                                       | 2  |
| Chapter II Site Location and Surroundings .....               | 3  |
| S. 1 Geographical Background .....                            | 3  |
| S. 2 Historical Background and Preceding Investigations ..... | 5  |
| Chapter III Investigation Results .....                       | 9  |
| S. 1 Stratigraphy and Remains .....                           | 9  |
| 1 ) Stratigraphy .....  | 9  |
| 2 ) Remains of Each Stratum .....                             | 12 |
| S. 2 Features and Remains of the Kofun to Asuka Periods ..... | 15 |
| 1 ) Outlines .....  | 15 |
| 2 ) Features and Remains of the Western Half .....            | 15 |
| 3 ) Features and Remains of the Eastern Half .....            | 26 |
| 4 ) Conclusion .....  | 36 |
| S. 3 Features and Remains of the Medieval Periods .....       | 38 |
| 1 ) Outlines .....  | 38 |
| 2 ) Features and Remains of the Later Heian Period .....      | 39 |
| 3 ) Features and Remains of the Muromachi Period .....        | 49 |
| 4 ) Conclusion .....  | 53 |
| S. 4 Roof tiles and Tiles .....                               | 56 |
| 1 ) Outlines .....  | 56 |
| 2 ) Types of Roof tiles .....                                 | 56 |
| 3 ) Conclusion .....  | 71 |
| S. 5 Natural scientific analysis .....                        | 77 |
| 1 ) Introduction .....  | 77 |
| 2 ) Samples .....   | 77 |
| 3 ) Methods of analysis .....                                 | 77 |
| 4 ) Results .....   | 77 |
| 5 ) Consideration .....                                       | 80 |
| Chapter IV Concerning "Enatsu-dera" temple .....              | 83 |
| 1 ) Knowledge from Excavation .....                           | 83 |
| 2 ) Examination from Historical records .....                 | 83 |
| 3 ) Features of Enatsu-dera Roof tiles .....                  | 86 |

|   |    |
|---|----|
| Chapter V Report Conclusion .....                             | 87 |
| 1 ) The Later Kofun Period to Former Asuka Period .....       | 87 |
| 2 ) The Later Asuka Period to Early-Middle Heian Period ..... | 87 |
| 3 ) After the Medieval Period.....                            | 87 |

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| References and Bibliography ..... | 89 |
|-----------------------------------|----|

Postscript and Index

English Contents

## 報 告 書 抄 録

|                |   |                 |   |                       |                    |                           |        |              |
|----------------|---|-----------------|---|-----------------------|--------------------|---------------------------|--------|--------------|
| ふりがな           | おりおのいせきはつくつちょうさほうこく1  |                 |   |                       |                    |                           |        |              |
| 書名             | 遠里小野遺跡発掘調査報告Ⅰ   |                 |   |                       |                    |                           |        |              |
| 編著者名           | 市川 創・James Scott Lyons  |                 |   |                       |                    |                           |        |              |
| 編集機関           | 財団法人 大阪市文化財協会   |                 |   |                       |                    |                           |        |              |
| 所在地            | 〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833  |                 |   |                       |                    |                           |        |              |
| 発行年月日          | 西暦 2006年10月31日  |                 |   |                       |                    |                           |        |              |
| ふりがな<br>所収遺跡名  | ふりがな<br>所在地   | コード<br>市町村 遺跡番号 |   | 北緯                    | 東経                 | 調査期間                      | 調査面積   | 調査原因         |
| おりおの<br>遠里小野遺跡 | おおさかしすみよしく<br>大阪市住吉区<br>おりおの<br>遠里小野3丁目   | 27120           | - | 34°<br>35′<br>49″     | 135°<br>29′<br>46″ | 20060202<br>～<br>20060519 | 1,142㎡ | 杉本町団地の<br>建替 |
| 所収遺跡名          | 種別  | 主な時代            |   | 主な遺構                  |                    | 主な遺物                      |        |              |
| 遠里小野遺跡         | 集落  | 古墳時代            |   | 竪穴建物・掘立柱建物・<br>土壇・溝   |                    | 土師器・須恵器・羽口・漁具             |        |              |
|                |   | 古代              |   |                       |                    | 瓦                         |        |              |
|                |   | 平安時代            |   | 瓦敷き・掘立柱建物・<br>井戸・土壇・溝 |                    | 土師器・須恵器・瓦器                |        |              |
|                |   | 室町時代            |   | 井戸・土壇・溝               |                    | 瓦質土器・陶器・中国産磁器             |        |              |
| 要 約            | <p>本書は、遠里小野遺跡において行われた発掘調査の成果を報告するものである。古墳時代後期から室町時代までの遺構・遺物を掲載するが、中でも古代の瓦についての成果が目される。</p> <p>古墳時代後期から飛鳥時代前半にかけては、竪穴建物・掘立柱建物・土壇・溝などを報告する。方位を揃え計画的に配置される居住域のあり方は、山之内遺跡西地区と共通するものであり、両遺跡を一体のものとして評価すべきことを再確認することとなった。</p> <p>平安時代後期については、瓦敷き・掘立柱建物・井戸・土壇などを報告する。このうち瓦敷きには、7世紀後葉～11世紀頃の瓦が再利用されていた。調査地は江戸時代の文献史料に見える「榎津寺」の比定地とされていることから、文献史料と考古資料の対比による考証を行っている。</p> <p>平安時代後期の集落が廃絶したのち、室町時代には再び遺構が形成される。該期の遺構からは、類例の少ない中国明代の赤絵などが出土しており、熊野街道・大阪湾にほど近い集落の繁栄の一端をうかがわせる。</p> |                 |   |                       |                    |                           |        |              |



# 原 色 図 版







HA 1 類



154

HA 2 類



155

HA 3 類



156

HB 1 類



164

HB 3 類



168

MC 類



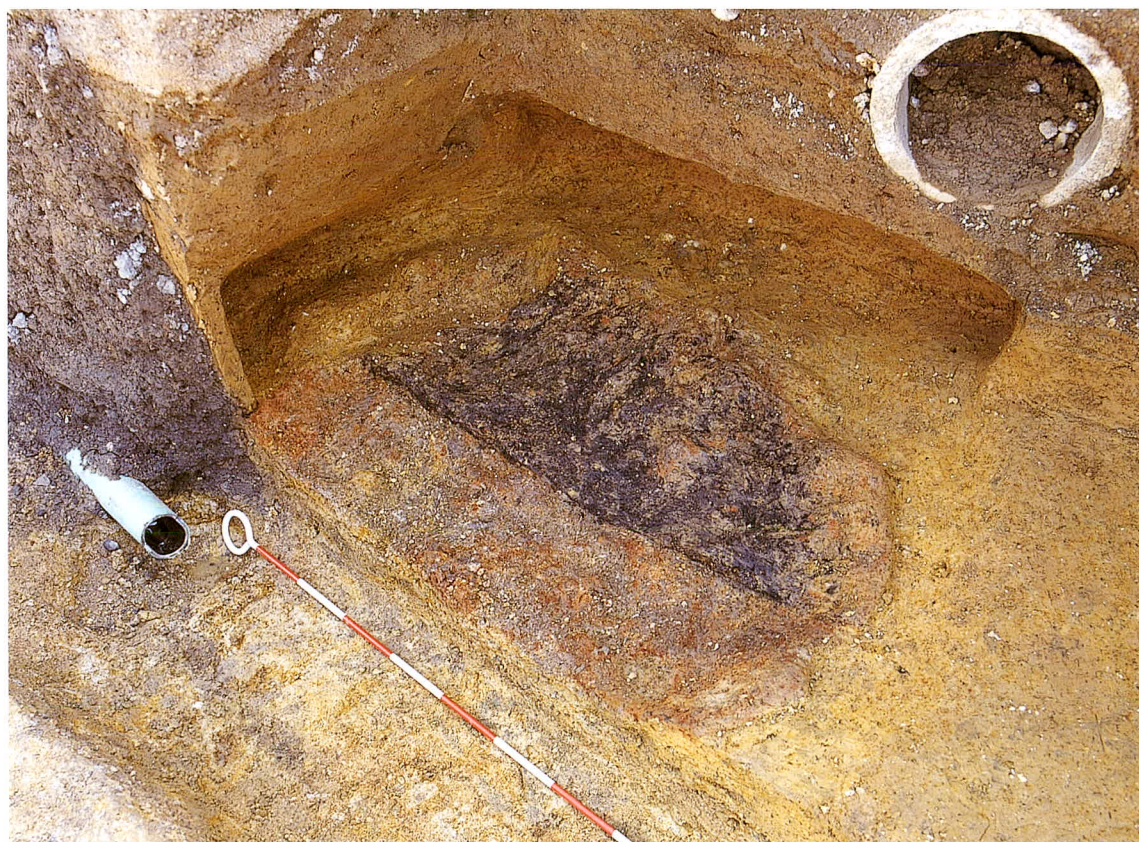
153

縮尺はすべて 1/3





SK301/ 灰・炭層検出状況(北東から)



SK311/ 灰・炭層を半裁した状況(北西から)





竪穴建物SB301(南東から)



77



91



94



84



93



16

中世の輸入陶磁器



# 図 版



西調査区西壁  
(南東から)



東Ⅲ区南壁  
(北から)



西調査区深掘り断面  
(南東から)





西調査区(西から)



東Ⅰ区(南西から)

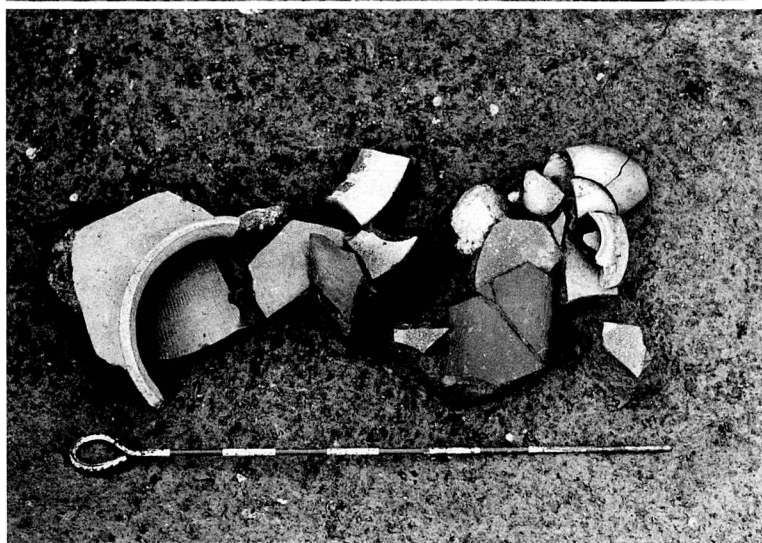
東Ⅱ・Ⅲ区  
第4層上面検出状況  
(東から)



溝SD306遺物出土状況  
(南西から)



溝SD307遺物出土状況  
(南から)





溝SD2b01  
(西北西から)

瓦敷きSX2b01検出状況(西調査区部分/南から)

庇付き建物SB2b01  
(南から)



総柱建物SB2b04  
(北から)



井戸SE2b01断面  
(北から)





井戸SE2a01断面  
(南から)



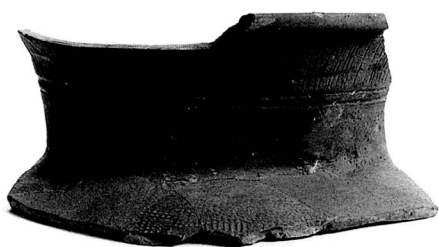
土壇SK2a02断面  
(北から)



瓦溜まりSX2a01検出状況  
(南から)



30



44



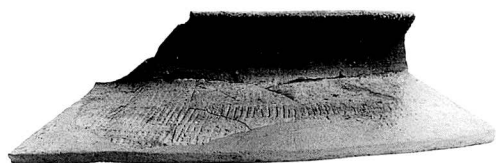
31



43



36



51



52



50



37





53



62



54



64



57



68



59



58



81



89



82



85



78



79



80



97

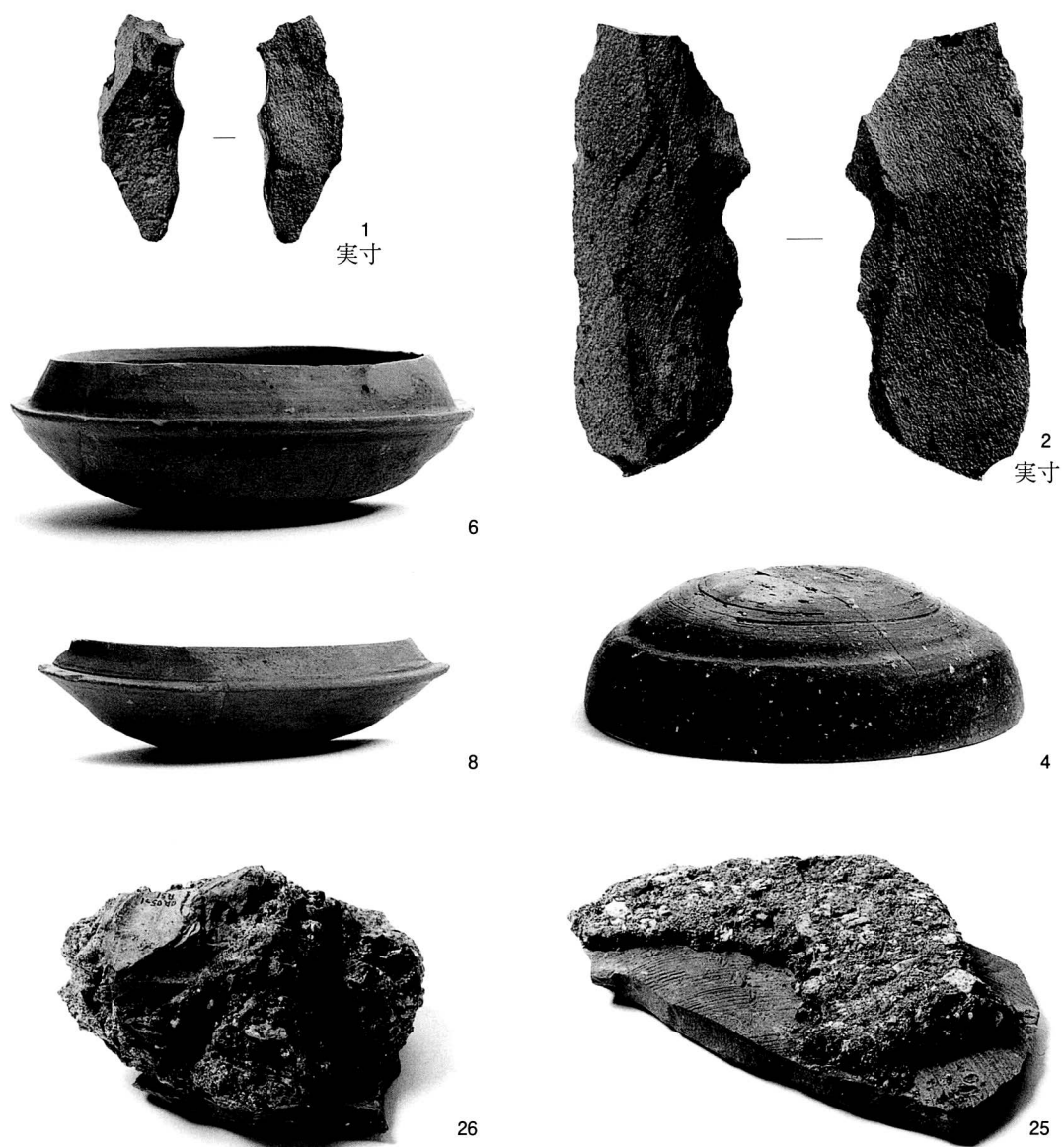


98

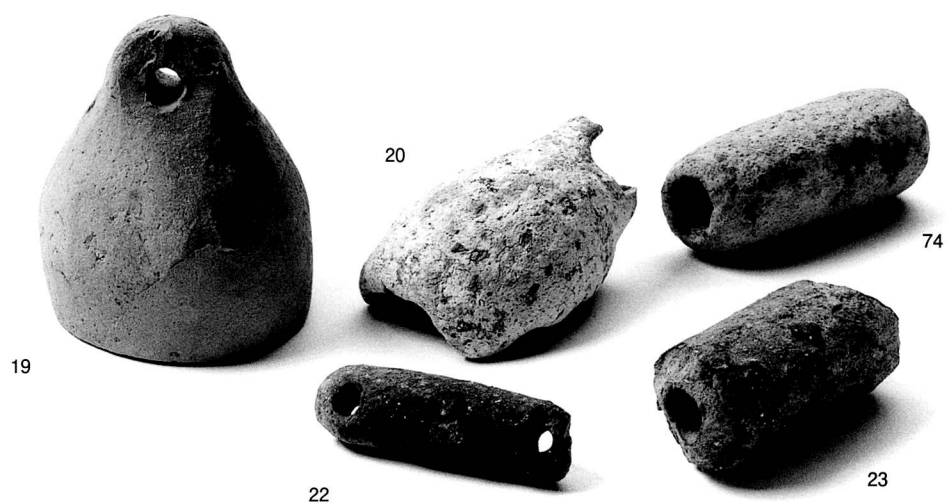


100

SE2b01(78~80)、SK2b01(81・82)、SD2b01(85)、  
SD2b02(89)、SE2a01(97)、SD2a03(98・100)



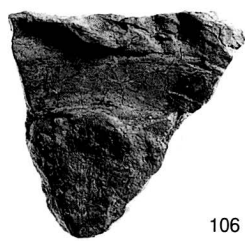
第3層(1・2・4・6・8・25)、第2層(26)



第3層(22)、第2層(19・20・23)、瓦敷きSX2b01(74)



102



106



101

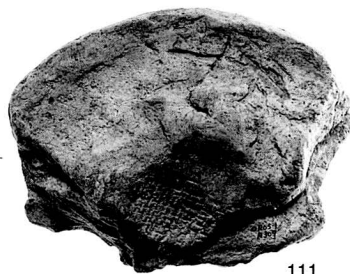


107



108

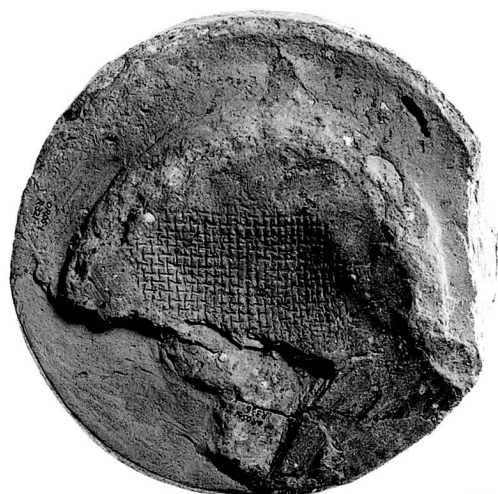
110・111は縮尺3/5、  
それ以外のものは縮尺1/2



111



109



110

NM I A型式(101・102)、NM I B型式(106・107)、  
NM II型式(108・109)、NM III型式(110・111)



115  
(大阪歴史博物館所蔵品)



116



117

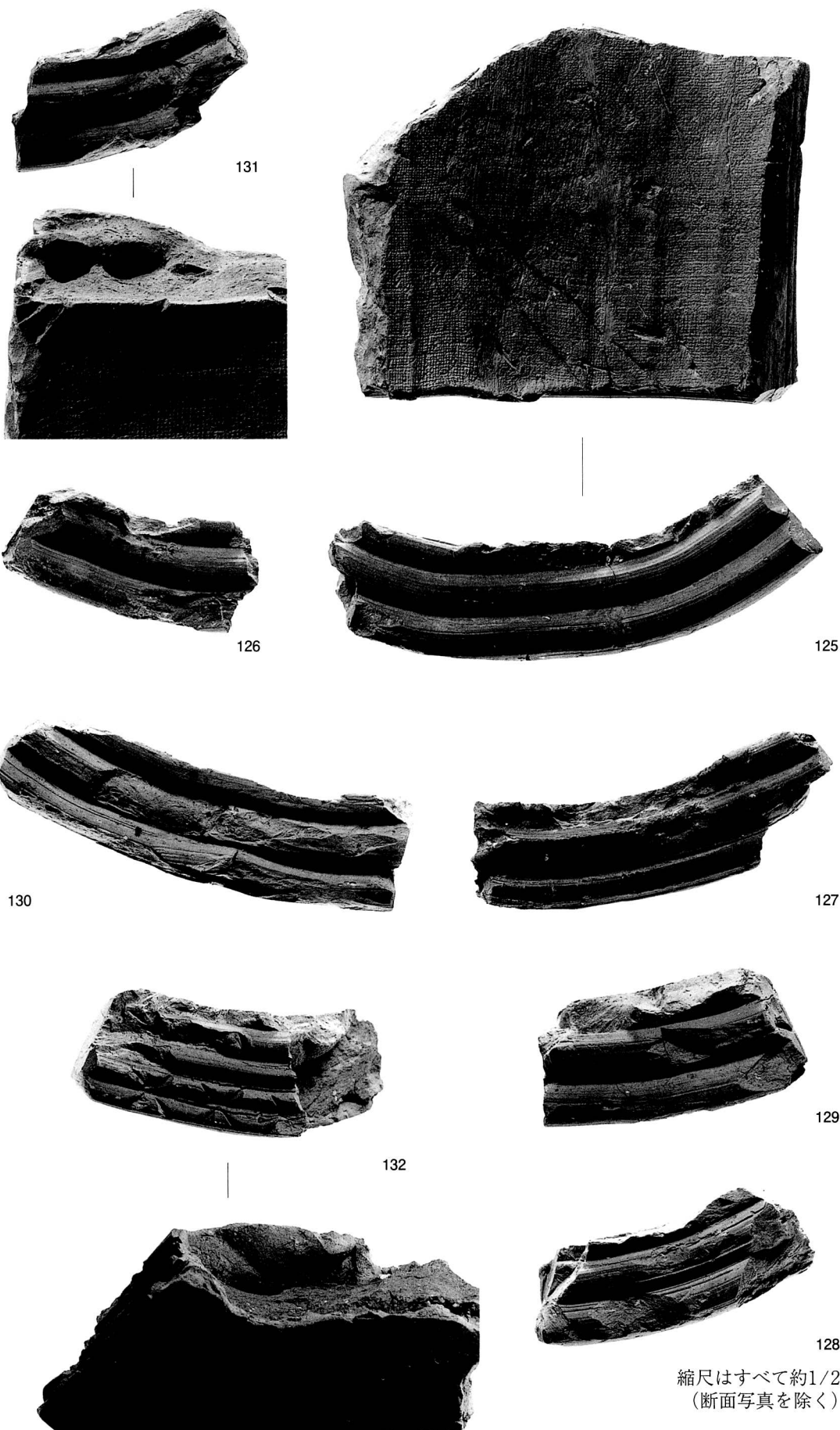


114  
(大阪歴史博物館所蔵品)

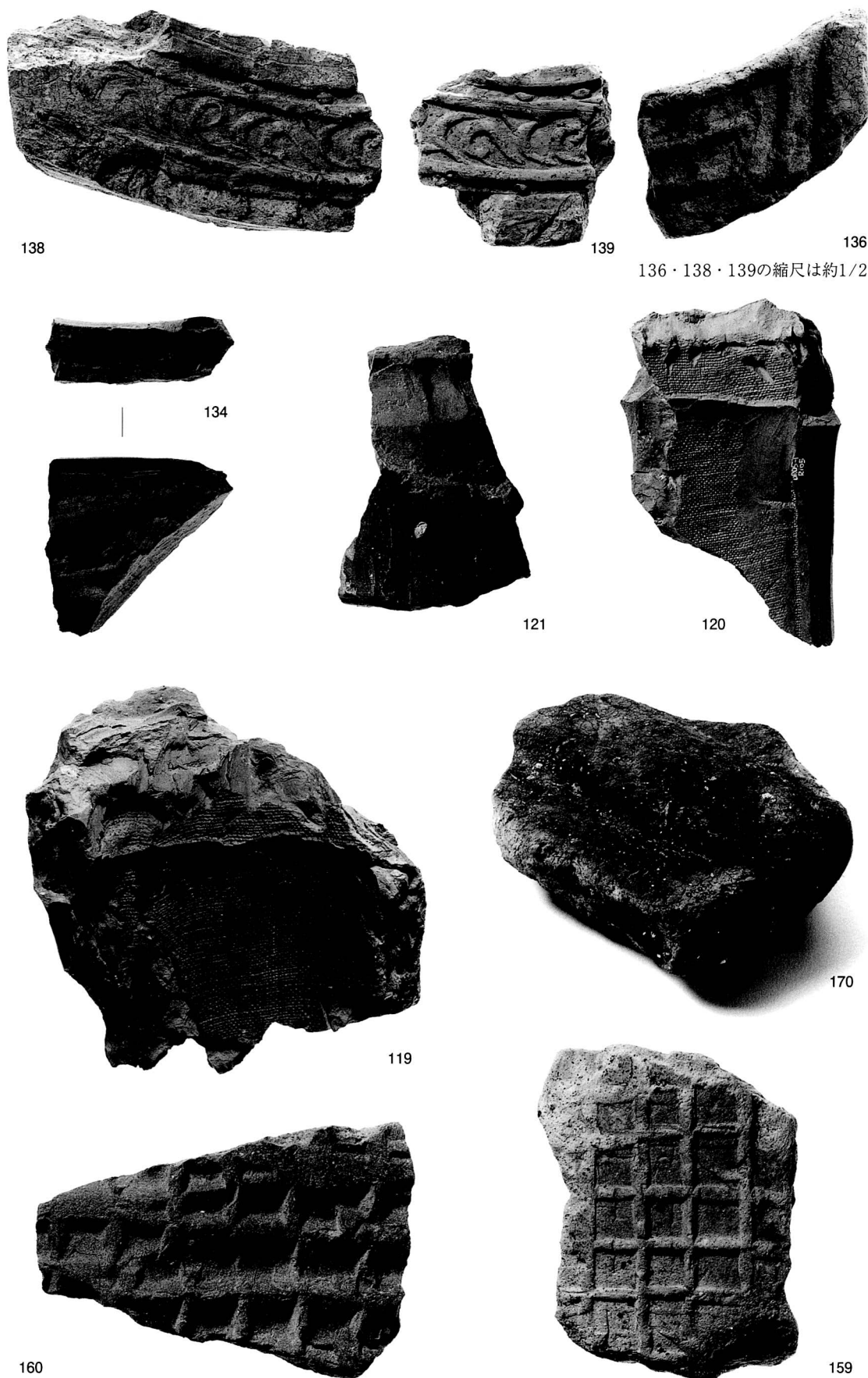


縮尺はすべて1/2  
(114瓦当裏面の写真を除く)

NM I A型式(114・116・117)、NM I B型式(115)



NH I A型式(125~131)、NH I B型式(132)



NHⅡ型式(136)、NHⅢ型式(138・139)、NHⅠA型式か(134)、  
NHⅠA型式の接合技法(119～121)、格子目タタキ(159・160)、不明品(170)



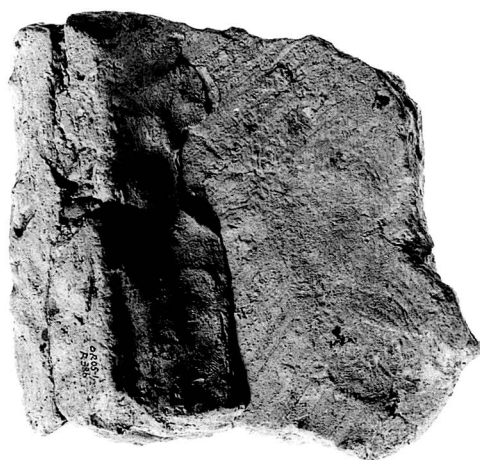
150



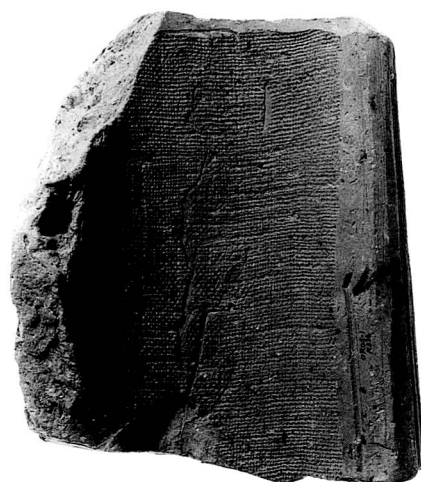
151



142



152



144



大阪市平野区 遠里小野遺跡発掘調査報告 I

ISBN -900687-96-0

2006年10月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8





**Archaeological Reports  
of  
Oriono Sites in Osaka, Japan**

**Volume I**

A Report of Excavations  
Prior to the Construction of  
the Municipal Apartmenthouse

October 2006

Osaka City Cultural Properties Association



**Archaeological Reports  
of  
Oriono Sites in Osaka, Japan**

**Volume I**

A Report of Excavations  
Prior to the Construction of  
the Municipal Apartmenthouse

October 2006

Osaka City Cultural Properties Association

| 頁  | 行・位置        | 誤      | 正      |
|----|-------------|--------|--------|
| 57 | 表3、119の出土位置 | SK2a01 | SD2b01 |
| 57 | 表3、120の出土位置 | SD2b04 | SD2a03 |
| 57 | 表3、128の出土位置 | SK2a02 | SD2b01 |
| 65 | 表4、153の出土位置 | SD2b02 | SD2b04 |

